
比企郡鳩山町

天神台東遺跡

越辺川河川改修工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2013

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では、台風や集中豪雨などによって引き起こされる浸水被害や土砂災害から県民の生命や財産を守るため、堤防の強化整備や河川改修などの治水対策に取り組んでいます。

国土交通省でも、人と自然の調和を図りながら県の中央部を流れる荒川流域全体の治水安全度を向上させ、水害のない安全な地域づくりを目指しています。

鳩山町赤沼地内に計画された越辺川河川改修工事事業もその一環であります。同地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在し、今回発掘調査を実施した天神台東遺跡もその中の一つです。発掘調査は、同事業に伴う事前調査であり、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代前期の大型住居跡をはじめ、弥生時代から中世に至る遺構や遺物が数多く発見され、越辺川の度重なる氾濫と戦いながら、この地に暮らした人々の足跡をたどることができました。とりわけ、中世の井戸跡は石組や木組がよく残っており、当時の井戸の構造がわかるものとして貴重な成果となりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局荒川上流河川事務所、鳩山町教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 中 村 英 樹

例 言

1. 本書は、比企郡鳩山町大字赤沼に所在する天神台東遺跡（第4次）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

天神台東遺跡第4次調査（天神台東4次）

比企郡鳩山町大字赤沼45番地1他

平成21年10月27日付け教生文第2-48号

3. 発掘調査は、越辺川河川改修工事事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、平成21年11月1日から平成22年2月17日まで、磯崎一、細田勝、山本禎、大谷徹が担当して実施した。

整理・報告書作成事業は、平成24年12月4日から平成25年3月31日まで、大谷が実施し、平

成25年3月25日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第404集として印刷・刊行した。

5. 発掘調査における基準点測量は、有限会社ジオプランニングに委託した。
6. 遺跡の空中写真撮影は、株式会社東京航業研究所に委託した。
7. 発掘調査における写真撮影は磯崎、細田、山本、大谷が、出土遺物の写真撮影は大谷が行った。
8. 出土品の整理・図版作成は大谷が行い、縄文土器は細田の協力を得た。
9. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、IV-1は細田、他は大谷が行った。
10. 本書の編集は大谷が行った。
11. 本書にかかる諸資料は、平成25年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
12. 発掘調査、本書の作成にあたり、鳩山町教育委員会をはじめ関係機関の皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

凡 例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系、国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36°00' 00"、東経139°50' 00")に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を指す。

F-4グリッド北西杭の座標は、X=-3370.000m、Y=-43900.000m、北緯35°58'07.0973"、東経139°20'47.7128"である。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本(1グリッド)とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット(A・B・C……)、西から東方向に数字(1・2・3……)を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばA-1グリッド等と呼称した。

4. 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

SJ……竪穴住居跡 SD……溝跡
SE……井戸跡 SK……土壙
ST……火葬跡 P……小穴・柱穴

5. 本書に掲載した遺構番号は、発掘調査時に付した番号を一部振り替えた。

6. 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。ただし、一部例外もある。

全体図 1:500 1:400
遺構図 1:60 1:80 1:160

縄文土器・弥生土器 1:4

土器拓影図 1:3

土師器・須恵器 1:4

石器 1:3 木製品 1:4 1:10

鉄製品 1:2 銭貨 3:4

7. 遺構断面図に記した水準数値は、海拔標高(単位m)を示す。

8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・口径・器高・底径はcm単位である。

・()内の数値は推定値を示す。

・[]内の数値は残存高を示す。

・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A-雲母 B-片岩 C-角閃石

D-長石 E-石英 F-軽石

G-砂粒子 H-赤色粒子 I-白色粒子

J-白色針状物質 K-黒色粒子

L-その他(小礫)

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けて示した。

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、注記No.、推定される須恵器の生産地などを記した。

9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/50,000地形図、鳩山町都市計画図1/2,500を編集・使用した。

目 次

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1	(2) 土壌	23
1.	発掘調査に至る経過	1	(3) グリッド出土遺物	24
2.	発掘調査・報告書作成の経過	2	3. 奈良・平安時代の遺構と遺物	25
(1)	発掘調査	2	(1) 竪穴住居跡	25
(2)	整理・報告書の作成	2	(2) 溝跡	49
3.	発掘調査・報告書作成の組織	2	(3) 土壌	49
II	遺跡の立地と環境	3	(4) グリッド出土遺物	51
1.	地理的環境	3	4. 中・近世の遺構と遺物	52
2.	歴史的環境	3	(1) 井戸跡	52
III	遺跡の概要	7	(2) 火葬跡	59
IV	遺構と遺物	11	(3) 溝跡	60
1.	縄文時代の遺構と遺物	11	(4) 土壌	61
(1)	竪穴住居跡	11	(5) ピット	62
(2)	土壌	15	(6) グリッド出土遺物	62
(3)	グリッド出土遺物	18	V 調査のまとめ	63
2.	弥生時代の遺構と遺物	20		
(1)	竪穴住居跡	20	写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	3	第31図 第5号住居跡	36
第2図 周辺の遺跡	5	第32図 第5号住居跡出土遺物	37
第3図 調査区位置図	7	第33図 第6号住居跡	38
第4図 天神台東遺跡全体図（1）	8	第34図 第6号住居跡出土遺物	39
第5図 天神台東遺跡全体図（2）	9	第35図 第7号住居跡	41
第6図 基本土層	10	第36図 第7号住居跡出土遺物	41
第7図 第15号住居跡（1）	12	第37図 第8号住居跡・出土遺物	42
第8図 第15号住居跡（2）	13	第38図 第9号住居跡	43
第9図 第15号住居跡出土遺物	14	第39図 第9号住居跡出土遺物	43
第10図 第16号住居跡	15	第40図 第11号住居跡	44
第11図 第4・6～8・10～16号土壙	16	第41図 第11号住居跡出土遺物	45
第12図 第4・14・15号土壙出土遺物	17	第42図 第12号住居跡	46
第13図 グリッド出土遺物	19	第43図 第12号住居跡出土遺物	47
第14図 第10号住居跡	20	第44図 第2号溝跡	49
第15図 第10号住居跡出土遺物	21	第45図 第2号溝跡出土遺物	50
第16図 第13号住居跡	22	第46図 第2・9号土壙	51
第17図 第14号住居跡	22	第47図 グリッド出土遺物	51
第18図 第14号住居跡出土遺物	23	第48図 第1～4号井戸跡	53
第19図 第3号土壙	23	第49図 第1～4号井戸跡出土遺物	54
第20図 第3号土壙出土遺物	24	第50図 第4号井戸跡井戸枠復元図	55
第21図 グリッド出土遺物	24	第51図 第4号井戸跡井戸枠材（1）	56
第22図 第1号住居跡	25	第52図 第4号井戸跡井戸枠材（2）	57
第23図 第1号住居跡出土遺物	26	第53図 第4号井戸跡井戸枠材（3）	58
第24図 第2号住居跡	28	第54図 第1号火葬跡	59
第25図 第2号住居跡出土遺物（1）	29	第55図 第1・3号溝跡・出土遺物	60
第26図 第2号住居跡出土遺物（2）	30	第56図 第4・5号溝跡	61
第27図 第3号住居跡	31	第57図 第1号土壙・出土遺物	61
第28図 第3号住居跡出土遺物	32	第58図 焼土ピット	62
第29図 第4号住居跡	34	第59図 錢貨	62
第30図 第4号住居跡出土遺物	35	第60図 奈良・平安時代の遺構変遷図	64

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	6	第13表 第8号住居跡出土遺物観察表	43
第2表 第10号住居跡出土遺物観察表	21	第14表 第9号住居跡出土遺物観察表	44
第3表 第14号住居跡出土遺物観察表	23	第15表 第11号住居跡出土遺物観察表	45
第4表 第3号土壙出土遺物観察表	24	第16表 第12号住居跡出土遺物観察表	48
第5表 グリッド出土遺物観察表	24	第17表 第2号溝跡出土遺物観察表	50
第6表 第1号住居跡出土遺物観察表	27	第18表 グリッド出土遺物観察表	51
第7表 第2号住居跡出土遺物観察表	30	第19表 第1～4号井戸跡出土遺物観察表	54
第8表 第3号住居跡出土遺物観察表	33	第20表 第4号井戸跡井戸枠材観察表	59
第9表 第4号住居跡出土遺物観察表	35	第21表 第1号溝跡出土遺物観察表	60
第10表 第5号住居跡出土遺物観察表	37	第22表 第1号土壙出土遺物観察表	61
第11表 第6号住居跡出土遺物観察表	40	第23表 錢貨観察表	62
第12表 第7号住居跡出土遺物観察表	42		

写真図版目次

- 図版1 1 遺跡遠景（南上空から）
2 遺跡遠景（北上空から）
3 遺跡近景（西上空から）
4 遺跡近景（北上空から）
5 調査区上層全景（西から）
6 調査区上層全景（東から）
7 調査区下層全景（西から）
8 調査区下層全景（東から）
- 図版2 1 第15号住居跡（1）
2 第15号住居跡（2）
3 第15号住居跡炉跡
4 第15号住居跡遺物出土状況
5 第16号住居跡
6 第16号住居跡炉跡
7 第6号土壙
8 第7・8号土壙
- 図版3 1 第10号土壙
2 第11号土壙
3 第12号土壙
4 第15号土壙
5 第10号住居跡
6 第10号住居跡遺物出土状況（1）
7 第10号住居跡遺物出土状況（2）
8 第10号住居跡遺物出土状況（3）
- 図版4 1 第10号住居跡遺物出土状況（4）
2 第10号住居跡遺物出土状況（5）
3 第10号住居跡遺物出土状況（6）
4 第13号住居跡炉跡
5 第14号住居跡
6 第14号住居跡炉跡
7 第14号住居跡遺物出土状況
8 第3号土壙
- 図版5 1 第1号住居跡
2 第2号住居跡
3 第2号住居跡カマド
- 4 第2号住居跡遺物出土状況
5 第4号住居跡
6 第4号住居跡遺物出土状況
7 第5号住居跡
8 第5号住居跡カマド
- 図版6 1 第6号住居跡
2 第6号住居跡遺物出土状況
3 第6号住居跡円面硯出土状況
4 第7号住居跡
5 第8号住居跡
6 第9号住居跡
7 第9号住居跡カマド
8 第11号住居跡
- 図版7 1 第11号住居跡遺物出土状況
2 第12号住居跡
3 第2号溝跡
4 第1・2・3号井戸跡
5 第1号井戸跡
6 第2号井戸跡
7 第3号井戸跡（1）
8 第3号井戸跡（2）
- 図版8 1 第3号井戸跡（3）
2 第4号井戸跡（1）
3 第4号井戸跡（2）
4 第4号井戸跡（3）
5 第4号井戸跡（4）
6 第1号火葬跡
7 第1号溝跡
8 ピット群（D4・E3グリッド）
- 図版9 1 第15号住居跡（第9図1～18）
2 第15号住居跡
(第9図19～30・32・33)
- 図版10 1 第4・14・15号土壙
(第12図1～17)
2 グリッド出土遺物（第13図8～21）

- | | | |
|------|------------------------|-------------------------------|
| 図版11 | 1 グリッド出土遺物 (第13図1) | 10 第5号住居跡 (第32図17) |
| | 2 第10号住居跡 (第15図1) | 図版15 1 第6号住居跡 (第34図7) |
| | 3 第10号住居跡 (第15図2) | 2 第6号住居跡 (第34図9) |
| | 4 第10号住居跡 (第15図3) | 3 第6号住居跡 (第34図12) |
| | 5 第10号住居跡 (第15図6) | 4 第6号住居跡円面硯 (第34図22) |
| | 6 第14号住居跡 (第18図1) | 5 第7号住居跡 (第36図1) |
| 図版12 | 1 第14号住居跡 (第18図2~5) | 6 第7号住居跡 (第36図7) |
| | 2 第3号土壙 (第20図1) | 7 第9号住居跡 (第39図1) |
| | 3 第3号土壙 (第20図2・3・5) | 8 第9号住居跡 (第39図4) |
| | 4 第3号土壙 (第20図4) | 9 第11号住居跡 (第41図1) |
| | 5 グリッド出土遺物 (第21図1) | 図版16 1 第11号住居跡 (第41図6) |
| | 6 第10号住居跡 (第15図1) | 2 第11号住居跡 (第41図10) |
| | 7 第10号住居跡 (第15図4) | 3 第12号住居跡 (第43図3) |
| | 8 第14号住居跡 (第18図1) | 4 第12号住居跡 (第43図4) |
| | 9 第3号土壙 (第20図1) | 5 第12号住居跡 (第43図5) |
| | 10 第3号土壙 (第20図2) | 6 第12号住居跡 (第43図6) |
| | 11 第3号土壙 (第20図3) | 7 第12号住居跡ヘラ記号 (第43図8) |
| 図版13 | 1 第2号住居跡 (第25図1) | 8 第12号住居跡ヘラ記号 「×」
(第43図13) |
| | 2 第2号住居跡 (第25図2) | 図版17 1 第12号住居跡 (第43図7) |
| | 3 第2号住居跡 (第25図4) | 2 第12号住居跡 (第43図17) |
| | 4 第2号住居跡 (第25図5) | 3 第12号住居跡 (第43図19) |
| | 5 第2号住居跡 (第25図6) | 4 第12号住居跡 (第43図24) |
| | 6 第2号住居跡 (第25図7) | 5 第2号溝跡 (第45図1) |
| | 7 第2号住居跡 (第25図8) | 6 第2号溝跡 (第45図6) |
| | 8 第2号住居跡墨書「本」 (第25図13) | 7 第2号溝跡 (第45図7) |
| | 9 第2号住居跡 (第25図26) | 8 グリッド出土遺物 (第47図5) |
| | 10 第3号住居跡 (第28図9) | 9 第3号井戸跡 (第49図4) |
| 図版14 | 1 第3号住居跡 (第28図10) | 10 錢貨 (第59図1~3) |
| | 2 第3号住居跡 (第28図11) | 図版18 鉄製品 |
| | 3 第3号住居跡 (第28図12) | 1 第1号住居跡 (第23図19) |
| | 4 第3号住居跡 (第28図22) | 2 第2号住居跡 (第26図43) |
| | 5 第5号住居跡 (第32図1) | 3 第2号住居跡 (第26図44) |
| | 6 第5号住居跡 (第32図2) | 4 第2号住居跡 (第26図45) |
| | 7 第5号住居跡 (第32図3) | 5 第4号住居跡 (第30図21) |
| | 8 第5号住居跡 (第32図4) | 6 第4号住居跡 (第30図22) |
| | 9 第5号住居跡 (第32図7) | |

- 7 第6号住居跡（第34図25）
8 第7号住居跡（第36図10）
9 第7号住居跡（第36図11）
10 第11号住居跡（第41図14）
11 第12号住居跡（第43図33）
青磁碗
12 第2号井戸跡（第49図3）
13 第1号溝跡（第55図1）
14 第1号土壤（第57図1）
中世陶器・瓦質土器
15 第1号井戸跡（第49図1）
16 第1号井戸跡（第49図2）
17 第3号井戸跡（第49図5）
18 第3号井戸跡（第49図6）
19 第3号井戸跡（第49図7）
20 第3号井戸跡（第49図8）
21 第4号井戸跡（第49図10）
図版19 1 第4号井戸跡（第51図1）
2 第4号井戸跡（第51図2）
3 第4号井戸跡（第51図3）
4 第4号井戸跡（第51図4）
5 第4号井戸跡（第52図5）
6 第4号井戸跡（第52図6）
7 第4号井戸跡（第52図7）
8 第4号井戸跡（第52図8）
9 第4号井戸跡（第51図1）
10 第4号井戸跡（第52図5）
図版20 1 第4号井戸跡（第53図9）
2 第4号井戸跡（第53図10）
3 第4号井戸跡（第53図11）
4 第4号井戸跡（第53図12）
5 第4号井戸跡（第53図13）
6 第4号井戸跡（第53図14）
7 第4号井戸跡（第53図15）
8 第4号井戸跡（第53図16）
9 第4号井戸跡（第53図17）
10 第4号井戸跡（第53図18）

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県教育委員会（以下「県教委」）では、国土交通省関東地方整備局荒川上流河川事務所（以下「荒川上流河川事務所」）が越辺川流域で行う治水事業に係る埋蔵文化財の保護について、協議を重ね、調整を図ってきた。

治水事業は築堤整備事業が中心で、堤防の新設や堤防の高さを上げ、幅を広くし、現在の堤防を強化するものである。この築堤強化箇所とそれに使用する土を掘削する箇所が協議の対象となつた。

周知の埋蔵文化財包蔵地となっていない箇所についても、試掘による確認調査を実施し、遺構の有無を確認しながら調整を行つた。

本報告書にかかる箇所については、工事計画に先立ち荒川上流河川事務所長より、平成20年7月28日付け荒上調第9号で埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて、埼玉県教育委員会教育長（以下「県教育長」）あての照会文があった。

生涯学習文化財課では、試掘による確認調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成21年2月12日付け教生文第2366-1号で次の内容の回答を行つた。

1 埋蔵文化財の所在

事業予定地内には、次の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

(中略)

左岸・鳩山町

名称：天神台東遺跡（No.40-078）

種別：散布地

時代：奈良、平安

所在地：比企郡鳩山町大字赤沼色原、天神台

他

員数：1

2 法手続

工事予定地内には、別図のとおり、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事を行う場合には、工事着手前に文化財保護法第94条の規程による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

別図「発掘調査を要する区域」について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

(以下略)

その取扱いについて協議を重ねたが、水害のない安全な地域づくりのために、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。

また、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時、以下「事業団」）が受託することになった。

文化財保護法第94条による埋蔵文化財発掘通知が荒川上流河川事務所長から提出され、同条2項の規程により、記録保存のための発掘調査を実施するよう県教委教育長から平成21年7月10日付け教生文第4-336号で勧告した。

その後、事業団理事長から文化財保護法第92条の規程による発掘調査届が提出され、発掘調査が実施された。

発掘調査届に対する指示は、平成21年10月27日付け教生文第2-48号で通知された。

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

天神台東遺跡第4次調査は、平成21年11月1日から平成22年2月17日まで実施した。

11月上旬に発掘事務所の設営と並行して、調査区の保護と安全確保のため囲柵工事を行い、重機による表土除去を開始した。その後、人力による遺構確認作業に着手し、遺構精査を実施した。

11月下旬には基準点測量を業者に委託し、基準杭を打設した。これを基に、精査した遺構の断面図・平面図などを作成し、写真撮影を行った。

1月上旬に下層の遺構確認のため重機によるトレーナー調査を行ったところ、縄文時代前期の遺構が検出された。1月中旬に上層の調査を終了し、空中写真撮影を行った。撮影終了後、重機により下層まで掘削作業を行い、その後、人力による遺構確認作業を行った。検出した縄文時代の住居跡や土壙の精査を行った後、同様の記録を残した。

2月上旬までに精査・記録作業を終了し、器材の撤収、発掘事務所の撤去及び調査区の埋戻しを行い、2月17日にすべての作業を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理報告書の作成作業は、平成24年12月4日から平成25年3月31日まで実施した。

12月上旬から出土遺物の水洗・注記を行い、出土土器の接合、石膏による補強復元を実施した。復元を終えた土器は順次、機械や手測りによる実測・手描きトレース・採拓を行い、遺物図版の版組を行った。

遺構図の作成は、遺物の作業と並行して行った。図面整理と修正を経て第二原図を作成した。第二原図をスキャナーでコンピューターに取り込み、画像ソフトを用いてトレースし、土層説明等のデータを加えて編集作業を行い、遺構図版の版下を作成した。

1月中旬から2月下旬にかけて遺構・遺物図版の割り付け、遺物の写真撮影と写真図版の作成を行うとともに、原稿執筆と編集作業を行った。2月末に原稿を印刷業者に入稿し、3回の校正を経て、平成25年3月25日に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成21年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆
総務部	
総務部副部長	昼 間 孝 志
総務課長	田 中 雅 人

調査部	
調査部長	小 野 美代子
調査部副部長	儀 崎 一
調査監兼調査第一課長	金 子 直 行
調査第二課長	細 田 勝
主査	山 本 複
主査	大 谷 徹

平成24年度（報告書作成）

理 事 長	中 村 英 樹
常務理事兼総務部長	根 本 勝
総務部	
総務部副部長	富 田 和 夫
総務課長	矢 島 将 和

調査部	
調査部長	昼 間 孝 志
調査部副部長	劍 持 和 夫
調査監兼整理第一課長	細 田 勝
主査	大 谷 徹

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

天神台東遺跡は、埼玉県中央部の比企丘陵南縁に位置している。比企丘陵は、秩父山地に沿った関東平野の東縁部に広がる丘陵の一つである。鳩山町周辺では岩殿丘陵と呼ばれるが、比企南丘陵や物見山丘陵の別名もある。最高所は標高140mの物見山西方の尾根で、平均して標高80～100mの丘陵内部には数多くの開析谷があり込み、谷底の水田面との比高差は概ね20～30mである。

これら岩殿丘陵内部の開析谷の中では、鳩川の開析した谷が最も規模が大きく、主谷から樹枝状に細い谷が多数発達している様子は、枝ぶりの良い樹木にたとえられる。

その広がりは現在の鳩山町の町域にほぼ重なっている。この緑豊かな丘陵から得られる豊富な森林資源と広い谷底耕地からの収穫物が、過去より

当地域を支えていたことは想像に難くない。

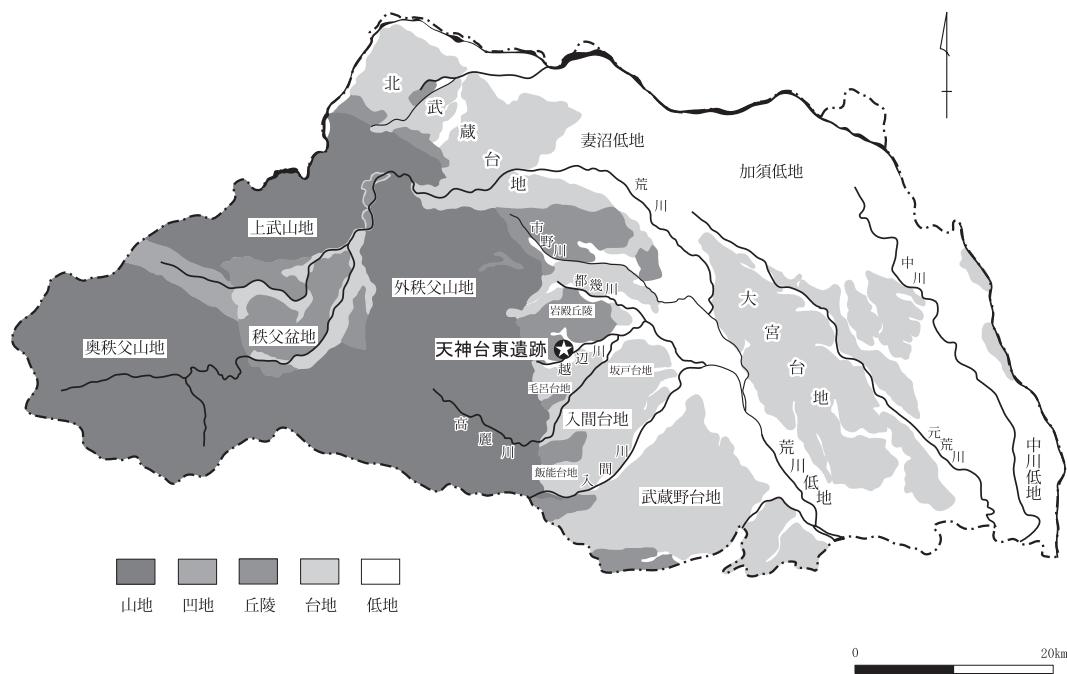
一方、この岩殿丘陵の南縁に沿って流れる越辺川も、鳩山町周辺の地理的景観を考える上で見逃すことができない。越辺川は源流を外秩父山地の分水嶺付近にもつ河川で、川島町南端で入間川に合流する。鳩山町の対岸にあたる坂戸市入西付近では、「入西条里」と呼ばれる肥沃な耕地を基盤に古墳時代以降多数の遺跡が形成されている。今回報告する天神台東遺跡の位置する鳩山町今宿地区も、おそらく同様の環境下にあったものと推定される。

なお、先にふれた鳩川も今宿地区で越辺川に注いでいる。丘陵に臨み、水系が集約される点で、この地域一帯は独特的な地理的環境にある。

2. 歴史的環境

天神台東遺跡の立地する比企丘陵周辺には、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈

良・平安時代、さらには中・近世の遺跡が数多く存在している。ここでは天神台東遺跡周辺の歴史



第1図 埼玉県の地形

的環境について概観する。

旧石器時代の確実な遺跡は、これまでのところ丘陵部では確認されていない。

縄文時代になると、草創期の追ヶ谷戸遺跡(34)で多縄文系の土器片と尖頭器が、虫草山遺跡(42)で尖頭器が出土している。早期には遺跡数も増え、撲糸文や押型文土器を出土した追ヶ谷戸遺跡、条痕文土器を出土した虫草山遺跡などで住居跡が検出されている。前期は早期と同じ丘陵上の立地を受け継ぐとともに、河川近くの台地上にも集落が進出し、その数も増加する。天神台東遺跡(1)で発見された黒浜式期の大型住居跡もその一例である。

中期でも後半になると集落は丘陵部から離れ、河川沿いの台地上に移動する。宿南遺跡(4)からは加曾利E式期の住居跡が検出されている。後期の調査例は少ないものの、中期からの継続的なあり方を示すようである。同様に晩期の遺跡の分布も希薄であるが、越辺川左岸の天神台遺跡(2)からは千網式土器が出土している。

弥生時代前期の遺跡は今のところ発見されていないが、葛川流域の西ヶ谷北遺跡(97)では中期後半の宮ノ台式期の住居跡が、後期では天神台東遺跡で岩鼻式期の住居跡や土壙が検出されている。また、赤沼高在家遺跡(10)では網目状撲糸文をもつ壺形土器片が出土している。天神台東遺跡周辺の東松山市や坂戸市では、弥生時代後期の岩鼻式や吉ヶ谷式土器を出土する集落遺跡が数多く分布するのに対し、越辺川中流域では天神台東遺跡のように小規模な遺跡が少数見られるのみである。

古墳時代前期の集落では、越辺川左岸の台地上に糀谷遺跡(6)、対岸に稻荷前遺跡(85)などの大規模な集落が形成される。また、隣接する広面遺跡(89)や中耕遺跡(90)では、大規模な方形周溝墓群が形成されている。丘陵部内の遺跡は希薄であるのに対し、越辺川流域で遺跡が増加している事実は、自然堤防などの低地に生活の拠点が移行し

たことを示している。

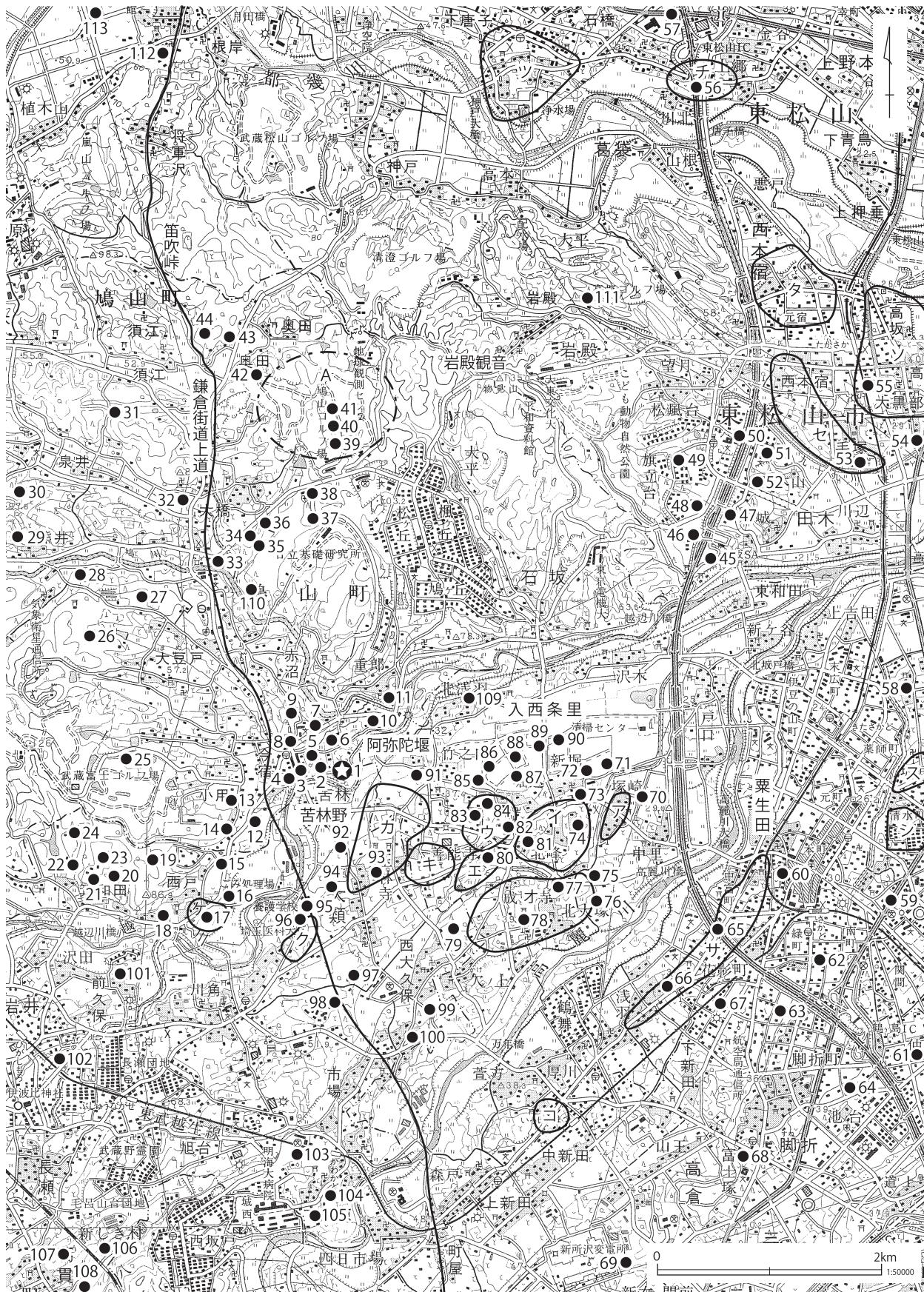
古墳時代中期の集落としては、葛川右岸の低台上の矢島遺跡(103)が知られるだけである。

古墳時代後期の集落は越辺川右岸の毛呂台地や坂戸台地、比企丘陵東端の高坂台地などに広がる。毛呂台地には下田遺跡(70)、金井遺跡(72)、塚の越遺跡(84)、稻荷前遺跡などが存在する。

古墳は鳩山町にはほとんど築造されず、わずかに越辺川左岸の急崖に十郎横穴墓群(11)が存在するのみである。横穴墓の分布は、吉見百穴横穴墓群や黒岩横穴墓群などのある比企北丘陵地域を中心である。一方、追ヶ谷戸遺跡では横穴式石室をもつ小円墳が築造されている。この横穴式石室は奥壁に凝灰質砂岩の切石をもち、側壁に河原石を積み上げた胴張り形である。石室の構造は川角古墳群(ク)、西戸古墳群(ケ)などと類似しており、越辺川中流域での地域性が窺われる。また、苦林古墳群(カ)では前方後円墳5基、円墳50基以上が確認されている。丘陵部には古墳時代後期の集落や古墳は少なく、対岸の越辺川右岸に広がる毛呂台地上とは対照的なあり方を示している。

古墳時代後期終末の7世紀後半になると、この地域で須恵器生産が開始される。赤沼地区の谷部では瓦陶兼業窯の石田1号窯跡(35)や赤沼古代瓦窯跡(36)が開窯し、小用廃寺(13)や勝呂廃寺に供給された瓦や須恵器を焼成している。石田1号窯跡では壊G、壊Bなどの須恵器のほかに、陶製仏殿といった特殊な器種も焼かれていた。

奈良時代の8世紀になると、赤沼の谷筋のやや奥まった場所に鳩山窯跡群(ア)が開窯して本格的な須恵器生産が行われ、東日本最大級の窯業地に成長した。小谷窯跡(39)や広町窯跡(41)でも大規模生産が始まり、小谷B窯跡群では全長15mにも及ぶ登り窯が横一列に並んで15基検出され、広町B窯跡群でも17基の登り窯が検出された。小谷B9号窯跡では特殊返り蓋と呼ばれる二重口縁蓋を焼成し、若葉台遺跡や武藏国分寺にも供給してい



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

1 天神台東遺跡	23 金谷遺跡	45 駒堀遺跡	67 羽折遺跡	89 広面遺跡	111 足利基氏館跡
2 天神台遺跡	24 北山遺跡	46 立野遺跡	68 鶴ヶ島中学西遺跡	90 中耕遺跡	112 大蔵館跡
3 宿遺跡	25 大竹遺跡	47 大塚原遺跡	69 新右衛門遺跡	91 長岡遺跡	113 行司免遺跡
4 宿南遺跡	26 中丸遺跡	48 緑山遺跡	70 下田遺跡	92 神明台遺跡	ア 塚崎古墳群
5 小路谷遺跡	27 泉井山下遺跡	49 根平遺跡	71 足洗遺跡	93 大類館跡	イ 北峰古墳群
6 粿谷遺跡	28 熊井二反田遺跡	50 舞台遺跡	72 金井遺跡	94 宿浦遺跡	ウ 三福寺古墳群
7 台遺跡	29 城添遺跡	51 桜山遺跡	73 内出遺跡	95 堂山下遺跡	エ 大河原古墳群
8 四反田遺跡	30 新沼窯跡	52 田木山遺跡	74 西浦遺跡	96 崇徳寺跡	オ 成願寺古墳群
9 峰古墳	31 大橋日影窯跡	53 杉の木遺跡	75 沼端遺跡	97 西ヶ谷北遺跡	カ 苦林古墳群
10 赤沼高在家遺跡	32 泉井山下遺跡	54 大西遺跡	76 中道北遺跡	98 鎌倉道遺跡	キ 善能寺古墳群
11 十郎横穴墓群	33 雷遺跡	55 下寺前遺跡	77 木瓜田遺跡	99 ままと遺跡	ク 川角古墳群
12 仮宿遺跡	34 追ヶ谷戸遺跡	56 附川遺跡	78 若宮遺跡	100 築地遺跡	ケ 西戸古墳群
13 小用廐寺	35 石田1号窯跡	57 雉子山遺跡	79 常楽寺遺跡	101 白綾遺跡	コ おはやし山古墳群
14 小用窯跡	36 赤沼古代瓦窯跡	58 宮ノ前遺跡	80 大河原遺跡	102 伴六遺跡	サ 浅羽野古墳群
15 久根下遺跡	37 境田遺跡	59 山田遺跡	81 北峰遺跡	103 矢島遺跡	シ 新山古墳群
16 清後下遺跡	38 熊井鎌倉遺跡	60 坂戸神社遺跡	82 三福寺遺跡	104 表B遺跡	ス 片柳古墳群
17 松の外遺跡	39 小谷遺跡	61 仲道柴山遺跡	83 稲荷森遺跡	105 上殿遺跡	セ 毛塚古墳群
18 愛宕下遺跡	40 柳原遺跡	62 一天狗遺跡	84 塚の越遺跡	106 下中尾遺跡	ソ 高坂古墳群
19 西戸西原遺跡	41 広町遺跡	63 上山田遺跡	85 稲荷前遺跡	107 東原遺跡	タ 謙訪山古墳群
20 大満山A遺跡	42 虫草山遺跡	64 雷電池東遺跡	86 棚田遺跡	108 中尾遺跡	チ 附川古墳群
21 大満山B遺跡	43 奥田大日向北遺跡	65 花影遺跡	87 田島遺跡	109 万福寺	ツ 下唐子古墳群
22 金沢遺跡	44 奥田後谷遺跡	66 宮裏遺跡	88 桑原遺跡	110 竹之城遺跡	ア 鳩山窯跡群

る。これら南比企窯跡群で焼かれた須恵器や瓦は、武藏国府や国内の郡家などで使用され、8世紀中頃から後半には一般集落にも流通した。

平安時代の9世紀初め頃になると、これまでの赤沼地区とは別に、外縁部に新たな窯が築かれるようになる。虫草山窯跡、大橋日陰窯跡(31)、鶴巻窯跡、亀の原窯跡などである。須恵器窯の拡散は、粘土採掘や燃料となる薪の調達を新たな場所に求めた結果と考えられている。

鳩山窯跡群の小谷・柳原(40)・広町遺跡では、工房を兼ねた竪穴住居跡140軒が検出されたことから、大規模な工人集落が存在したことは明らかである。さらに、窯業生産と密接に関連すると考えられる集落として、今宿東遺跡群の天神台遺跡、天神台東遺跡、糀谷遺跡、小路谷遺跡(5)、台遺跡(6)をはじめ、赤沼高在家遺跡、泉井山下遺跡(32)、仮宿遺跡(12)、小用遺跡(14)などが挙げられる。毛呂台地には長岡遺跡(91)や稻荷前遺跡、塚の越遺跡などの入西遺跡群が存在し、坂戸台地には東縁に勝呂遺跡群、台地中央部には若葉台遺跡や一天狗遺跡(62)などが存在する。窯業活動の展開とともに、周辺にはこれを支える大規模

集落が形成されていく様子が窺われる。

天神台東遺跡の西側に鎌倉街道上道が南北に走り、中世の遺跡も数多く存在している。竹之城遺跡(110)は13世紀を中心とする館跡と考えられている。また、堂山下遺跡(95)は鎌倉街道に面した「苦林宿」に比定されており、14世紀から16世紀にわたる建物群の変遷が捉えられた。周辺には三福寺遺跡(82)、崇徳寺跡(96)、大類館跡(93)などが存在する。北浅羽の万福寺(109)には武藏七党児玉党の流れをくむ浅羽氏の始祖、浅羽小太夫行成追善の板碑が残されていることから、この地に浅羽氏館があったと推定されている。入西遺跡群の金井遺跡B区では梵鐘や仏具、鍋・農具などの鋳造製品を生産した13世紀後半の工房跡が発見されている。また、桑原遺跡(88)では一辺120mの溝で囲まれた空間の面的な調査により、15世紀から16世紀にかけての村落構造の一端が明らかにされた。

鎌倉街道の笛吹峠を越えると源義賢の館とされる大蔵館跡(112)や行司免遺跡(113)もあり、鎌倉街道を中心に栄えた様子が窺える地域となっている。

III 遺跡の概要

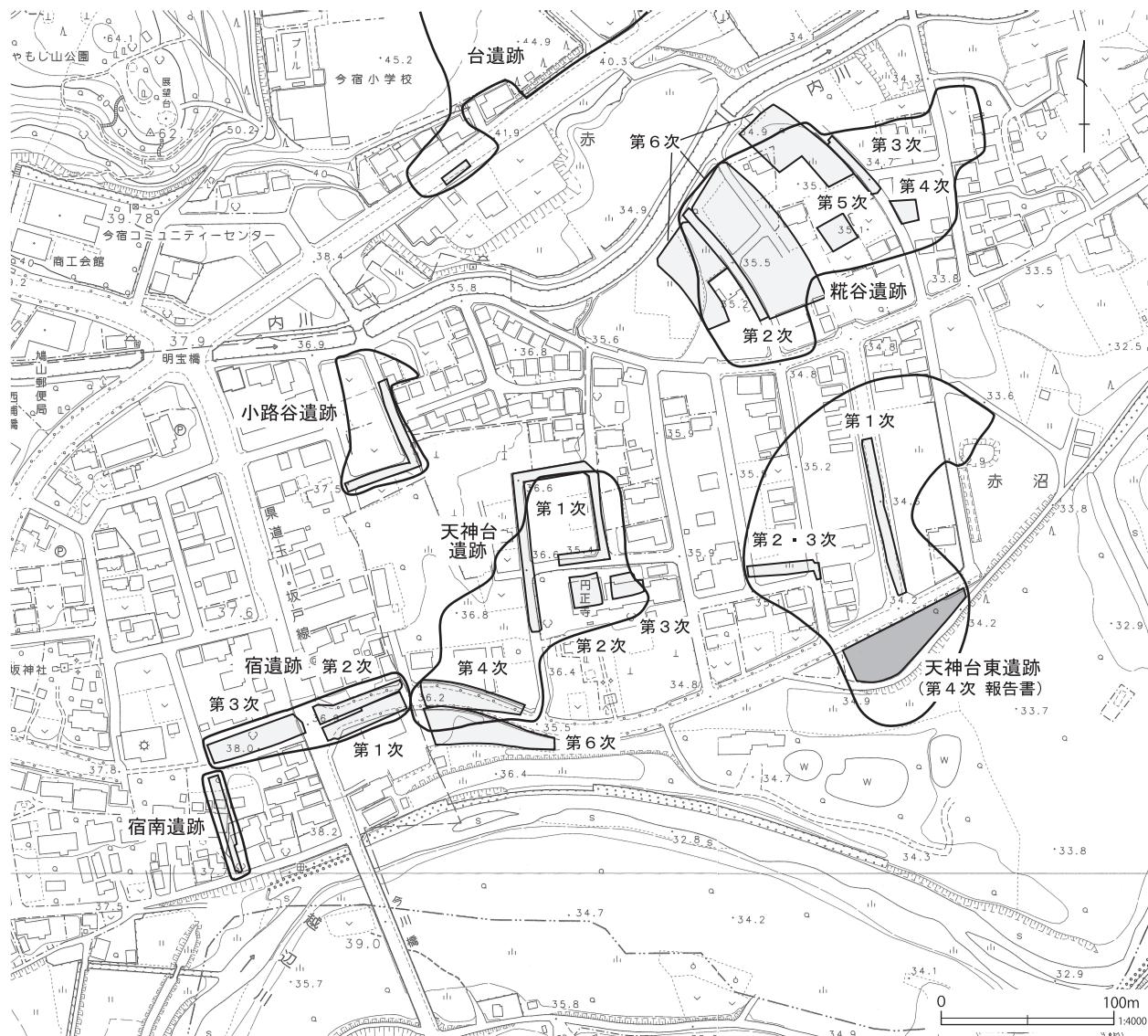
天神台東遺跡は、比企丘陵南縁を縁取るように流れる越辺川中流域左岸の河岸段丘上に位置する。この河岸段丘上の平地部に隣接する7遺跡を総称して、今宿東遺跡群と呼んでいる(第3図)。

越生町方面から南流してきた越辺川が、遺跡群付近において大きく蛇行しながら、東から北東に流路の向きを変える。遺跡群を載せる平地部は、北側が内川によって画され、鳩川と越辺川が合流する今宿地区まで、半島状に大きくせり出している。標高35~37mの平坦地で、越辺川の河床との

比高差は約4mである。

天神台東遺跡は土地区画整理事業に伴い、鳩山町教育委員会によって平成7年度以降、3次にわたる調査が実施されており、今回の調査が第4次調査にあたる。

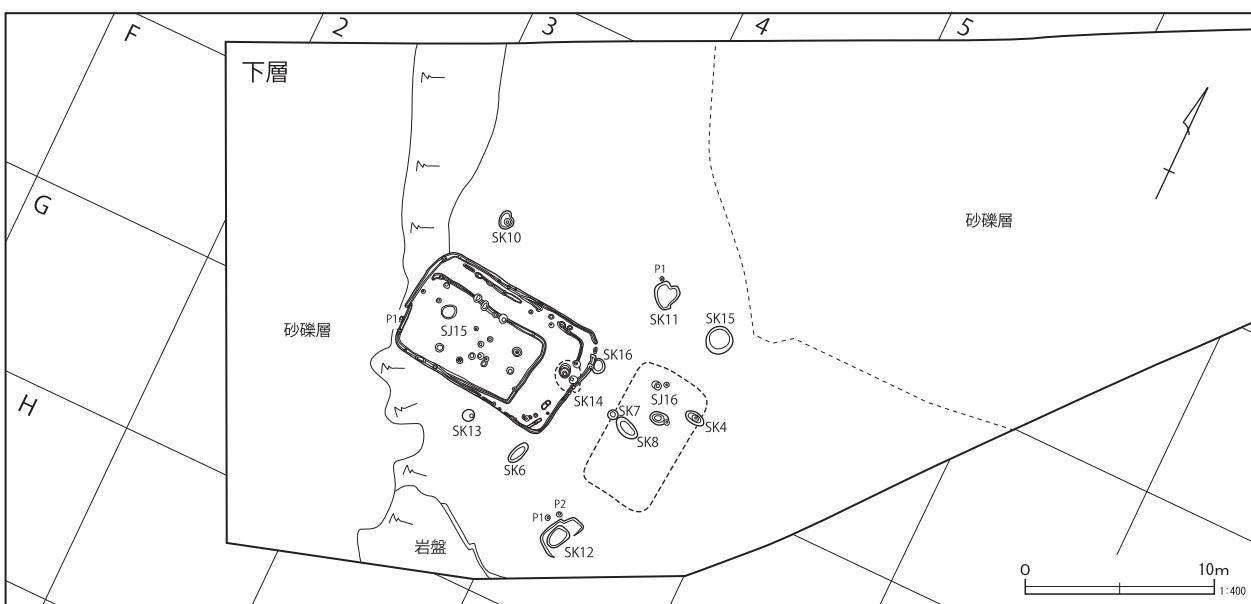
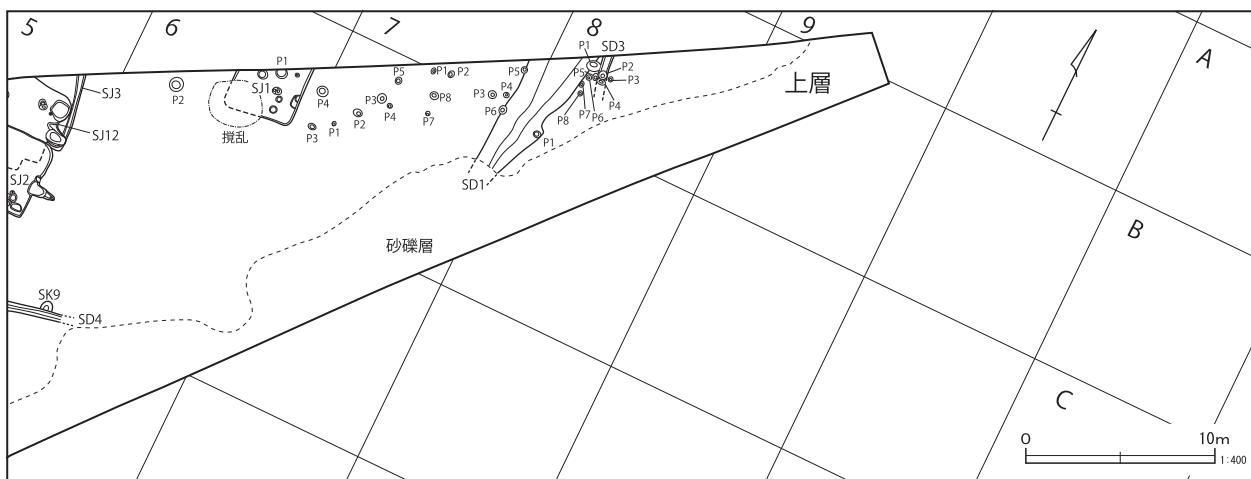
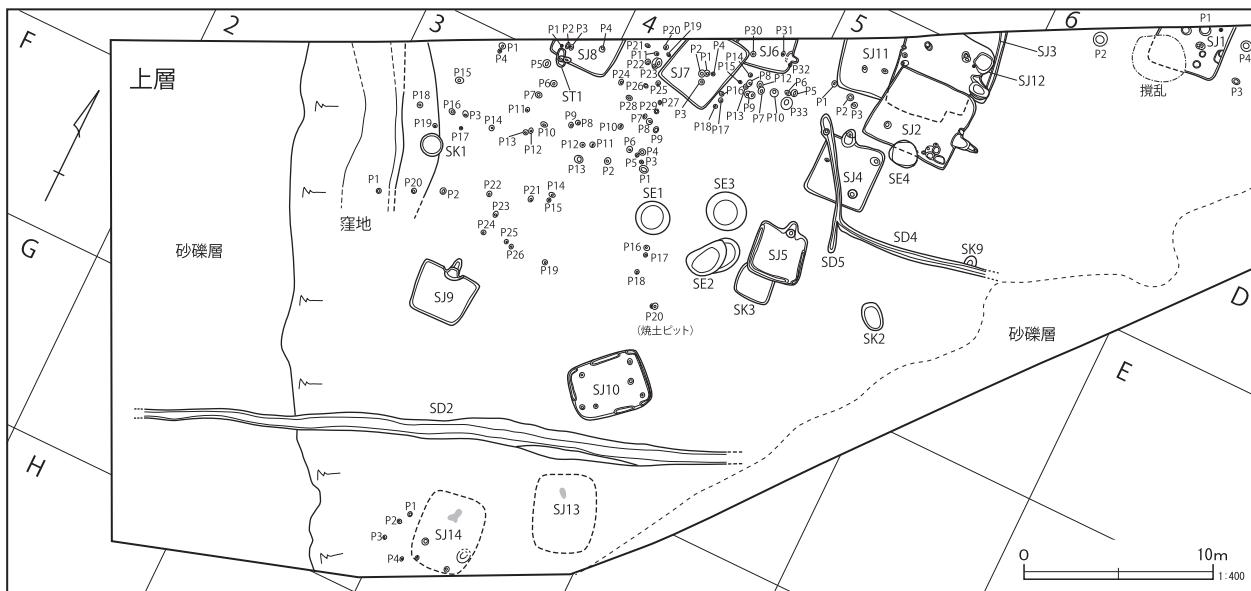
これまでの調査で、奈良・平安時代を中心とする集落跡であることが知られていた。今回、調査に先立って埼玉県生涯学習文化財課が実施した試掘調査により、奈良・平安時代を中心とする遺構面の下層にも、縄文時代の遺構・遺物が存在する



第3図 調査区位置図



第4図 天神台東遺跡全体図（1）



第5図 天神台東遺跡全体図 (2)

ことが確認された。

本調査の結果、弥生時代後期から中・近世にわたる上層遺構検出面（標高36.7m前後）と、縄文時代前期を中心とする下層遺構検出面（標高35.5m前後）の二面が確認された。検出された遺構は、下層遺構検出面において縄文時代前期の堅穴住居跡2軒、土壙11基、ピット4基、上層遺構検出面において弥生時代後期の堅穴住居跡3軒、土壙1基、奈良・平安時代の堅穴住居跡11軒、溝跡1条、土壙2基、中・近世の井戸跡4基、火葬跡1基、溝跡4条、土壙1基、ピット117基である。

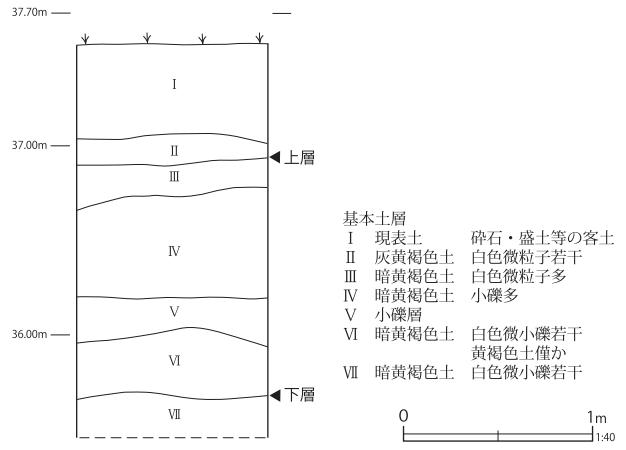
基本土層（第6図）は、調査区の狭い範囲内でも、ローム質の暗黄褐色土（Ⅲ層）、小礫混じりの暗黄褐色土（IV層）、物見山礫層と呼ばれる砂礫層、比企丘陵の基盤層である凝灰岩の岩盤などが見られ、目まぐるしく変化していた。河川の影響を受けやすい環境下にあるため、旧河道と考えられる岩盤や砂礫層の窪地（谷地形）に、シルトやローム質土が複雑に堆積したことによるものであろう。

次に、各時代の様相について概観したい。

縄文時代の遺構は調査区南西側に集中し、地形に大きく左右された分布状況を示す。それは、調査区の西側には岩盤の隆起した部分が露出し、これを覆うように砂礫層が発達していたのに対し、調査区の北東側は越辺川を起源とする砂礫を多量に含む暗黄褐色土が厚く堆積しており、本来は谷地形を形成していたものと推定されることによる。おそらく縄文時代の人々は、谷部の緩やかな斜面地を選んで暮らしていたのであろう。

その後、越辺川や内川に由来する堆積土によって谷地形の埋没は進み、安定した地形が形成された。そして、弥生時代以降は人々の生活の舞台となつた。

弥生時代の遺構は、調査区の南西側から中央にかけて住居跡と土壙が検出された。櫛描文系の岩鼻式土器を出土しており、後期初頭の比較的短期



第6図 基本土層

間に営まれた小規模集落と考えられる。

今回、古墳時代の遺構は検出されなかったが、天神台東遺跡の北側の内川に面する糀谷遺跡では、古墳時代前期から中期前半の遺構・遺物が検出されている。ただし、遺跡群内では古墳時代後期の検出例はなく、空白期となっている。

再び遺跡群内に人々の足跡が見られるようになるのは、古墳時代後期終末（飛鳥時代）になってからである。今回の調査では該期の遺構は検出されなかったが、第2号溝跡から7世紀後半の比企型壺が出土していることは、周辺に該期の遺構の存在を想定させるものである。

奈良・平安時代の遺構は、調査区中央の北側に集中していた。隣接する第1次調査の成果によると、集落域はさらに北側にも広がっていることがわかる。丘陵地帯に展開する窯業生産を背景に、対岸の入西遺跡群と密接な関連をもって展開した集落跡として位置づけることができる。

中・近世では、石組や木組の井戸跡をはじめ、火葬跡、溝跡、土壙などが検出された。出土遺物はいずれも14世紀前半に位置づけられる。貞治2年（1363）、鎌倉公方足利基氏と芳賀禪可の対立により、激しい合戦の舞台となった苦林野（毛呂山町）や岩殿山（東松山市）に隣接する地域でもあることから、集落が短期間で途絶した歴史的背景についても今後問題となろう。

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、調査区南側のF・G-3・4グリッドを中心とする下層遺構検出面において、前期（黒浜式期）の竪穴住居跡2軒、土壙11基、ピット4基を検出した。

（1）竪穴住居跡

第15号住居跡（第7・8図）

F・G-3・4グリッドに位置する。壁溝や柱穴の観察から、2回にわたって拡張された住居跡であることが判明した。ここでは便宜的に拡張前の住居跡をSJ15a、1回目の拡張後の住居跡をSJ15b、2回目の拡張後の住居跡をSJ15cと呼称する。

住居跡の平面形は、軸方向を東西にとる隅丸長方形である。拡張前のSJ15aの規模は長軸7.34m、短軸4.03～4.53mの隅丸長方形で、壁溝はほぼ全周していた。

1回目の拡張は、SJ15aの南東隅部を起点として、北辺と東辺を大きく拡張したものである。SJ15bの規模は長軸9.81m、短軸5.63mで、壁溝は北辺から東辺にかけて部分的に巡っていた。

2回目の拡張は1回目に比べると、北辺と東辺を一回り大きくしたにすぎないが、SJ15cの規模は、最終的に長軸10.10m、短軸6.24mにまで拡張されていた。住居跡の主軸方位はほぼ一定で、N-85°-Wを指す。

壁面は、砂礫層を掘り込んだ西壁の立ち上がりがかろうじて残っていたが、その他は壁溝のみの確認である。柱穴も多数検出されているが、主柱穴を特定するには至らなかった。覆土は最下層に堆積する第5・11・13・14層が、SJ15cの貼床に相当する。それよりも上層に堆積した土層は、東壁を削平していることから、河川の影響による堆積物と想定される。

炉跡は、中央の西寄りから検出された地床炉で

ある。長径82cm、短径80cmの浅い掘り込みで、底面に被熱面が部分的に残されていた。この炉跡はSJ15cに伴うもので、SJ15a・bの炉跡は拡張に伴い削平されたものと考えられる。

遺物は全体に少なく、炉跡と北西隅部寄りの壁溝際から出土したのみである。

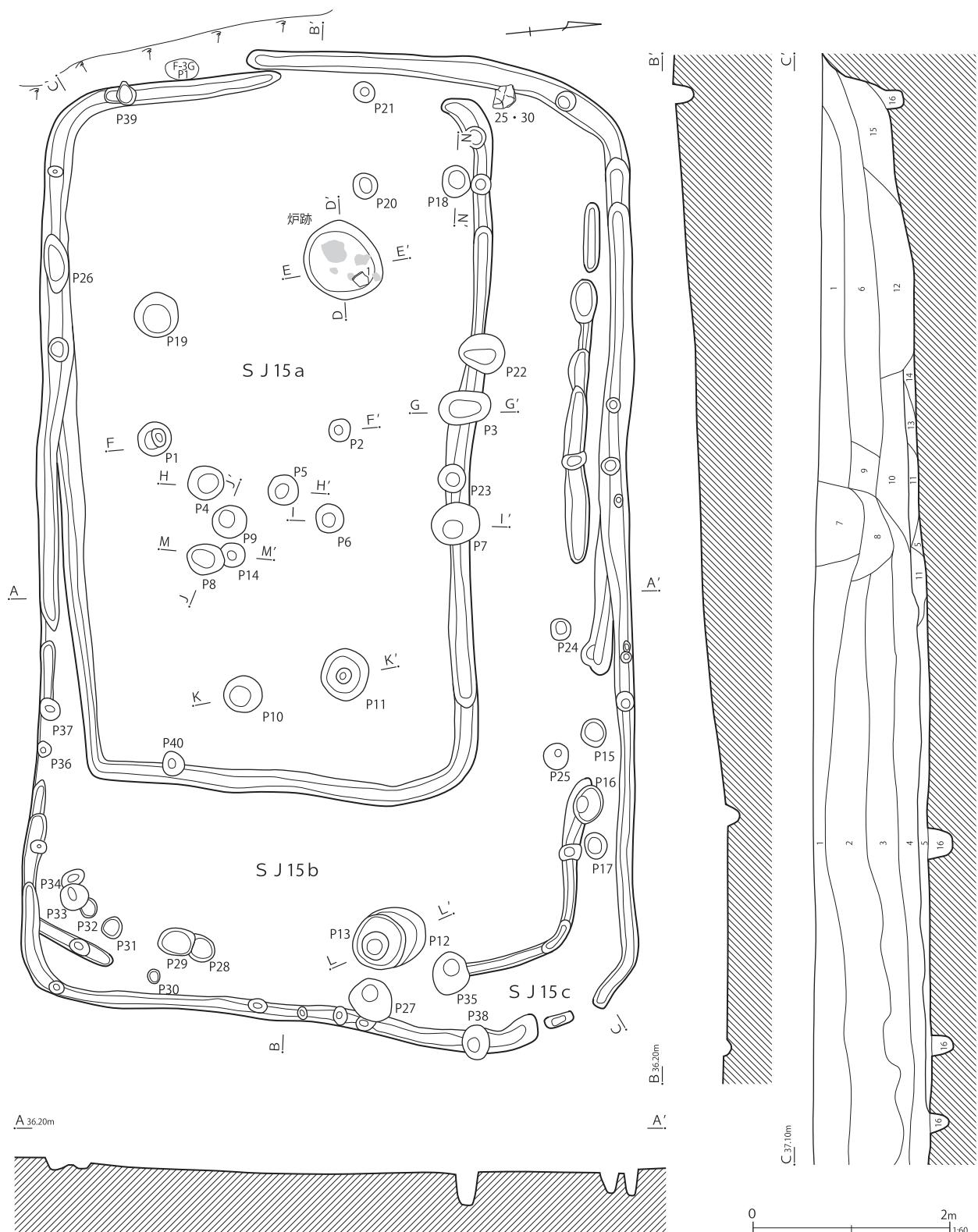
第9図に出土遺物を示した。出土した土器の主体は、纖維を含み羽状縄文が施文された土器群で、有尾式あるいは大形菱形文系土器と呼称されている。出土した土器の特徴から、最も古い段階と考えられ、関東東部の関山式終末期に平行する可能性がある。

1は羽状縄文が施文された大型の深鉢形土器である。0段多条の原体RLとLRで横方向に施文し、帯内と帯間で原体を換えることにより羽状構成を作り出している。胴部には接合部が残されているが、原体は接合部の粘土下にも観察されることから、接合以前に原体を施文し、接合後に再度施文し直したもので、羽状縄文系土器に特徴的な、追加整形施文法によるものであることがわかる。原体の長さは4cm程度と推定される。胎土には纖維を多く含み、内面は風化が進んでいる。胴部の推定径は41cmと大型の土器である。現存部の高さは14cmである。

2～9は半截竹管状の工具で、口縁部に菱形ないしは三角形のモチーフが描かれた土器である。

2は平縁で口唇部施文された2列の竹管文下に、2条の微隆起線が巡っている。隆起線間に区画され、枠状となる可能性がある。

3～9は口縁に大型の菱形モチーフが描かれる土器で、波状口縁と想定される。3・4は同一個体で、口唇直下のモチーフ接点に突起が貼付されているものとも思われる。沈線と列点は同一工具による。

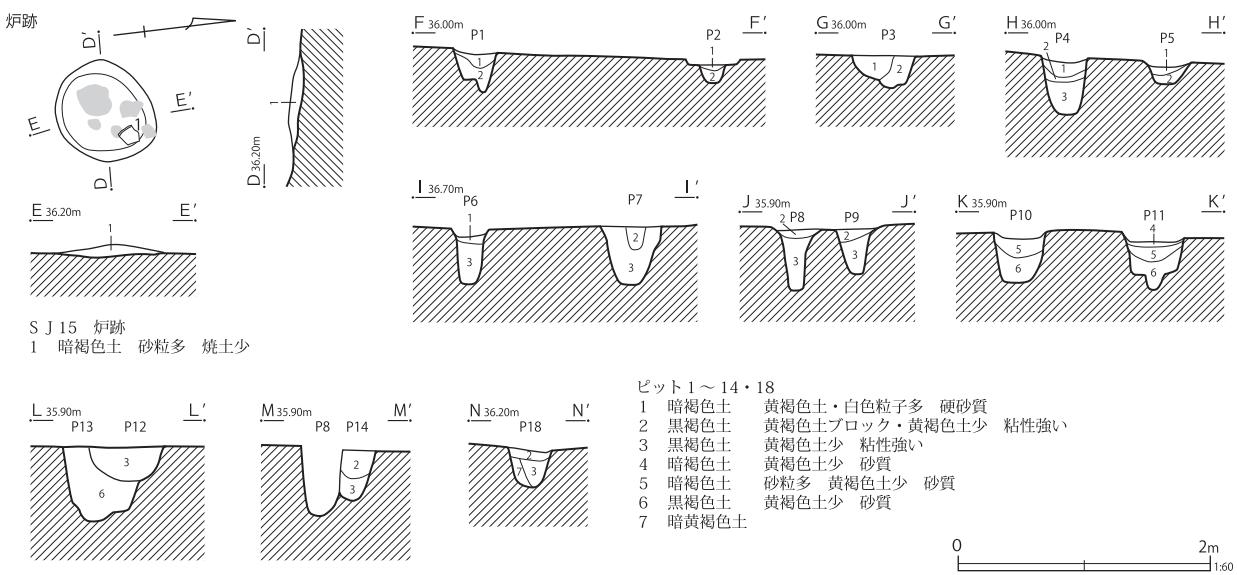


S J 15
 1 灰褐色土 風化白色小礫多
 2 暗褐色土 小礫・風化白色小礫若干
 3 暗褐色土 白色微粒子若干
 4 黑褐色土 白色微粒子極多
 5 暗黃褐色土 黃色粒子・白色粒子極多
 6 暗褐色土 風化白色粒子・白色微粒子多

7 暗褐色土 風化白色小礫多
 8 灰黃褐色土 風化黃色小礫含
 9 暗褐色土 風化白色粒子若干
 10 暗褐色土 磚・風化白色粒子含
 11 灰褐色土 白色粒子含
 12 暗褐色土 磚・風化小礫多

13 暗褐色土 白色粒子僅か
 14 黃褐色土 小礫含
 15 暗褐色土
 16 暗褐色土 白色粒子・灰色粒子含

第7図 第15号住居跡 (1)



第8図 第15号住居跡（2）

5はおそらく三角形のモチーフが描かれた土器と想定され、モチーフの中間に縦の竹管文が施されている。モチーフは半截竹管状工具による押し引きによるものである。

6～8は同一個体の可能性がある。口唇に沿つて描かれる竹管文内に、斜行する竹管文を付加することで、菱形モチーフを構成したものであろう。細い平行沈線間に、工具を異にした刺突列が施されている。

9～13は口縁部破片で、9・10はRL、12がR、13がLである。12は風化が著しく詳細が不明である。

9～31には地文のみの土器を掲載した。14・15は組紐を地文とする土器である。周辺には関山Ⅱ式期の住居もなく、破片も出土していないことから、この住居跡に伴った可能性が高い。この住居跡出土の有尾式土器の時間的位置関係を知る上で良好な伴出事例となろう。

16は付加条縄文で、住居から出土した破片は本例のみである。

18～21、27はRL 縄文で、18・21・28は0段多条である。27は0段多条のLR原体である。

22・25・26・30はRの原体、24・32はLの原体

であろう。23には縄の末端処理が結節風に残されている。

31は底部破片で、やや上げ底となっている。住居に伴うのは本例のみである。

33・34は諸磯b式土器で、混入品であろう。

35は磨石で、石材は閃緑岩である。円礫の周縁部は敲打によって多少整形されている。表裏平坦面は、使用による非常に平滑な磨り痕が見られる。長さ9.7cm、幅8.3cm、厚さ3.6cm、重さ424.3gである。

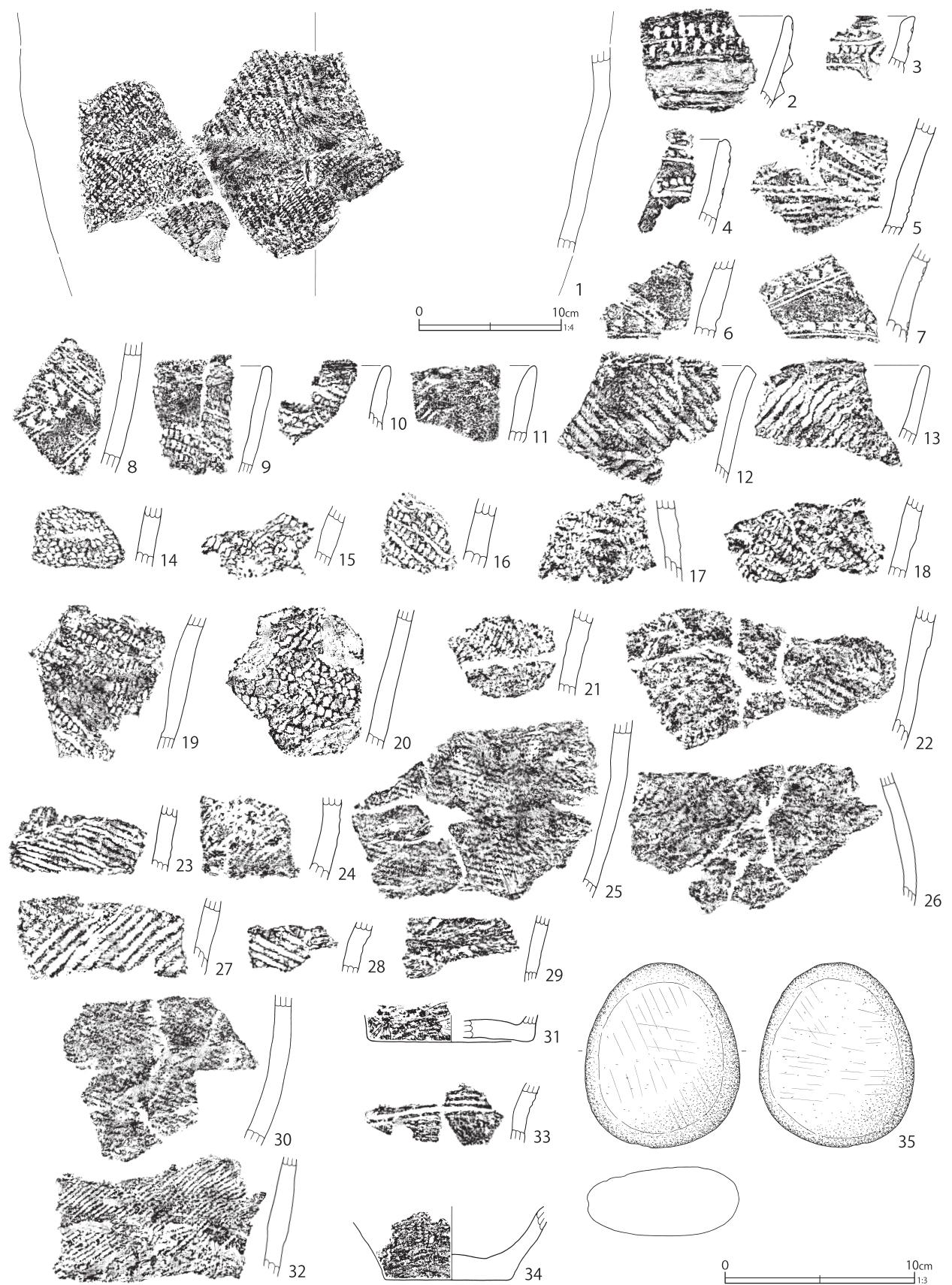
第16号住居跡（第10図）

調査区南側のF-4グリッドに位置し、第15号住居跡の東側に近接する。炉跡を中心に3基のピットが検出された。第15号住居跡と同様、河川の影響により、床面近くまで削平されており、住居跡の全容を把握することはできなかった。

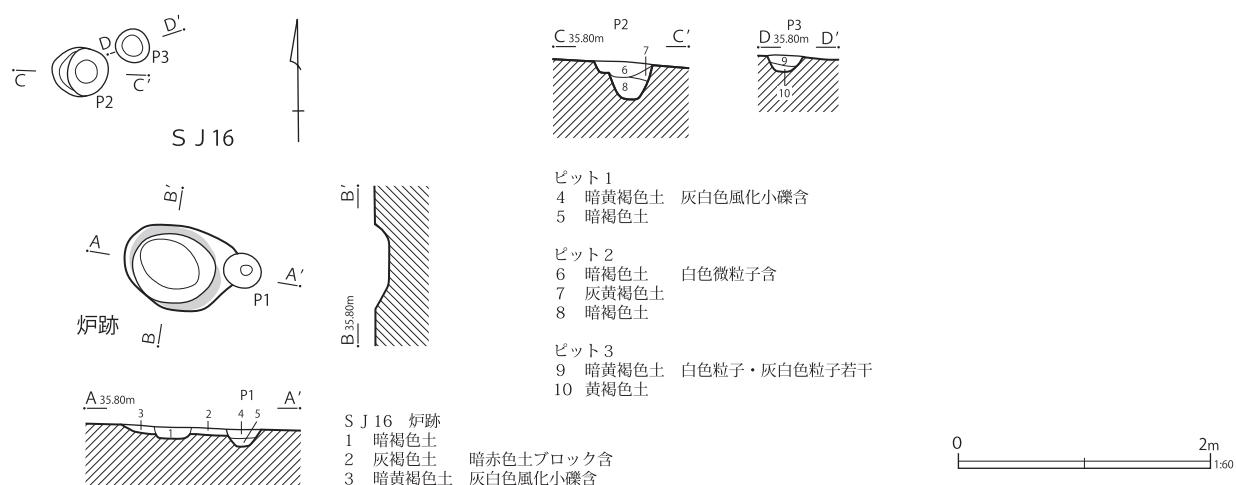
炉跡は平面楕円形で、東西に軸方向をとる。浅く皿状に掘り込まれ、壁面から底面の周縁にかけて被熱により赤色に焼け締まっていた。炉跡の規模は長径86cm、短径68cm、深さ10cmである。

住居跡に伴うピットとして、ピット1～3を検出した。

ピット1は平面円形で、径30cm、深さ13cmで



第9図 第15号住居跡出土遺物



第10図 第16号住居跡

ある。炉跡の東端に掘り込まれている。ピット2・3は炉跡の北西側に1.20mの距離を隔て、並列する。ピット2は平面円形で、直径46cm、短経39cm、深さ28cmである。ピット3は平面円形で、径26cm、深さ12cmである。

いずれも径が小さく、掘り込みは浅い。そのため柱穴として認定することは難しく、それ以外の用途の可能性も考えられる。

遺物がまったく出土していないため、時期は明確にし得ないが、隣接する第15号住居跡に近接した時期の所産であろう。

(2) 土壙

土壙は、第15号住居跡の周辺から11基が検出された。平面円形を基調とするものが多い。遺物を出土するものが少なく、時期を特定することは難しいが、覆土の状態から前期を中心とする所産と考えられる。

第4号土壙（第11図）

F-4グリッドに位置し、南西側に第16号住居跡の炉跡に隣接する。平面形は東西に軸方向をとる楕円形で、底面の中央にピットをもつ。規模は長径1.02m、短径0.56m、深さ0.43mである。主軸方位はN-76°-Wを指す。

覆土の観察から、土壙の中央部に底面にまで達する柱痕状の土層が確認されたが、用途等は明ら

かにできなかった。

遺物は前期の黒浜式土器の破片が少量出土した（第12図1・2）。

1・2は纖維を含む縄文施文の胴部破片で、同一個体であろう。

第6号土壙（第11図）

G-3グリッドに位置する。平面形は南北に軸方向をとる楕円形である。規模は長径1.45m、短径0.58m、深さ0.22mである。主軸方位はN-21°-Eを指す。

覆土は3層に分層され、自然堆積を示す。遺物が出土していないため、時期は明確ではない。

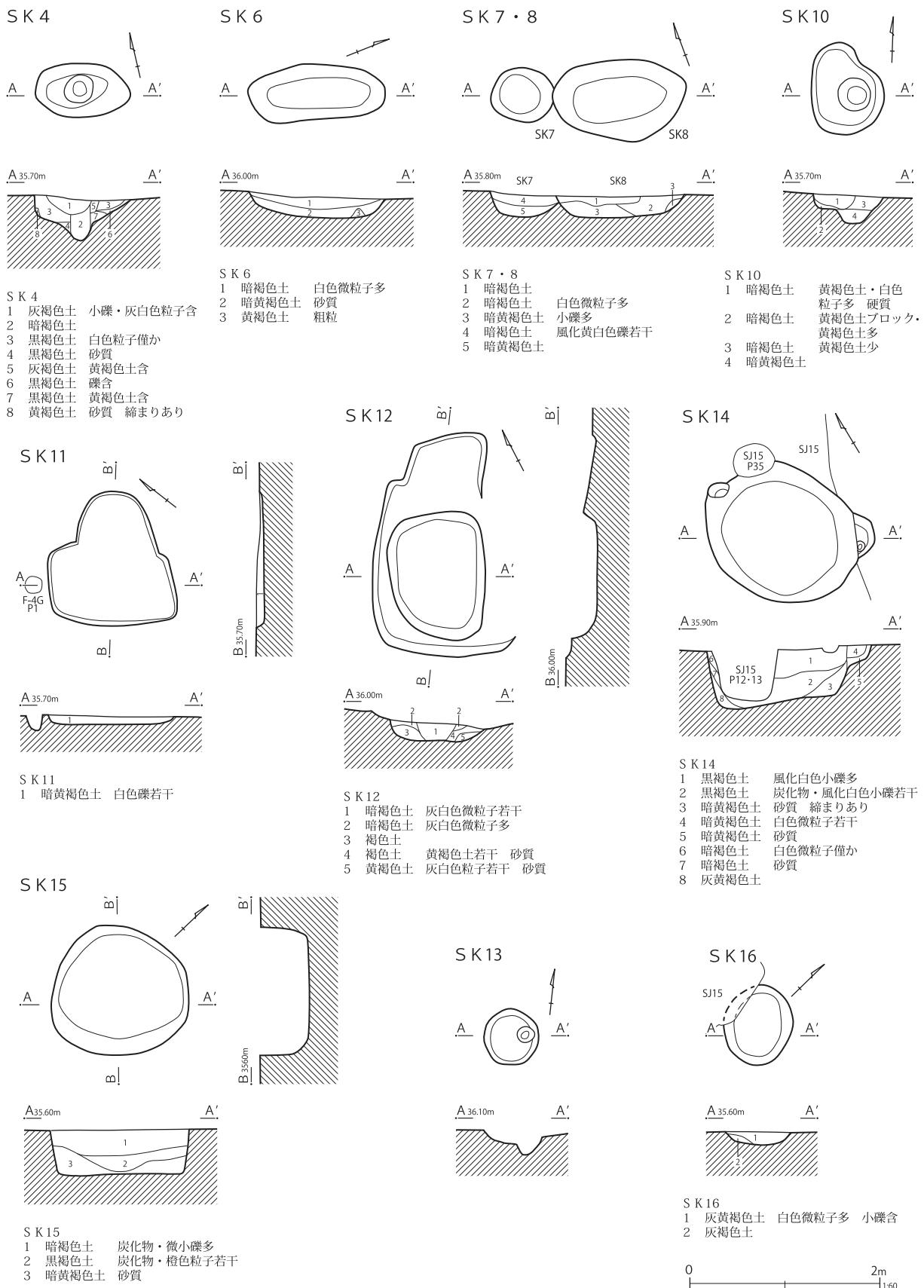
第7号土壙（第11図）

F-4グリッドに位置する。南東側に第8号土壙が接し、一部壁面が壊されていた。平面形は円形である。規模は長径0.64m、短径0.56m、深さ0.22mである。

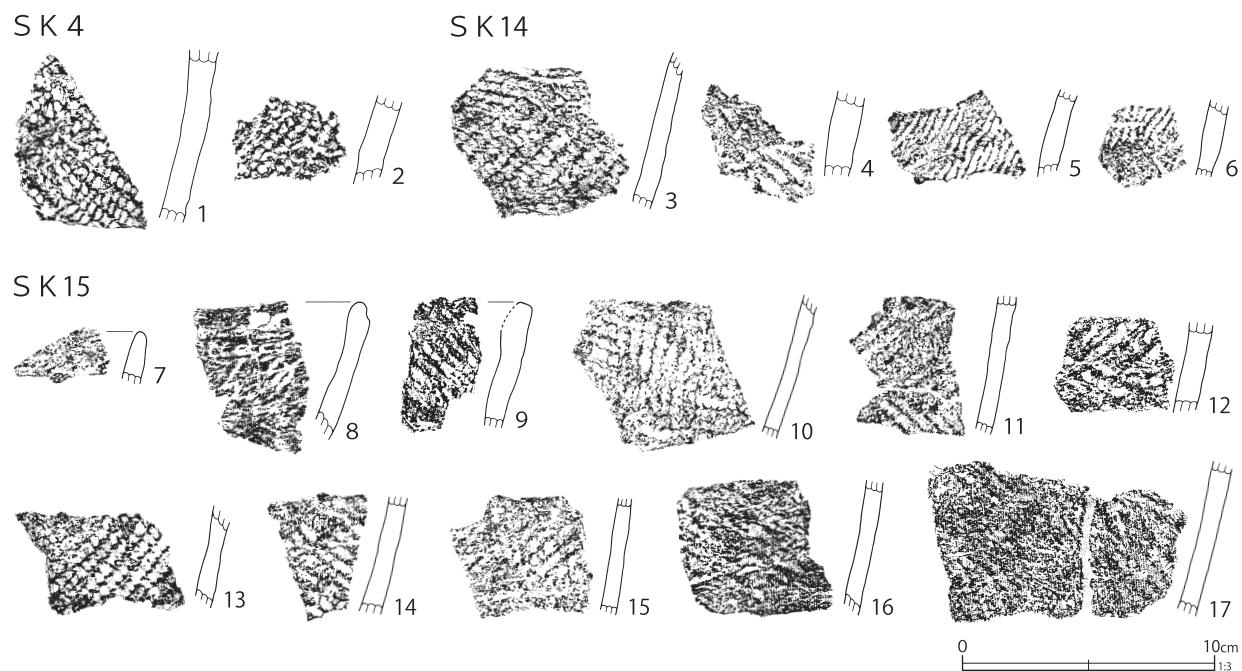
覆土は2層に分層され、自然堆積を示す。遺物が出土していないため、時期は明確ではない。

第8号土壙（第11図）

F-4グリッドに位置する。北西側に第7号土壙が接し、それを壊す。平面形は東西に軸方向をとる楕円形である。規模は長径1.40m、短径0.85m、深さ0.22mである。主軸方位はN-71°-Wを指す。



第11図 第4・6~8・10~16号土壤



第12図 第4・14・15号土壌出土遺物

覆土は3層に分層され、堆積状況から埋戻しの可能性も考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確ではない。

第10号土壌（第11図）

第15号住居跡の北側のE-3グリッドに位置する。平面形は不整形で、底面に円形のピットをもつ。規模は長軸0.95m、短軸0.76m、深さ0.28mである。主軸方位はN-20°-Wを指す。

覆土は4層に分層され、堆積状況から埋戻しの可能性も考えられる。遺物が出土していないため、時期は明確ではない。

第11号土壌（第11図）

F-4グリッドに位置し、東側に第15号土壌が隣接する。平面形は凸字形に近い不整形である。規模は長軸1.43m、短軸1.30m、深さ0.09mである。主軸方位はN-53°-Eを指す。

覆土は単一層で自然堆積である。遺物が出土していないため、時期は明確ではない。

第12号土壌（第11図）

G-4グリッドに位置する。平面形は南北に軸方向をとる不整長方形で、底面は二段に掘り込ま

れていた。規模は長軸2.30m、短軸1.20m、深さ0.19mである。主軸方位はN-27°-Eを指す。

覆土は5層に分層される。土層断面の観察から埋没後にピット状の掘り込みが見られたが、その性格等は不明である。遺物が出土していないため、時期は明確ではない。

第13号土壌（第11図）

G-3グリッドに位置する。第15号住居跡の南側に近接している。平面形は円形で、底面に小ピットが穿たれていた。規模は径0.58m、深さ0.20mである。遺物が出土していないため、時期は明確ではない。

第14号土壌（第11図）

F-3・4グリッドに位置する。第15号住居跡と重複し、壊されていた。平面形は略円形で、底面は概ね平坦である。規模は長径1.74m、短径1.46m、深さ0.50mである。

覆土は8層に分層され、混入物や堆積状況から推して、住居跡の拡張に伴い埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は前期の黒浜式土器の破片が少量出土した

(第12図3～6)。

いずれも纖維を含み、3がLR、4がRL、5・6にはLの縄文が施文されている。

第15号土壙 (第11図)

F-4グリッドに位置し、西側に第11号土壙が隣接する。平面形は円形で、ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。規模は長径1.46m、短径1.35m、深さ0.46mである。

覆土は3層に分層され、炭化物の混入が認められた。おそらく自然堆積であろう。

前期の黒浜式土器が比較的まとまって出土した(第12図7～17)。

8は口唇直下に幅狭い竹管文が巡ることから、第15号住居跡よりも新しい時期と想定される。他は10～12がLRとRL原体による羽状縄文、13はLR、14～17は風化が著しく、詳細は不明であるが、纖維を含む土器である。

第16号土壙 (第11図)

F-4グリッドに位置する。第15号住居跡と重複し、壁面の一部を壊される。平面形は円形で、皿状に掘り込まれていた。規模は長径1.34m、短径0.72m、深さ0.14mである。

覆土は概ね自然堆積を示している。遺物が出土していないため、時期は明確ではない。

(3) グリッド出土遺物

第13図に遺構外から出土した縄文時代の遺物を一括した。

縄文土器は前期を中心に、早期末葉から後期後葉までの土器が出土している。特に、堀之内式期の遺物が一定量出土していることから、後期にも人々が生活を営める安定した環境にあったことを窺わせる。おそらく前期集落の形成以後、河川の影響による谷地形の形成や土砂の再堆積が進行し、後期段階には谷地形が埋没し、平坦な地形が形成されていたものと想定される。

1は、口縁部に櫛歯状工具による列点状刺突文が施された有尾式土器である。

口縁部と胴部との区画は明確ではない。胴部にはLRとRLの原体により羽状縄文が施文されるが、厳密ではない。現存部分では、施文幅内で原体を換えた帶内羽状施文とはなっていない。

現存部の最大径が35.0cm、現存高22.5cmである。胎土には纖維を多く含み、内外面の風化が著しい。

2は口唇上が押圧され、鋸歯状となっている。器面に浅い条線が施されていることから、早期末葉の土器と考えられる。

3～7は纖維を含む広義の黒浜式土器で、4は0段多条、5・7はR、6はRとLによる羽状縄文である。

8～21には縄文時代後期の土器を掲載した。8～11は後期前葉、12以下が後期後葉と考えられる。

11は2条の平行沈線により、胴部に渦巻き状の沈線文が施文された鉢形土器である。

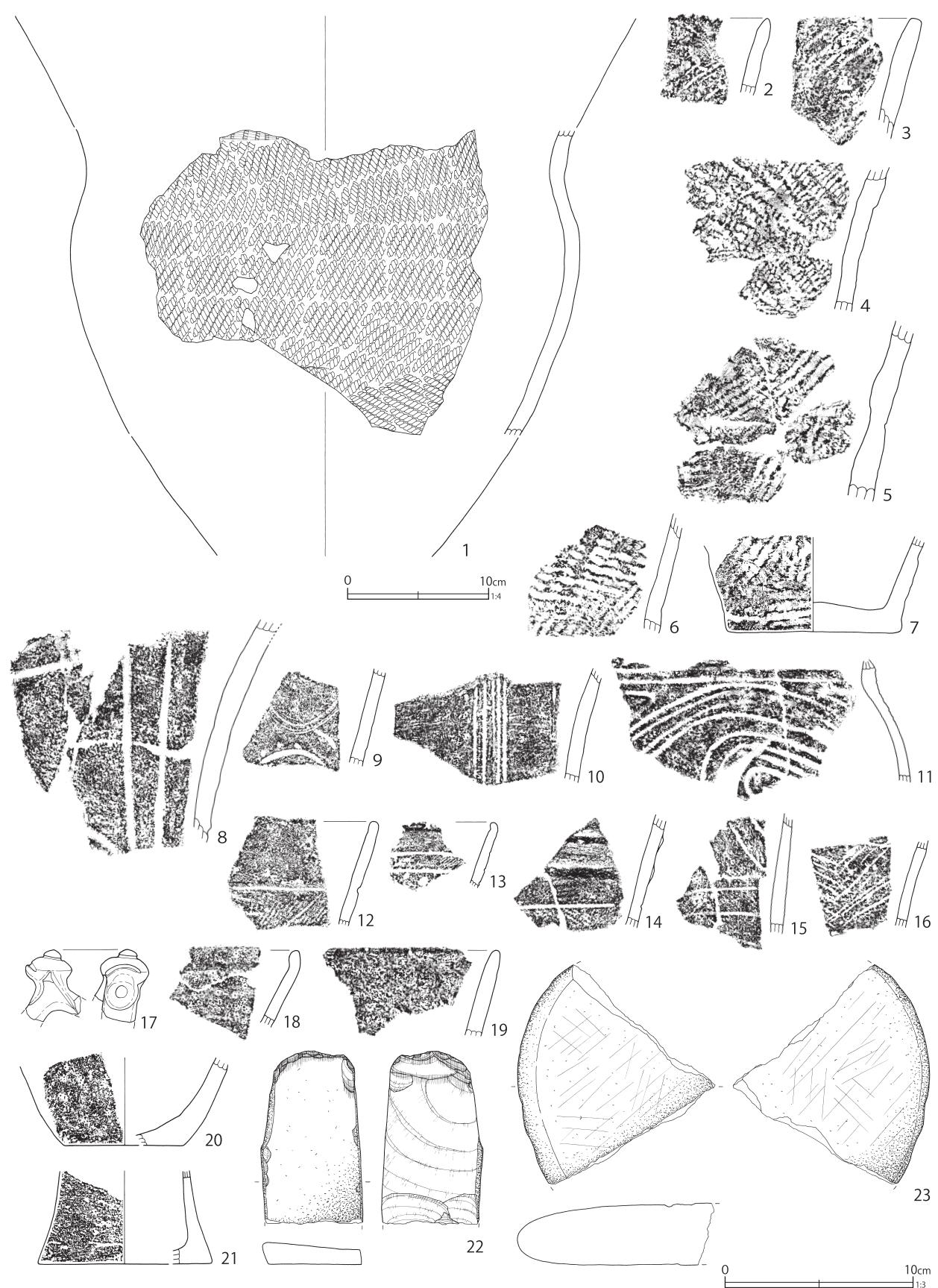
12～15は堀之内Ⅱ式の磨り消し縄文系の土器で、器壁が薄く、精選された胎土である。14は口唇直下に微隆起線が巡る。15は横帯内が三角ないしは菱形状に区画されたものと考えられる。

17は加曾利B式深鉢形土器の突起である。

18は内面に浅い沈線が巡ることから、堀之内Ⅱ式ないしは加曾利B式と考えられる。19は無文で風化が著しく、詳細は不明である。20は堀之内Ⅰ式、21は堀之内Ⅱ式の底部であろう。

22は礫器で、石材は頁岩である。板状礫を剥離した後、一端が刃物状に加工されている。加工部分は、使用による摩耗が著しい。下半部を欠損する。残存長9.1cm、幅5.5cm、厚さ1.2cm、重さ100.1gである。第2号井戸跡から出土した。

23は石皿で、石材は閃緑岩である。周縁部は多少敲打によって整形されている。皿部は平坦で、使用で非常に平滑な磨り痕が見られる。一部のみを残存する。残存長11.7cm、残存幅10.6cm、厚さ3.3cm、重さ434.6gである。第14号住居跡から出土した。



第13図 グリッド出土遺物

2. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、上層遺構検出面において、調査区の中央から南側に竪穴住居跡3軒、土壙1基を検出した。高水敷に面する平坦地の南端に住居跡群がまとまり、その北東側にやや距離をおいて土壙が単独で所在していた。

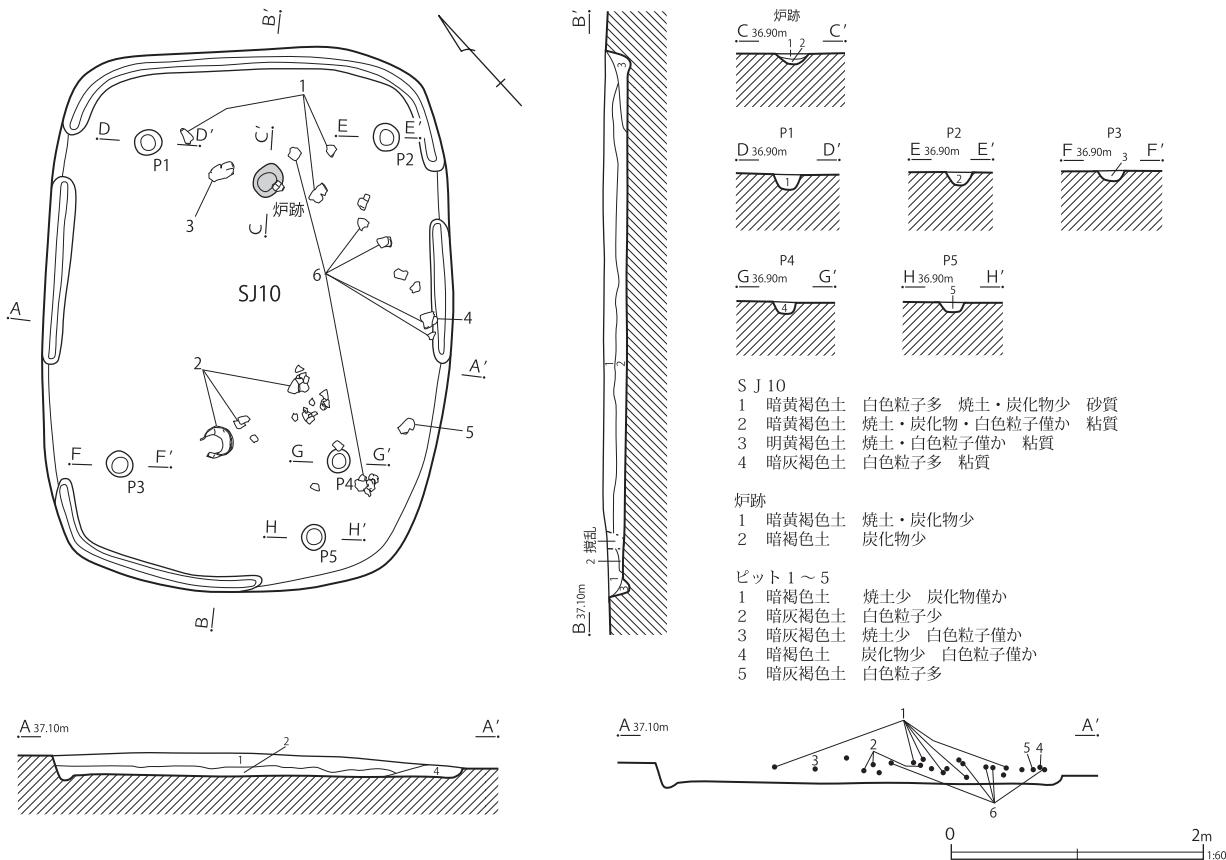
なお、住居跡のうち2軒は、遺構確認時に既に床面まで削平を受けていたため、炉跡とピットを検出したにすぎない。

(1) 竪穴住居跡

第10号住居跡（第14図）

調査区南側東寄りのF-4グリッドに位置する。隅丸長方形の小型の住居跡である。規模は長軸4.25m、短軸3.25m、深さ0.19mで、主軸方位はN-44°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、壁際に壁溝を部分的に巡らしていた。覆土は4層に分層され、焼土・炭化物・白色粒子を含む黄褐色土を主体とする。



第14図 第10号住居跡

炉跡は床面中央やや北東寄りに検出された。規模は長径26cm、短径22cm、深さ9cmと小規模である。覆土には焼土・炭化物が少量含まれていたが、明確な火床面は検出されなかった。

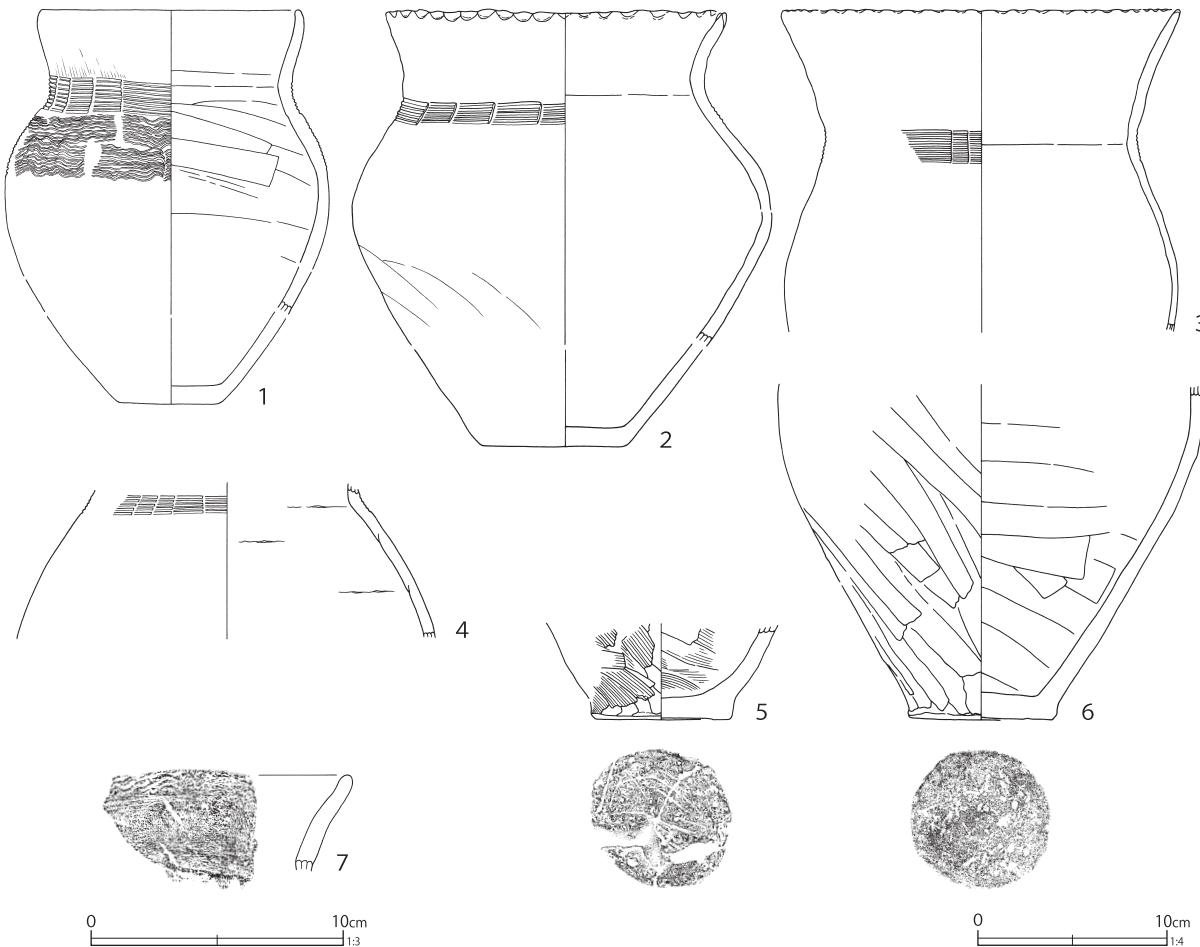
ピットは5基検出された。各隅部に寄った位置に配置されたピット1～4が主柱穴と考えられる。いずれも直径20cm前後と小さく、掘り込みも10cm前後と浅い。南隅部に寄った位置にあるピット5は、配置から見て入口施設に伴う柱穴とも考えられる。

遺物は炉跡とピット4の周辺から出土した。床面上から出土したものは少なく、いずれも床面からやや浮いた状態であった。

簾状文や櫛描波状文を施文する櫛描文系の弥生土器が主体である（第15図）。1は内湾気味の口縁部の甕である。頸部のくびれに等間隔止めの簾状文を施し、胴部外面に櫛描波状文を2段施文

する。2・3は口唇部に指頭押捺を施す甕である。2は肩部の張りが強く、口縁部が短く外反する特徴をもつ。頸部のくびれに等間隔止めの簾状文を右回りに施し、口唇部の押捺は強く波打つ。3は肩部の張りが弱く、口縁部が長く延びる。頸部のくびれに等間隔止めと考えられる簾状

文を施し、2に比べると口唇部の指頭押捺は弱い。4は頸部のくびれに等間隔止めの簾状文を施すのみで、肩部に櫛描波状文は施していない。5は甕の胴部下半の破片で、小型の器形と考えられる。胴部内外面に粗いハケメ調整を施す。6は胴部上半に最大径をもつ甕の胴部下半である。内



第15図 第10号住居跡出土遺物

第2表 第10号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	弥生	甕	(13.7)	[16.0]	—	C E H I K	70	普通	にぶい黄橙	頸部簾状文 肩部櫛描波状文2段 No.1・5・6・10・18・20	11-2 12-6
2	弥生	甕	18.0	[17.5]	—	E H I K	70	普通	にぶい橙	口唇部指頭押捺 頸部簾状文（等間隔止め） No.14・22・23	11-3
3	弥生	甕	(21.0)	[16.9]	—	C E I K	40	普通	にぶい黄橙	口唇部指頭押捺 頸部簾状文（等間隔止め） No.2	11-4
4	弥生	甕	—	[8.1]	—	E H I K	20	普通	にぶい橙	頸部簾状文（等間隔止め） No.12	12-7
5	弥生	甕	—	[5.0]	7.5	C E H I K	30	普通	にぶい赤褐	内外面ハケメ No.17	
6	弥生	甕	—	[17.6]	7.8	C E I J K	40	普通	にぶい黄橙	内外面ヘラナデ No.4・8・9・12・13・19	11-5
7	弥生	甕	—	[3.8]	—	C G I	5	不良	黒褐	口縁部櫛描波状文	

外面ともヘラナデが施されている。7は口縁部上端に櫛描波状文を施した甕である。

住居跡の時期は出土した土器の特徴から、後期初頭の岩鼻式1期に位置づけられる。

第13号住居跡（第16図）

調査区南側東寄りのG-4グリッドに位置する。北に第10号住居跡が、南西に第14号住居跡がそれぞれ隣接する。概して弥生時代の遺構は掘り込みが浅いため、遺構検出時に、床面の一部を削平してしまい、炉跡のみを検出した。住居跡と断定する根拠に乏しいが、炉跡の状態から該期の住居跡として報告する。

炉跡は平面橢円形の地床炉で、火床面は高熱のため赤色に硬く焼け締まっていた。被熱範囲は長径64cm、短径30cmで、主軸方位はN-34°-Wを指す。炉跡の周囲を精査したが、柱穴などは検出できなかった。

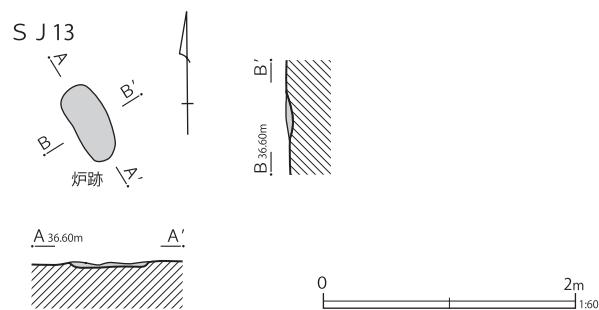
遺物が出土していないため、詳細な時期については不明である。

第14号住居跡（第17図）

調査区南側東寄りのG-4グリッドに位置する。第13号住居跡と同様、住居跡の掘り込みが浅かったため、不整形の被熱痕を残す炉跡と、その周囲からピットが検出されたにすぎない。

炉跡は軸方向を南北にとる平面不整形の地床炉である。被熱範囲は長径94cm、短径64cmで、主軸方位はN-13°-Eを指す。

炉跡の南側からピット4基が検出された。ピット1・2は炉跡との位置関係から柱穴の可能性が



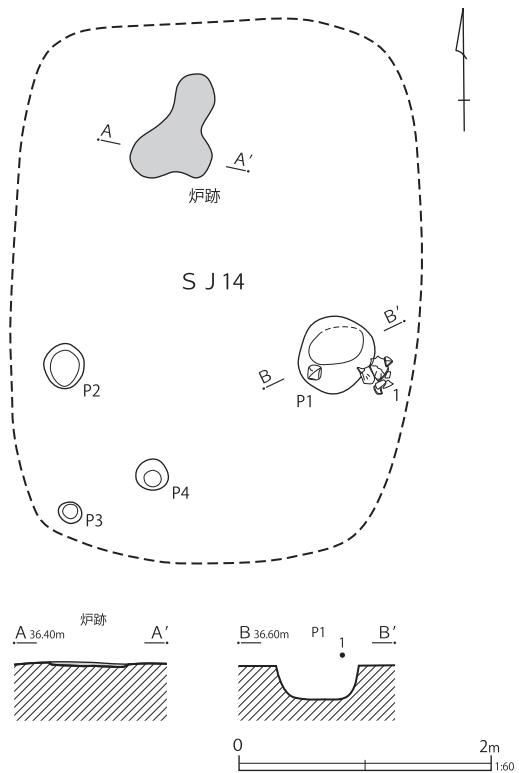
第16図 第13号住居跡

考えられる。ピット1は径57×49cm、深さ17cm、ピット2は径32cm、深さ21cmである。隣接するピット3・4は直径20cm前後と小さい。

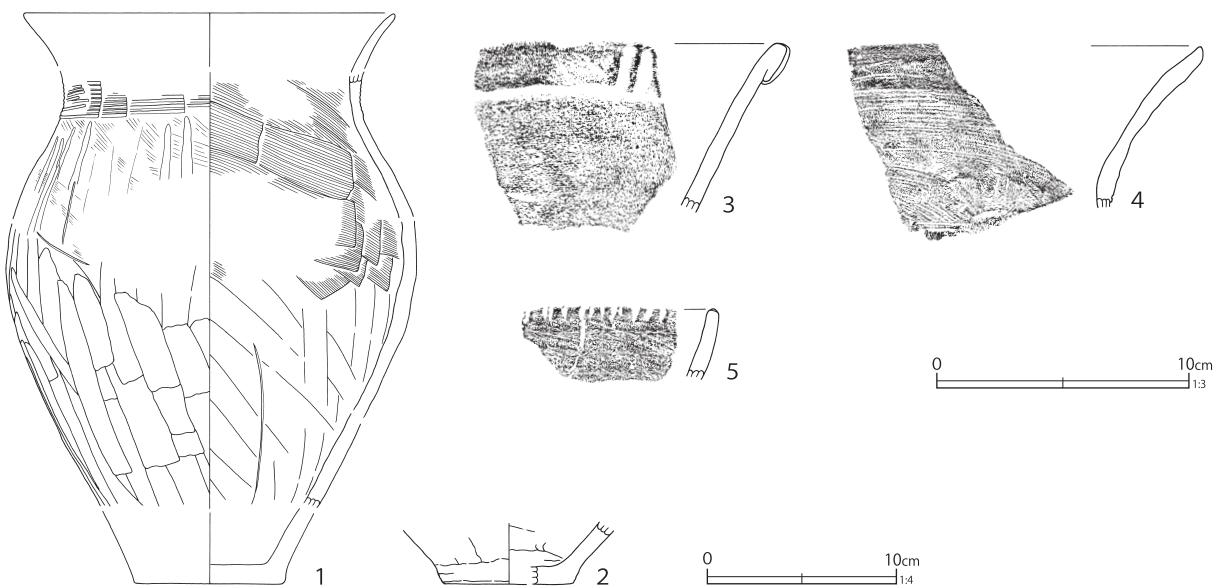
遺物は櫛描文系の弥生土器が、ピット1の南東側に接するように床面上から出土した。この他にも遺構確認作業中に炉跡周辺から破片が出土している（第18図）。

1の甕は口縁部及び底部を欠損する。胴部外面下半にヘラケズリに近いヘラナデを施し、胴部上半にはハケメ調整の後、頸部に等間隔止めの簾状文を施文する。内面には目の細かいハケメ調整が施される。2は甕の底部片である。内外面にヘラナデを施す。3は壺の口縁部で、折り返し口縁上に2条の棒状浮文を貼付する。4は口縁部が大きく外反する甕で、内外面に擦痕状のハケメ調整を施す。頸部には簾状文が一部残る。5は口縁部がやや内湾気味に立ち上がる甕の口縁部である。口唇部にヘラ先による刻み目が施される。

住居跡の時期は出土した土器の特徴から、後期初頭の岩鼻式1期に位置づけられる。



第17図 第14号住居跡



第18図 第14号住居跡出土遺物

第3表 第14号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	弥生	甕	—	[23.3]	—	H I J K	50	普通	明赤褐	頸部簾状文（等間隔止め） G4No.1・2	11-6 12-8
2	弥生	甕	—	[3.2]	(7.0)	I J	20	普通	明赤褐	内外面ヘラナデ	12-1
3	弥生	壺	—	[6.7]	—	E H I K	5	普通	橙	折り返し口縁 棒状浮文2条貼付	12-1
4	弥生	甕	—	[6.5]	—	E H I J K	5	普通	褐	頸部簾状文	12-1
5	弥生	甕	—	[2.8]	—	E H I J K	5	普通	明赤褐	口唇部刻み目 G4No.1	12-1

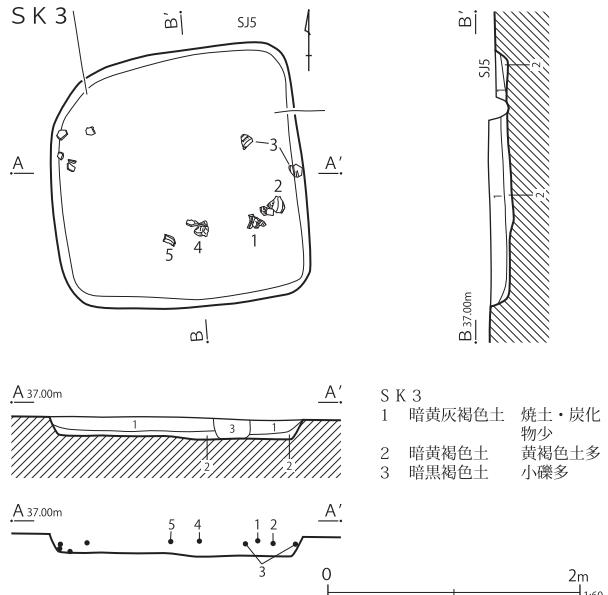
(2) 土壙

第3号土壙（第19図）

調査区中央のE-5グリッドに位置する。第5号住居跡によって北壁の上部が一部壊されていた。平面形は方形である。規模は長軸2.04m、短軸2.01m、深さ0.18mである。主軸方位はN-5°-Wを指す。

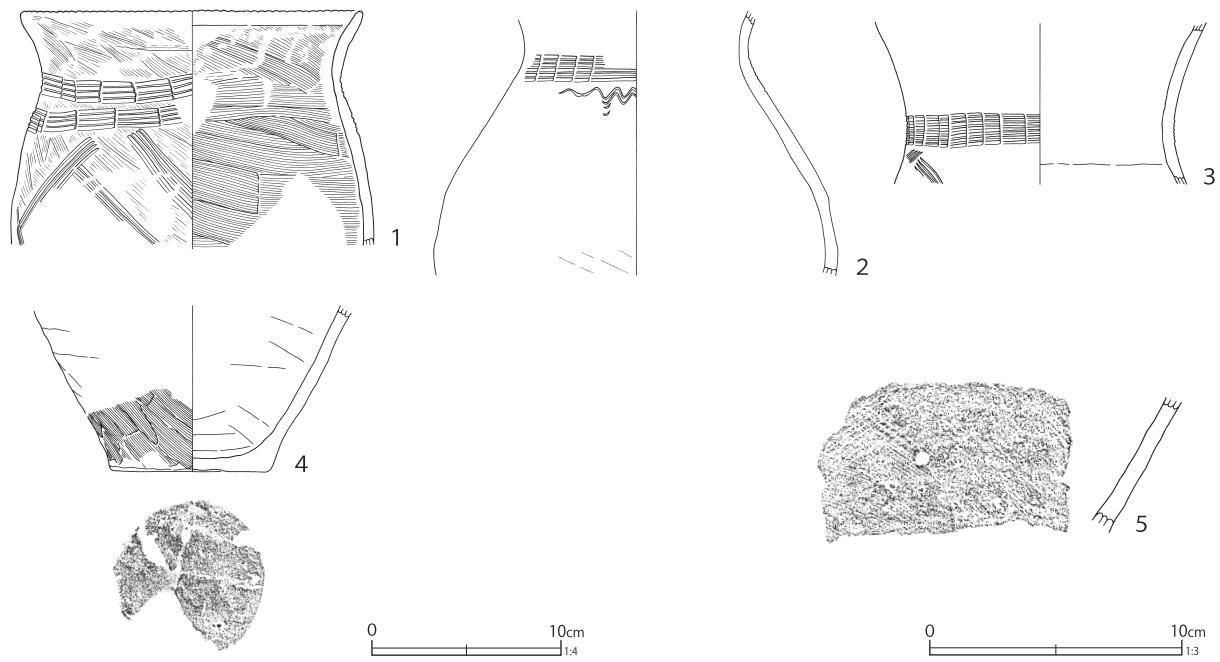
底面は概ね平坦である。覆土は3層に分かれ、第1層は焼土・炭化物を少量含む。第3層は後世のピットと考えられる。

遺物は櫛描文系の弥生土器が、底面からやや浮いた状態で出土した（第20図）。1は頸部のくびれの弱い甕である。ハケで擦痕状に調整した後、櫛描文を描く。胴部に羽状文、頸部に等間隔止めの簾状文を2段に右回りに施文する。口唇部には細かい刻み目が施されている。2・3は頸部のくびれの弱い甕である。2は頸部のくびれに等間隔



第19図 第3号土壙

止めの簾状文とその下に波高の高い櫛描波状文を施文する。3は頸部のくびれに等間隔止めの簾状文を施し、胴部には羽状文を施文する。4は甕の



第20図 第3号土壤出土遺物

第4表 第3号土壤出土遺物観察表 (第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	弥生	甕	(18.0)	[12.5]	—	E H I K	25	普通	褐灰	口唇部刻み目 頸部簾状文2段 脊部羽状文 No.2	12-2・9
2	弥生	甕	—	[13.8]	—	E I L	20	不良	にぶい褐	頸部簾状文(等間隔止め) 肩部櫛描波状文 No.1	12-3・10
3	弥生	甕	—	[8.5]	—	C E H I K	30	不良	にぶい黄橙	頸部簾状文(等間隔止め) 脊部羽状文 No.9・10	12-3・11
4	弥生	甕	—	[8.7]	8.0	E H I J K	40	普通	にぶい褐	外面ハケメ No.3	12-4
5	弥生	甕	—	[5.4]	—	E H I K	5	普通	にぶい褐	外面ハケメ 内面ヘラナデ No.4	12-3

胴部下半の破片である。外面に擦痕状のハケメ、内面にナデを施す。5は甕の胴部片で、外面はハケで擦痕状に調整されている。

土壤の時期は、住居跡と同時期の岩鼻式1期に位置づけられるが、やや古い様相を残す。

(3) グリッド出土遺物

他の時代の遺構から出土した弥生土器を第21図にまとめた。住居跡や土壤とほぼ同時期である。

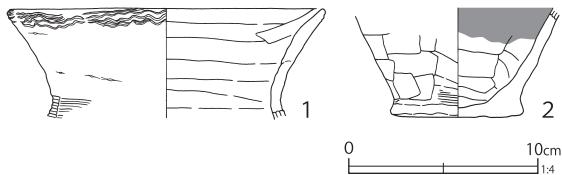
1は緩やかに外反する甕の口縁部である。頸部のくびれに簾状文、口縁部上端に櫛描波状文を施す。

第5表 グリッド出土遺物観察表 (第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	弥生	甕	(16.6)	[5.8]	—	C E I	20	普通	黒褐	口縁部櫛描波状文 頸部簾状文	12-5
2	弥生	甕	—	[5.8]	(7.0)	B E H I K	40	普通	橙	内面炭化物付着	

し、口縁部内外面を強くヨコナデする。第2号井戸跡の覆土中から出土した。

2は甕の底部である。突出気味の底部で、胴部の内外面にヘラナデを施す。内面には炭化物が付着する。第1号井戸跡の覆土中から出土した。



第21図 グリッド出土遺物

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

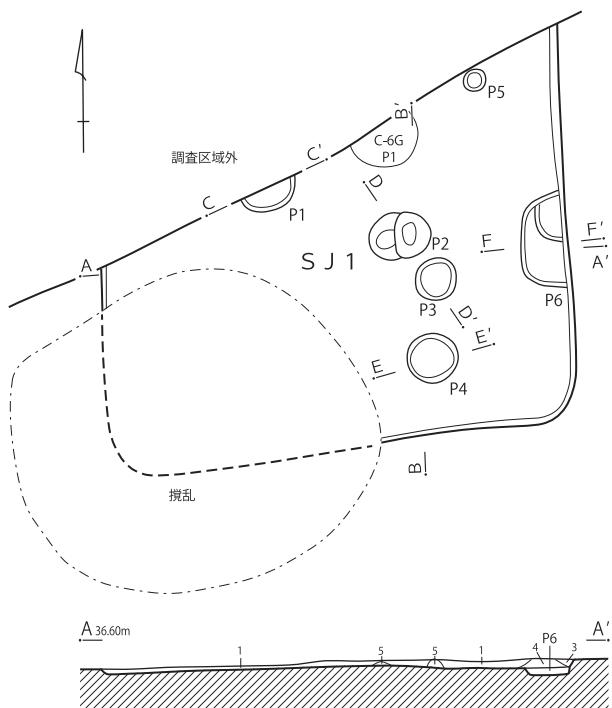
(1) 竪穴住居跡

奈良・平安時代の遺構は、上層遺構検出面において、調査区中央の標高の高い部分に集中しており、砂礫層の露出する調査区西側から南縁にかけては希薄であった。検出された遺構は竪穴住居跡11軒、溝跡1条、土壙2基である。住居跡の分布状況はやや散漫であったが、4軒の住居跡が重複した一画もあった。住居跡の平面形は方形ないし長方形で、カマドを北壁ないし東壁に設けるものが多い。規模は一辺2mの小型の住居跡から、一辺5mまで幅がある。

出土遺物は南比企窓跡群産の須恵器が主体を占め、僅かに土師器の煮沸具が伴っていた。

第1号住居跡（第22図）

調査区北側のC-6グリッドに位置する。調査区中央に分布する住居跡群とは、やや距離を隔てている。住居跡の南西隅部が現代の搅乱によって大きく壊され、かつ北半分は調査区域外に延びているため、全体の形状や規模は明確ではない。



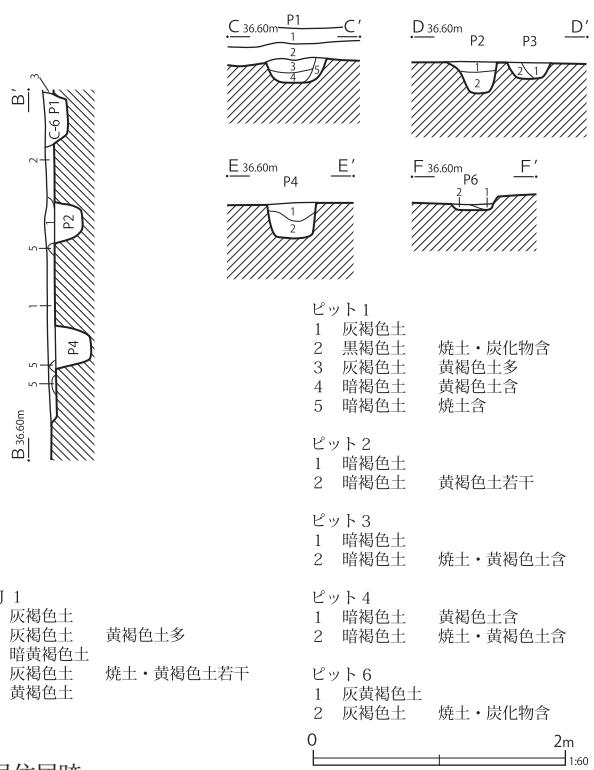
第22図 第1号住居跡

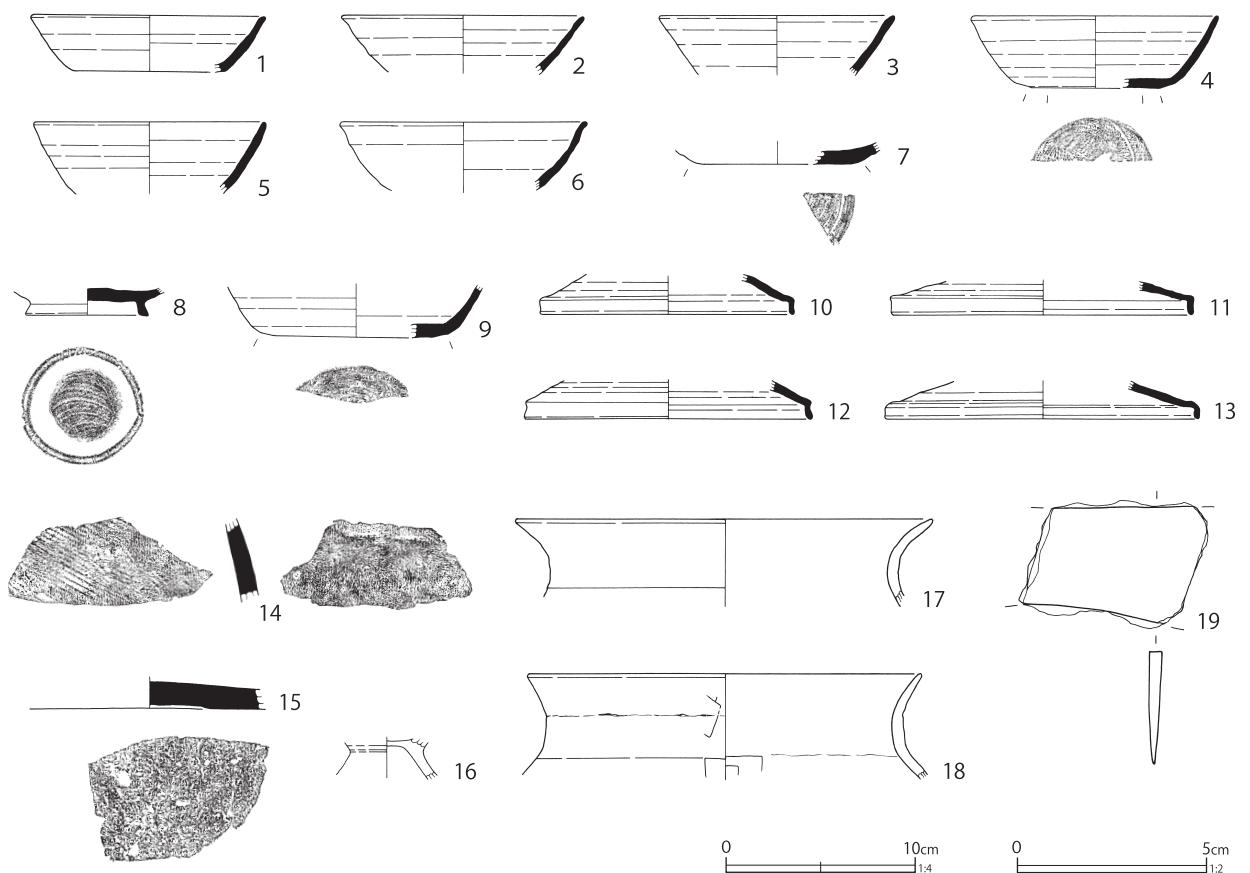
平面形は方形と推定される。検出された規模は東西長3.75m、南北長3.00m、深さ0.06mである。住居跡の主軸を南北にとった場合、N-3°-Wを指す。

床面は概ね平坦で、硬化面などはなかった。覆土は灰褐色土を主体とし、床面上に黄褐色土（第5層）のブロックが堆積することから、人為的な埋戻しと考えられる。ピットは6基検出された。土層断面の観察では柱痕などは認められなかつた。このうち東壁際にあるピット6は皿状に浅く掘り込まれ、覆土に焼土や炭化物を含んでいた。カマドの燃焼部の可能性も考慮したが、壁外への掘り込みがなく、カマド痕跡と認定することは難しかつた。また、壁溝や貯蔵穴などの付属施設も検出されなかつた。

遺物は覆土中から、須恵器壺・皿・高台付壺・蓋・塊・甕、土師器甕・台付甕、鉄製品の鎌が出土した（第23図）。

1～6は須恵器壺である。1は浅身の器形でや





第23図 第1号住居跡出土遺物

や古相を示すことから混入であろう。2・3・5は、口縁部があまり外反せずに立ち上がる。4は口径と底径の差が少なく、底部周辺に回転ヘラケズリ再調整を施す。6は丸味のある体部から口縁が外反肥厚する。7は体部の立ち上がり角度から皿と考えられる。8は高台付壺で、底部回転糸切りである。9は壺で、底部に回転ヘラケズリを施す。10～13は蓋である。口径の大小により壺蓋と壺蓋に二分される。14・15は甕である。14は胴部の破片で、外面に平行叩き目、内面に無文當て具痕を残す。15は平底の甕の底部片である。

16は土師器台付甕の脚台部である。17・18はコの字状口縁甕である。19は鉄製曲刃鎌の刃部片で、ピット3から出土した。

住居跡の時期は、4の須恵器壺の特徴から8世紀後半から末葉と考えられる。

第2号住居跡（第24図）

調査区中央のD-5グリッドに位置する。カマドを東壁の中央に設けた長方形の住居跡である。第3・11・12号住居跡と重複し、それらをすべて壊していることから、最も新しいことが判明した。各住居跡の先後関係は土層断面の観察や出土遺物の様相から、(古)第11号住居跡→第3号住居跡→第12号住居跡→第2号住居跡(新)の順序であったと想定される。また、南壁の中央には第4号井戸跡が重複し、壁面及び床面の一部が壊されていた。

東西に軸方向をとる長方形の住居跡であるが、南壁と北壁の長さが異なるため、左右対称にならず、やや歪んだ平面形である。規模は長軸4.83m、短軸4.21m、深さ0.07mである。主軸方位はN-86°-Wを指す。今回の調査で検出された住居跡

第6表 第1号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	壺	(12.3)	[2.9]	(8.0)	E J K	10	良好	灰	南比企産	
2	須恵器	壺	(12.8)	[3.0]	—	E I J K	10	普通	黄灰	南比企産	
3	須恵器	壺	(12.4)	[3.1]	—	I J	15	良好	灰	南比企産	
4	須恵器	壺	(13.0)	3.8	(7.0)	I J K	30	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ	
5	須恵器	壺	(12.2)	[3.8]	—	I J L	15	普通	灰	南比企産	
6	須恵器	壺	(13.0)	[3.6]	—	H I J	20	良好	灰	南比企産	
7	須恵器	皿	—	[1.1]	(7.7)	E J K	10	不良	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
8	須恵器	高台付壺	—	[1.5]	6.4	J K	90	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り	
9	須恵器	塊	—	[2.8]	(8.4)	I J K L	20	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
10	須恵器	蓋	(13.4)	[2.1]	—	E I J K	15	良好	灰	南比企産	
11	須恵器	蓋	(16.0)	[1.7]	—	I J	5	良好	灰	南比企産	
12	須恵器	蓋	(15.2)	[2.0]	—	I J K	10	良好	灰	南比企産	
13	須恵器	蓋	(16.6)	[1.9]	—	G I J K	20	不良	灰白	南比企産	
14	須恵器	甕	—	[4.5]	—	I J K	5	良好	黄灰	南比企産 外面平行叩き目 内面無文當て具痕	
15	須恵器	甕	—	[1.4]	—	I J K	5	良好	灰	南比企産 底部	
16	土師器	台付甕	—	[2.1]	—	C I K	40	普通	橙	脚台部	
17	土師器	甕	(22.0)	[4.6]	—	C H I	5	普通	橙	コの字状口縁甕	
18	土師器	甕	(21.0)	[5.5]	—	C E H I K	15	普通	にぶい赤褐	コの字状口縁甕	
19	鉄製品	鎌	長さ [3.1]cm 幅 [5.0]cm 背幅 0.35cm 重さ 28.7 g				刃部片 P3				18-1

の中では最も規模の大きなものである。

床面は概ね平坦で、その北半分は第12号住居跡の覆土を掘り込んで、床面を構築していた。覆土は基本的には自然堆積と考えられるが、後世の土壙やピットが重複しており、複雑な堆積状況を示していた。なお、壁溝は検出されなかった。

ピットは7基検出された。南西隅部寄りに位置するピット2以外は、カマド右脇の南東隅部に集中していた。ピット1・3～7は団塊状となっており、位置的に貯蔵穴として良いだろう。

カマドは東壁のほぼ中央に設けられていた。燃焼部は平面長方形で、壁外に大きく掘り込み、煙道部との境には僅かな段差を作り出していた。煙道部底面はほぼ水平に延びる。カマドの規模は長さ1.50m、燃焼部幅0.61m、深さ0.26mである。袖部は、地山の黄褐色土を掘り残して基部としていた。カマド覆土の第16層は、極めて多量の焼土を含むことから、天井崩落土と考えられる。

遺物はカマド前面から南東隅部にかけて、まとまって出土した。特に南東隅の南壁際のピット

1・3～7の周辺が多い。須恵器壺・高台付壺・皿・蓋・塊・壺・甕、土師器甕、鉄製品（門金具・棒状品）が出土した（第25・26図）。

1～22は須恵器壺である。底部調整は回転糸切り離し未調整を主体とし、一部回転ヘラケズリを含む。8・16・17にはヘラ記号の一部が残る。このうち17は「×」である。13は体部外面に墨書で「本」と記されている。墨書土器の出土は少なく、本例のみである。

23は高台付壺である。底部調整は回転ヘラケズリで、高台を剥落する。

24～29は皿である。26は口縁部が大きく外反するタイプである。27は高台付皿に近い。28は直線的に外傾して立ち上がる。底部は回転糸切り離し後、周辺に回転ヘラケズリを施し、古相を示す。29は底部外面にヘラ記号の一部が残る。

30～32は蓋である。30は扁平なボタン状のつまみ、31は宝珠形のつまみが付く。32は口縁部が外側に開く。塊あるいは短頸壺の蓋であろう。

33は南比企産須恵器に特徴的な佐波理鏡を写し

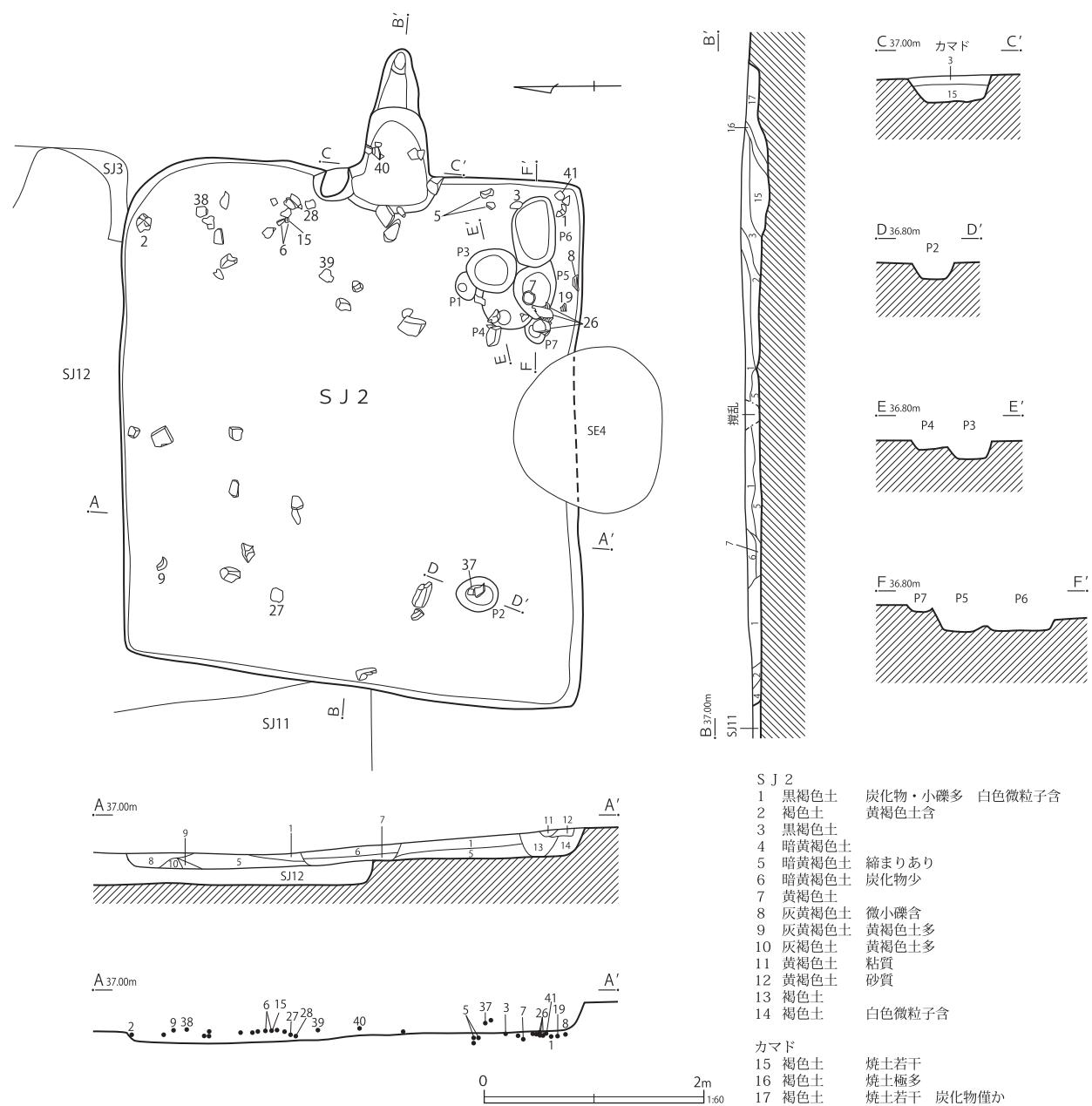
た口唇部の肥厚する壺である。

34・35は口縁部が直立するタイプの壺で、大小に法量分化している。36は口縁が断面三角形に肥厚する壺の口縁部である。37・39は甕の口縁部で、通有の櫛描波状文の施文はない。38は壺の胴部片で、外面に帶状に平行叩き目を施す。

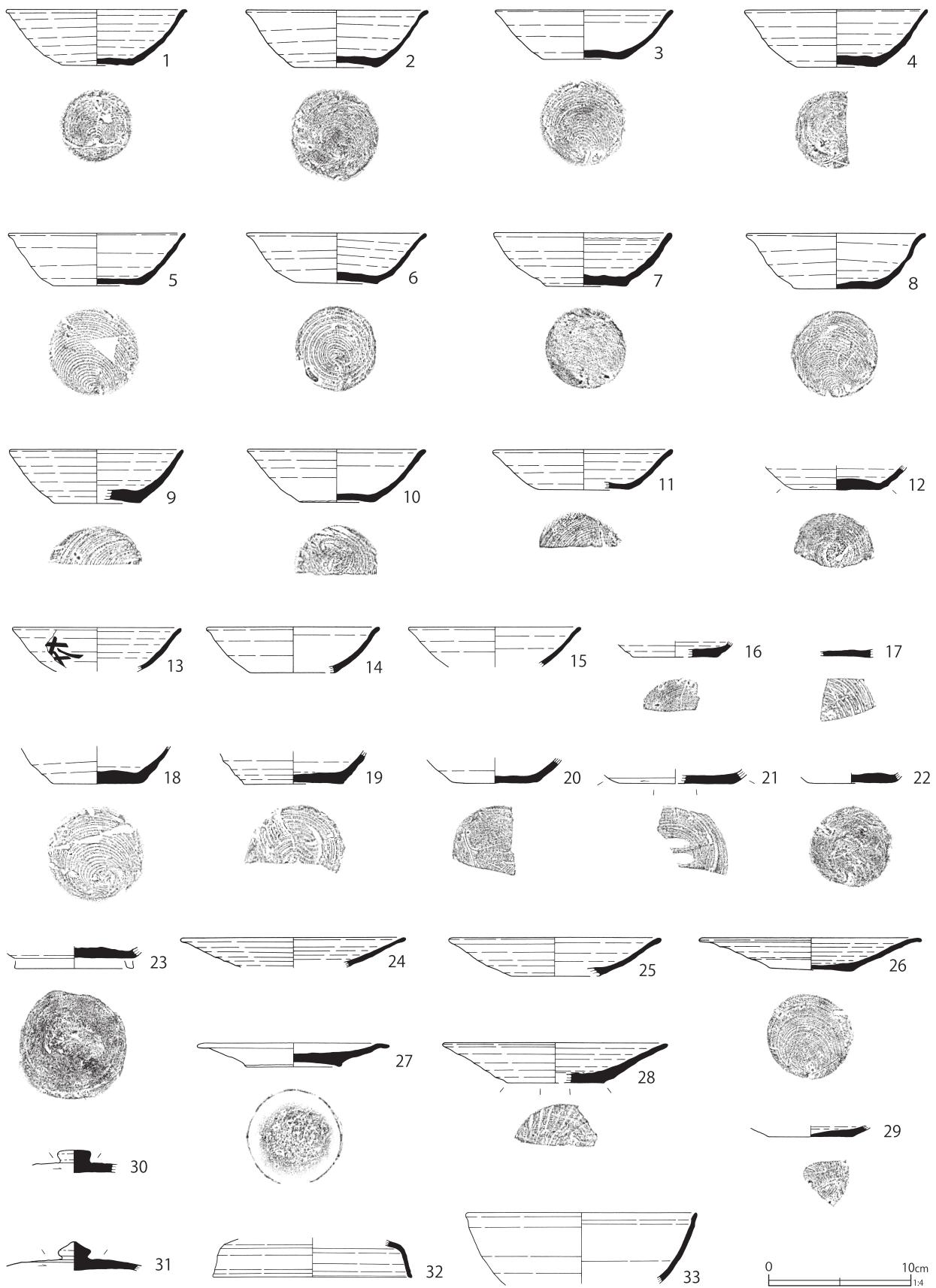
40～42は土師器甕である。40は典型的なコの字状口縁甕である。41・42はコの字状口縁甕の底部である。外面は縦位のヘラケズリを施し、内面にヘラナデを施す。

43～45は鉄製品である。43は棒状品をコの字形に折り曲げたもので、おそらく門金具の一部であろう。44・45は断面矩形の棒状金具である。性格・用途に関しては不明である。

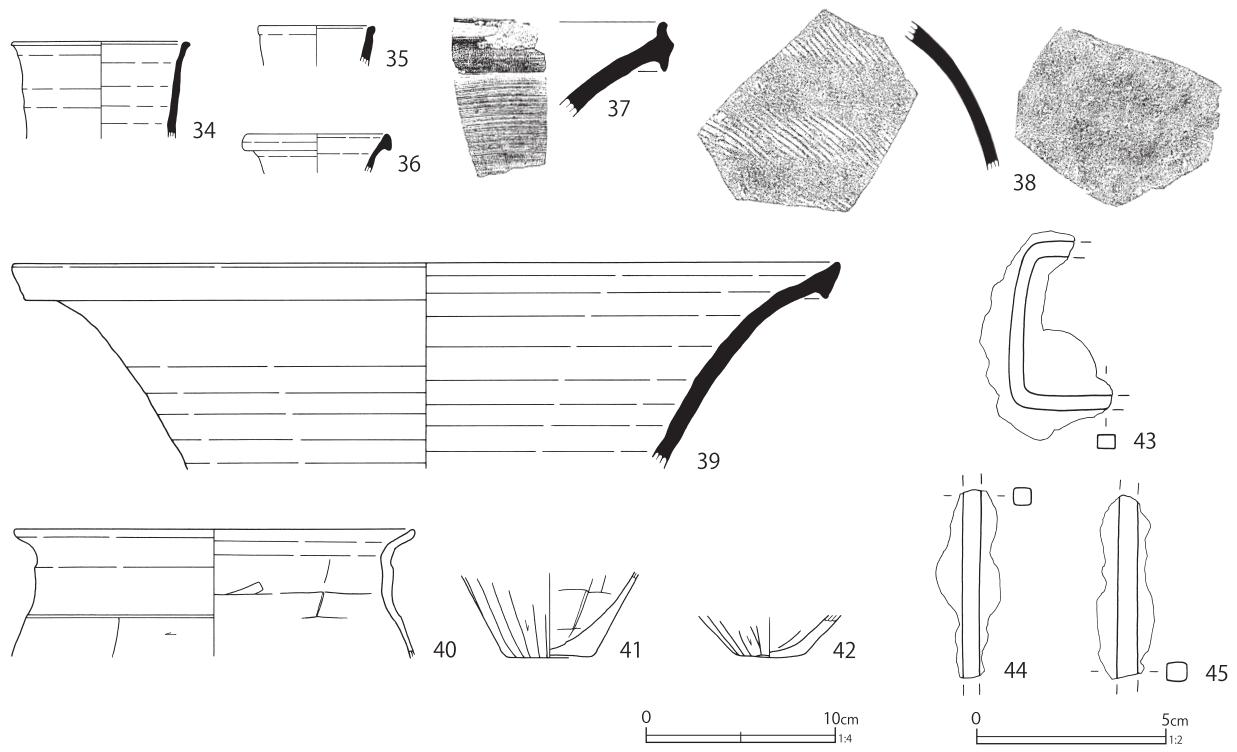
住居跡の時期は、須恵器坏の底径が口径の2分の1よりも小さいものがほとんどで、丸味のある体部から口縁を外反肥厚するものによって占められていること、皿を定量で含むことから9世紀後半から末葉に位置づけられる。今回の調査では最も新しい時期のものである。



第24図 第2号住居跡



第25図 第2号住居跡出土遺物（1）



第26図 第2号住居跡出土遺物（2）

第7表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第25・26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	壺	12.4	3.9	4.9	I J K	90	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り No.1	13-1
2	須恵器	壺	12.9	4.0	5.8	E G J	95	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り No.20	13-2
3	須恵器	壺	(12.5)	3.5	5.9	I J K	50	普通	灰黄	南比企産 底部回転糸切り No.3	
4	須恵器	壺	(13.0)	4.0	(5.8)	I J K	35	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り 体部外面火櫻痕	13-3
5	須恵器	壺	(12.6)	3.7	6.3	H J K	50	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り No.27・28	13-4
6	須恵器	壺	12.8	3.5	5.9	L J	80	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り No.1・12 カマド	13-5
7	須恵器	壺	12.3	3.7	5.8	I J K	95	不良	灰白	南比企産 底部回転糸切り No.4	13-6
8	須恵器	壺	12.4	3.9	6.0	I J K L	100	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り 底部へラ記号 No.2	13-7
9	須恵器	壺	(12.2)	[3.8]	(6.2)	I J K L	30	良好	灰	南比企産 外面一部油煙痕付着 底部回転糸切り No.22	
10	須恵器	壺	(12.4)	3.7	5.6	I J K	30	普通	にぶい橙	南比企産 底部回転糸切り	
11	須恵器	壺	(12.6)	[2.8]	(6.4)	I J K	30	良好	灰白	南比企産 底部回転糸切り	
12	須恵器	壺	—	[1.7]	(6.2)	I J	30	良好	灰黄	南比企産 底部回転ヘラケズリ 底部外面火櫻痕	
13	須恵器	壺	(11.8)	[3.1]	—	I J K	20	良好	灰	南比企産 体部外面墨書「本」 P3	13-8
14	須恵器	壺	(12.2)	3.2	(6.0)	E I J	30	良好	灰白	南比企産 P3	
15	須恵器	壺	(12.0)	[2.8]	—	I J K	30	不良	灰白	南比企産 内外面火櫻痕 No.11 P6 カマド	
16	須恵器	壺	—	[1.1]	(6.0)	I J	20	良好	灰白	南比企産 底部回転糸切り 底部へラ記号	
17	須恵器	壺	—	[0.6]	—	E I J	5	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り 底部へラ記号「×」	
18	須恵器	壺	—	[2.6]	6.5	I J K L	70	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り	

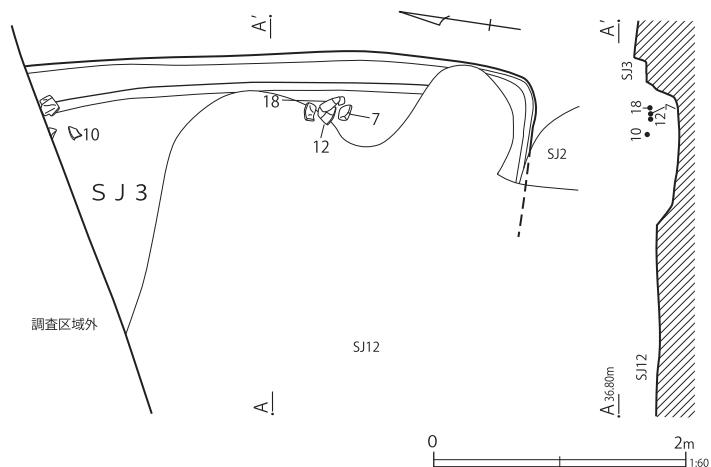
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
19	須恵器	壺	—	[2.3]	(7.0)	I JK	40	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	
20	須恵器	壺	—	[1.7]	(6.0)	I JK	25	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り	
21	須恵器	壺	—	[1.0]	(8.0)	I JK	30	良好	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
22	須恵器	壺	—	[0.7]	(6.0)	I J	90	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り	
23	須恵器	高台付壺	—	[0.8]	(8.4)	I JK L	80	普通	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ 高台剥離	
24	須恵器	皿	(15.7)	[2.0]	—	I K J	30	良好	灰白	南比企産 P1・6	
25	須恵器	皿	(14.6)	2.7	—	I JK	15	良好	灰白	南比企産 P6	
26	須恵器	皿	15.5	2.3	5.8	H I J K	70	良好	灰オリーブ	南比企産 底部回転糸切り No.30・32・33 P1・6	13-9
27	須恵器	皿	(12.4)	1.7	6.6	G HK	70	不良	灰白	南比企産か 底部回転糸切り 内外面磨滅 No.23	
28	須恵器	皿	(15.7)	[2.8]	(7.0)	H I J K	20	良好	灰白	南比企産 底部回転糸切り後回転ヘラケズリ No.14	
29	須恵器	皿	—	[0.8]	(6.1)	I JK	20	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り 底部ヘラ記号	
30	須恵器	蓋	—	[1.6]	—	I JK	20	普通	灰	南比企産	
31	須恵器	蓋	—	[2.0]	—	I JK	20	良好	灰	南比企産	
32	須恵器	蓋	(13.8)	[2.6]	—	I JK	5	良好	灰	南比企産	
33	須恵器	壺	(16.2)	[5.0]	—	I J	15	良好	灰	南比企産	
34	須恵器	壺	(9.0)	[5.1]	—	K	15	良好	灰白	南比企産か 内外面自然釉	
35	須恵器	壺	(6.0)	[2.1]	—	I K J	15	良好	黄灰	南比企産	
36	須恵器	壺	(7.4)	[2.0]	—	I JK	30	良好	褐灰	南比企産 内外面自然釉 SJ3	
37	須恵器	甕	—	[4.9]	—	I J	5	良好	灰	南比企産 No.26	
38	須恵器	壺	—	[8.0]	—	I JK	5	普通	黄灰	南比企産 外面平行叩き目 内面無文當て具痕 No.17	
39	須恵器	甕	(43.6)	[11.0]	—	E I J K L	5	良好	灰	南比企産 No.8 カマド	
40	土師器	甕	(21.1)	[6.8]	—	H I	30	良好	橙	コの字状口縁甕 No.7	
41	土師器	甕	—	[4.4]	(4.4)	A H I	40	普通	橙	No.36	
42	土師器	甕	—	[2.2]	3.7	H I K	50	普通	橙	カマド	
43	鉄製品	門金具か	長さ4.4cm	幅[2.8]cm	厚さ0.5cm	重さ23.5g				カマド	18-2
44	鉄製品	棒状品	長さ [4.9]cm	幅0.5cm	厚さ0.45cm	重さ13.4g				カマド	18-3
45	鉄製品	棒状品	長さ [4.8]cm	幅0.55cm	厚さ0.5cm	重さ9.2g				カマド	18-4

第3号住居跡（第27図）

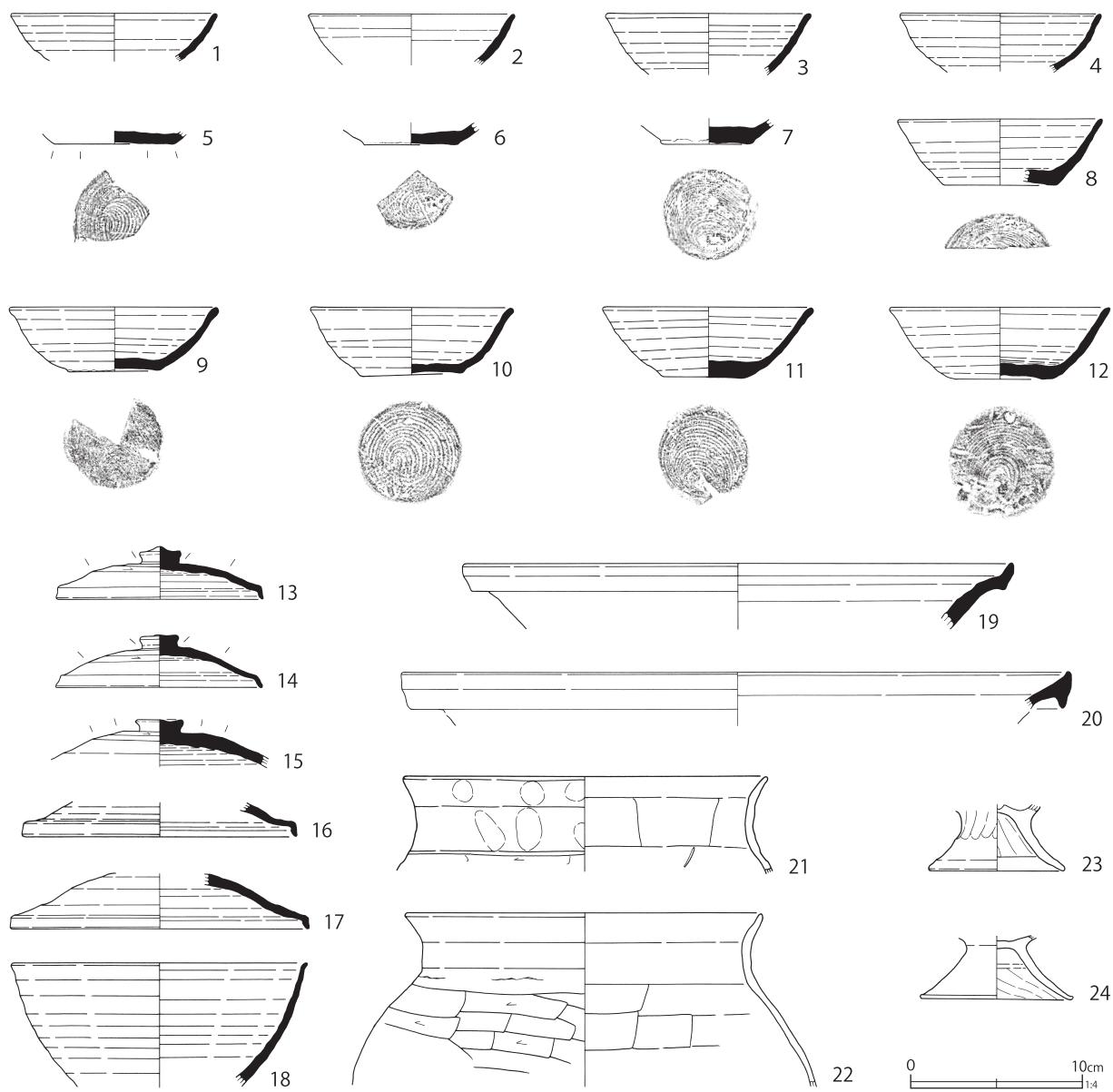
調査区中央のC・D-5グリッドに位置する。第2・11・12号住居跡と重複し、住居跡の大半が壊されていたため、住居跡の南東隅部から東壁の一部を検出したにすぎない。また、北半部は調査区域外に延びており、住居跡の全容については明確ではない。

住居跡の平面形は、方形と推定される。検出された規模は東壁長3.95m、南壁長0.85m、深さ0.18mである。東壁を基準にとれば、主軸方位はN-10°-Wを指す。

床面は調査区際に部分的に残っており、



第27図 第3号住居跡



第28図 第3号住居跡出土遺物

概ね平坦であった。検出された範囲にはカマドや柱穴、壁溝などの付属施設はなく、壁際に犬走り状の平坦面が巡っていた。

遺物は覆土中から須恵器壺・蓋・塊・甕、土師器甕・台付甕が出土した（第28図）。

1～12は須恵器壺である。底部回転糸切り離しが主体を占めているが、5は底部回転糸切り後、周辺に回転ヘラケズリによる再調整が施される。法量は口径11.7～12.8cm、器高3.7～4.1cm、底径4.9～6.6cmの範囲に収まる。1・4は体部に火

櫛痕が見られる。2は軟質の焼き上がりである。5・6は底部外面にヘラ記号の一部を残す。6は「×」であろう。

13～17は蓋である。法量から13・14は壺蓋、15～17は塊蓋と考えられる。13・15のつまみは扁平な擬宝珠形、14は釘頭形に近い。

18は塊である。復元口径17.0cmで、口唇部は肥厚せず、短く外反し、新しい様相が窺われる。

19・20は甕の口縁部で、小片のため口径は不定である。20は外面に自然釉が掛る。

第8表 第3号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	壺	(12.0)	[2.7]	—	I JK	20	良好	灰	南比企産 内面火襷痕	
2	須恵器	壺	(12.0)	[2.9]	—	E HK	20	不良	淡黄	南比企産か 軟質	
3	須恵器	壺	(12.0)	[3.5]	—	E I J	20	良好	灰	南比企産	
4	須恵器	壺	(11.7)	[3.4]	—	I JL	25	普通	褐灰	南比企産 内外面火襷痕	
5	須恵器	壺	—	[0.7]	7.0	I JK	25	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ ヘラ記号	
6	須恵器	壺	—	[1.2]	(5.4)	I JK	25	良好	灰白	南比企産 底部回転糸切り ヘラ記号「×」	
7	須恵器	壺	—	[1.4]	5.3	I JK	85	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り No.4	
8	須恵器	壺	(11.8)	3.8	(6.6)	I JK	20	普通	灰黄	南比企産 底部回転糸切り	
9	須恵器	壺	12.1	3.7	5.3	E I JK	60	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	13-10
10	須恵器	壺	11.7	3.9	6.0	E I JK	80	良好	黄灰	南比企産 底部回転糸切り No.1 SJ2	14-1
11	須恵器	壺	12.2	4.0	4.9	I J	60	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り No.12	14-2
12	須恵器	壺	(12.8)	4.1	6.0	E I JK	70	普通	灰黄	南比企産 底部回転糸切り No.5	14-3
13	須恵器	蓋	(12.0)	3.0	—	I J	30	良好	黄灰	南比企産	
14	須恵器	蓋	(12.0)	3.0	—	I JK	60	良好	灰	南比企産 SJ12	
15	須恵器	蓋	—	[2.8]	—	E I JK	70	良好	灰	南比企産 No.2	
16	須恵器	蓋	(16.0)	[2.0]	—	I JK	10	良好	灰白	南比企産	
17	須恵器	蓋	(17.4)	[3.2]	—	I JK	20	普通	灰白	南比企産 No.8	
18	須恵器	壺	(17.0)	[7.2]	—	E I J	30	良好	灰	南比企産 No.3	
19	須恵器	甕	(32.0)	[3.8]	—	I JK	5	良好	黄灰	南比企産	
20	須恵器	甕	(38.8)	[2.2]	—	E IK	5	良好	褐灰	南比企産か 外面自然釉	
21	土師器	甕	(21.4)	[5.5]	—	CHK	20	普通	黒褐	コの字状口縁甕 No.7	
22	土師器	甕	20.8	[10.0]	—	CHIK	30	普通	橙	コの字状口縁甕 No.9・11	14-4
23	土師器	台付甕	—	[3.8]	(7.8)	AHI	20	普通	橙		
24	土師器	台付甕	—	[3.7]	(9.0)	CHIK	55	普通	橙		

21・22は土師器のコの字状口縁甕である。21は口縁部外面に指頭圧痕を残す。22は胴部が球形に近くなる丸甕で、特徴的である。

23・24は台付甕の脚台部で、裾部は八の字状に大きく広がる。

住居跡の時期は、須恵器壺が底部回転糸切り離し未調整によって占められ、口径の2分の1よりも底径が小さくなっていることから新しい様相を示す。しかし、重複する第12号住居跡の遺物の混入が多く、時期を判断することは難しい。ここでは土師器の甕が典型的なコの字状口縁甕であり、口縁部の形態の崩れも少ないとから、9世紀前半に位置づけておきたい。

第4号住居跡（第29図）

調査区中央のD・E-5グリッドに位置し、北側には第12号住居跡が近接する。第5号溝跡が住

居跡の北西隅部から南壁にかけて、斜めに横切ることから、壁面及び床面の一部が壊されていた。

平面形は比較的形の整った正方形で、北壁にカドを設置した小型の住居跡である。規模は長軸3.40m、短軸3.38m、深さ0.07mで、主軸方位はN-4°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。覆土は多量の小礫を含む暗黄褐色土が主体をなし、全体に硬く締まっていた。壁溝をもたないが、ピットを4基検出した。ピット1は北東隅部に寄った位置にあり、平面橢円形で、規模は長径60cm、短径44cm、深さ18cmである。覆土は自然堆積を示す。位置的には貯蔵穴の可能性がある。ピット2・3は径20cm、深さ18cm前後と小規模であるが、東西に対向する位置にあることから柱穴の可能性が考えられる。ピット4は南東隅部寄りに位置し、平面円形で、

規模は径46cm、深さ12cmである。覆土中に炭化物・小礫が含まれていた。

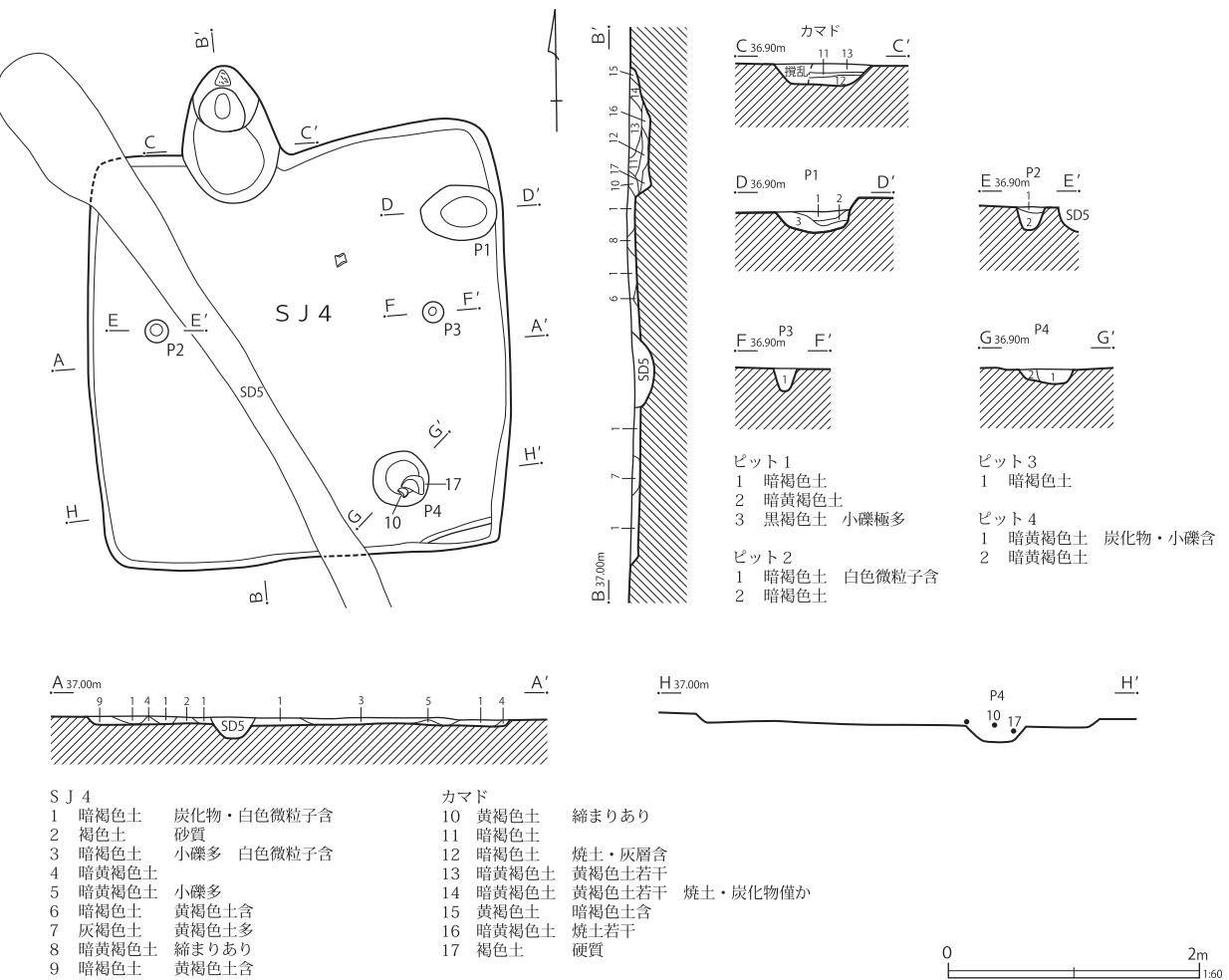
カマドは北壁の中央やや西寄りに設けられていた。袖部は遺存せず、平面橢円形の燃焼部を壁外に掘り込む。燃焼部の先端に拳大の円礫が置かれていたが、底面から浮いた状態であり、支脚として使用されたものではない。規模は長さ1.08m、燃焼部幅0.78mで、皿状に浅く掘り込んでいた。カマドの覆土は、焼土・灰層を含む第12層が火床面、第16・17層が掘り方埋土に相当する。

遺物は須恵器壺・蓋・甕、土師器甕、棒状鉄製品が出土した（第30図）。

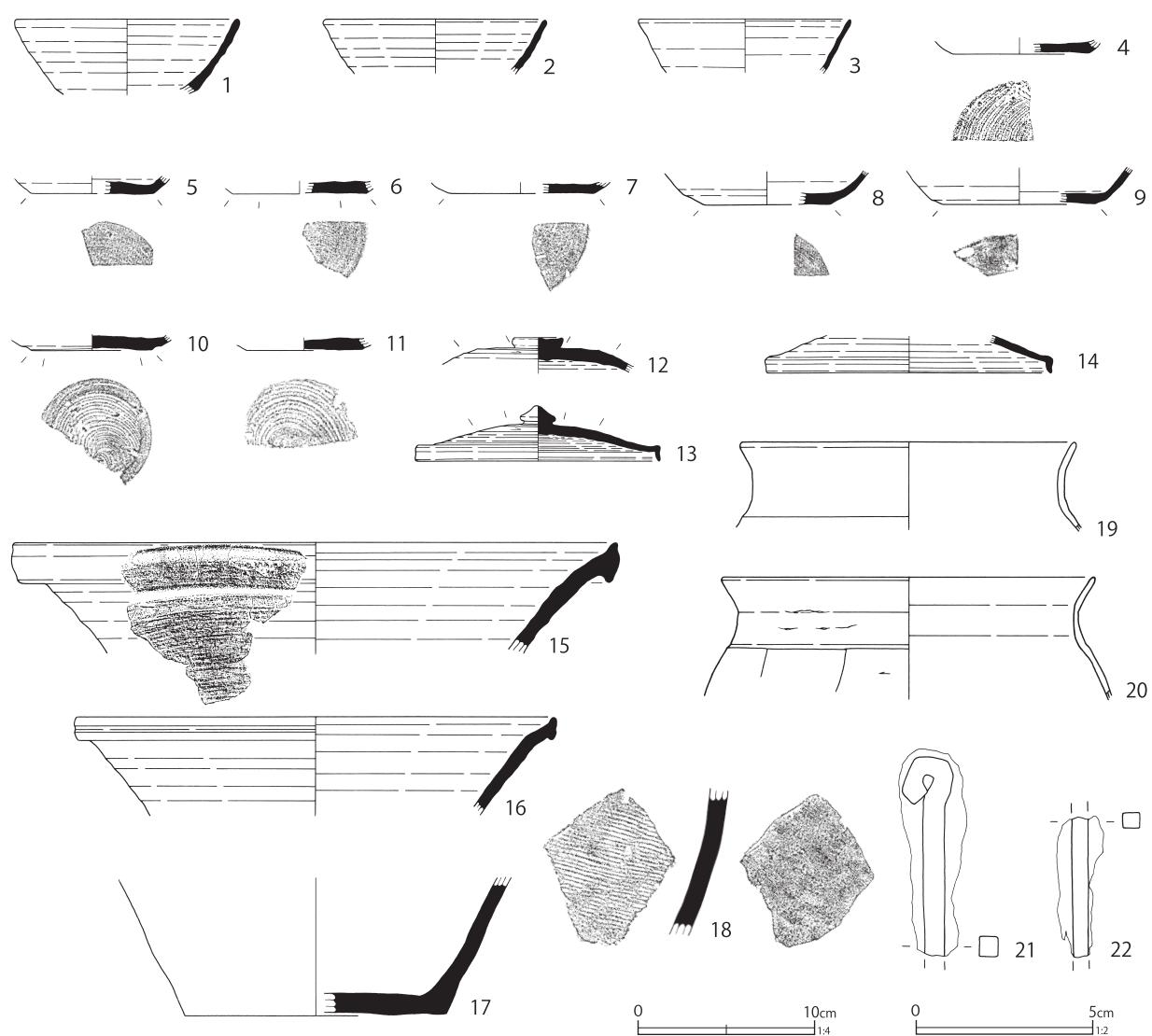
1～11は須恵器壺である。小片が多く、全体の器形のわかるものは少ない。4・11のみが底部回転糸切り離し未調整で、他は回転ヘラケズリによ

る再調整を施す。12～14は蓋である。12は扁平なボタン状のつまみが付き、13は扁平な笠形の器形で、宝珠形のつまみが付く。15～18は甕である。15は外面に黒色の自然釉が掛る。17は平底の甕で、外面に自然釉、内面の見込みに降灰が付着する。ピット4の中に落ち込んだ状態で出土した。18は胴部の破片で、外面に平行叩き目、内面にナデを施す。19・20は土師器のコの字状口縁甕で、胴部外面は横方向のヘラケズリを施している。カマド覆土から出土した。21・22は棒状鉄製品で、用途・性格は不明である。21は端部が輪状を呈している。22はカマド覆土から出土した。

住居跡の時期は、須恵器壺に再調整を施すものが多く、土師器のコの字状口縁甕が伴出することから9世紀初頭から前半に位置づけられる。



第29図 第4号住居跡



第30図 第4号住居跡出土遺物

第9表 第4号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	壺	(12.6)	[4.2]	—	H I J K	20	良好	黄灰	南比企産	
2	須恵器	壺	(12.6)	[3.0]	—	I J K	5	良好	黄灰	南比企産	
3	須恵器	壺	(12.0)	[3.0]	—	I K	5	良好	灰	南比企産か	
4	須恵器	壺	—	[0.8]	(7.8)	E I J K	20	普通	黄灰	南比企産 底部回転糸切り	
5	須恵器	壺	—	[1.0]	(7.0)	I J K	25	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
6	須恵器	壺	—	[0.7]	(7.6)	I J K	15	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ カマド	
7	須恵器	壺	—	[0.6]	(8.2)	I J K	15	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
8	須恵器	壺	—	[1.9]	(7.0)	I J K	10	良好	灰黄	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
9	須恵器	壺	—	[2.1]	(8.8)	HK	15	不良	淡黄	底部回転ヘラケズリ 軟質	
10	須恵器	壺	—	[0.9]	(7.0)	E I J K	60	良好	黄灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ No.2	
11	須恵器	壺	—	[0.7]	(6.6)	I J K	45	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	
12	須恵器	蓋	—	[1.9]	—	E H I J	30	良好	灰	南比企産 カマド	
13	須恵器	蓋	(13.8)	[3.1]	—	E I J K	35	普通	灰	南比企産	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
14	須恵器	蓋	(16.0)	[2.1]	—	IJK	10	普通	灰	南比企産	
15	須恵器	甕	(34.0)	[6.4]	—	EIKL	5	良好	黄灰	南比企産か 外面自然釉(黒色)	
16	須恵器	甕	(27.0)	[5.6]	—	IJK	10	良好	褐灰	南比企産	
17	須恵器	甕	—	[7.8]	(15.0)	EIJK	40	良好	灰オリーブ	南比企産 外面自然釉 内面降灰 No.1	
18	須恵器	甕	—	[8.4]	—	IJL	5	良好	灰黄褐	南比企産 外面平行叩き目 内面ナデ	
19	土師器	甕	(19.0)	[5.0]	—	C E H I	5	普通	橙	コの字状口縁甕 カマド	
20	土師器	甕	(21.0)	[7.0]	—	H I K	25	普通	にぶい橙	コの字状口縁甕 カマド	
21	鉄製品	棒状品	長さ [5.6]cm 幅0.55cm 厚さ0.55cm 重さ23.4g						端部輪状	18-5	
22	鉄製品	棒状品	長さ [3.9]cm 幅0.5cm 厚さ0.45cm 重さ5.8g						カマド	18-6	

第5号住居跡 (第31図)

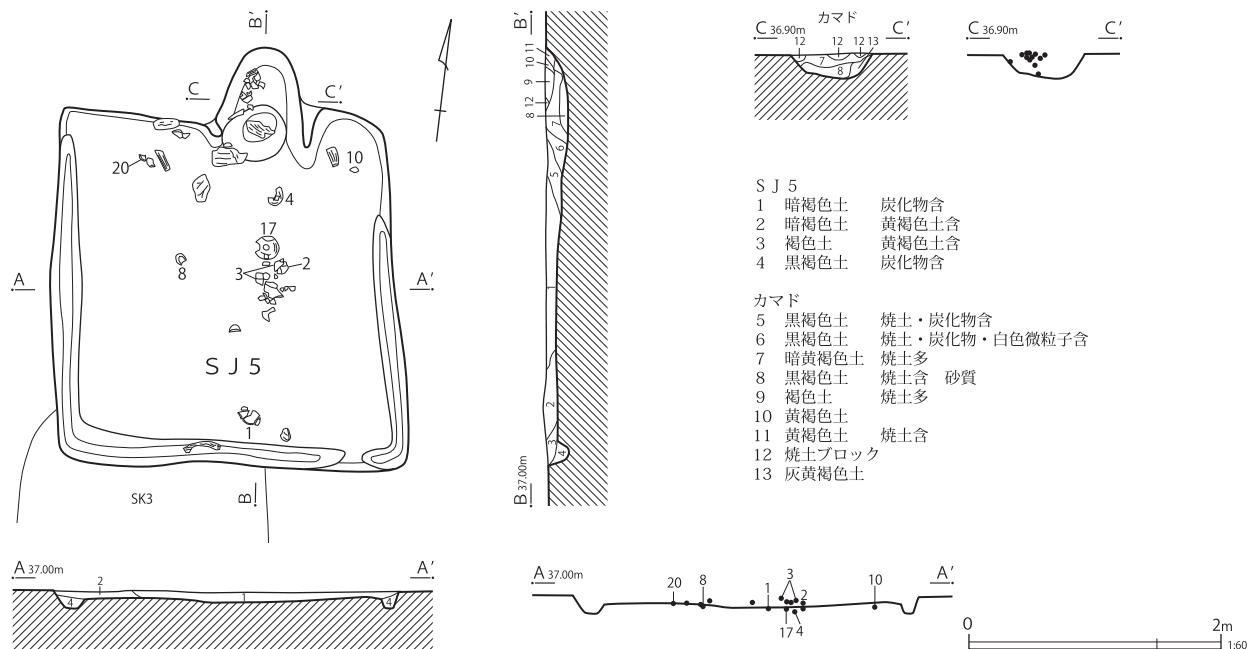
調査区中央のE-5グリッドに位置する。平面形は正方形に近い。規模は長軸2.86m、短軸2.80m、深さ0.12mで、主軸方位はN-9°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。壁溝はカマドのある北壁を除いて、壁際を巡り、幅15~28cm、深さ4~28cmである。覆土は概ね自然堆積を示していた。

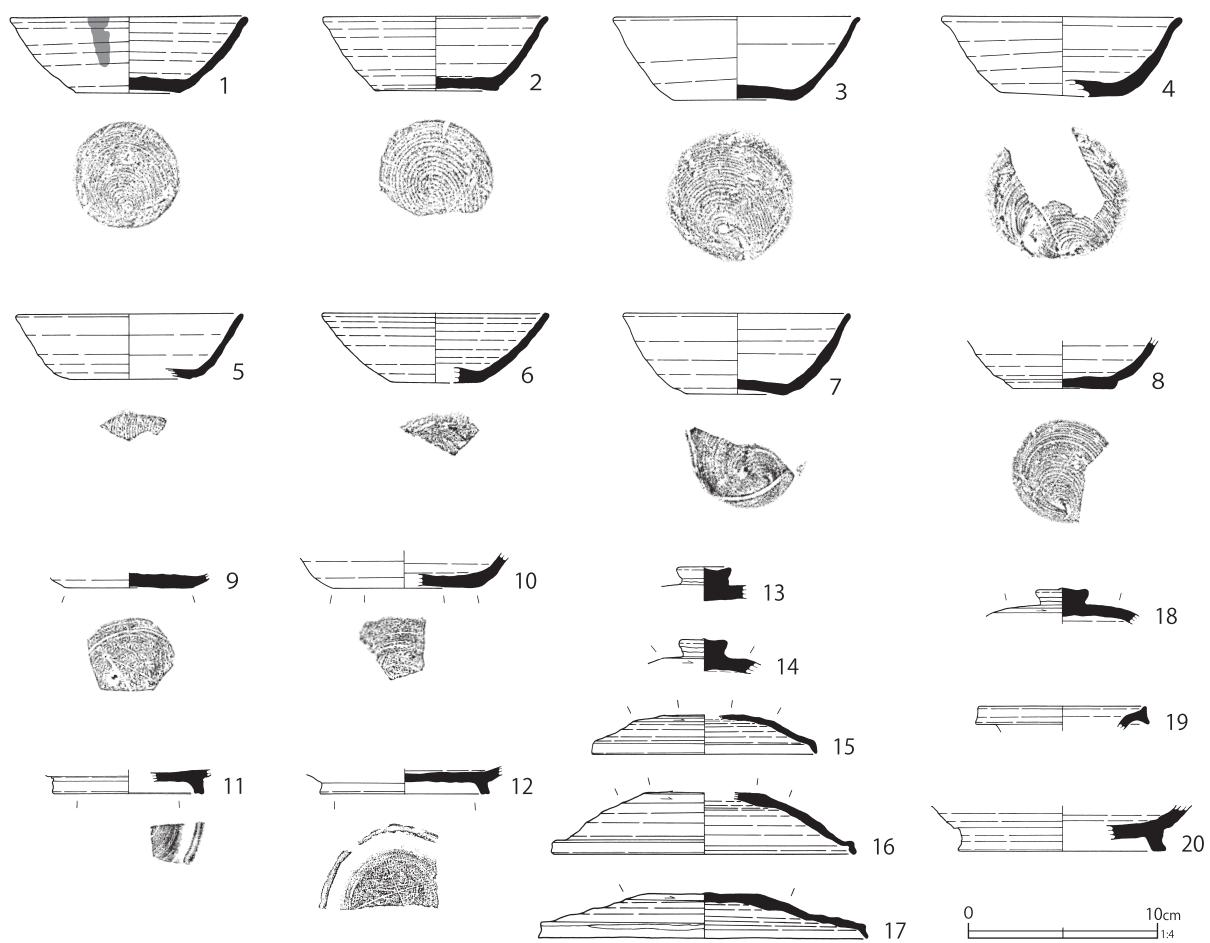
カマドは北壁のほぼ中央に設置されていた。規模は長さ0.89m、燃焼部幅0.68mで、平面楕円形に壁を切り込む。袖部は地山の黄褐色土によって構築され、カマド周辺に袖部や天井部の補強材に用いられたと考えられる、被熱を受けた大型の円礫が散在していた。

遺物は須恵器壊・高台付壊・蓋・長頸瓶が出土した(第32図)。1~10は須恵器壊である。底部回転糸切り離しを主体とし、浅身と深身に分かれ。1は体部外面に油煙痕を残す。4は底部に焼成時の亀裂が入る。8~10は底部外面にヘラ記号の一部が残る。11・12は高台付壊で、12は底部外面に「×」のヘラ記号が刻まれる。13~18は蓋である。15は壊蓋、16・17は塊蓋であろう。16は天井部外面に回転糸切り痕を残す。17は無鉢の蓋で、口縁部が焼き歪んでいる。13・14・18のつまみは擬宝珠形である。19・20は長頸瓶である。20の高台はハの字に開き、安定感がある。

住居跡の時期は、出土した土器の特徴から9世紀後半に位置づけられる。



第31図 第5号住居跡



第32図 第5号住居跡出土遺物

第10表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	坏	12.4	4.0	5.5	H I J K L	80	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り 外面一部油煙付着 No.11	14-5
2	須恵器	坏	(11.9)	3.8	6.4	I J K	50	普通	褐灰	南比企産 底部回転糸切り 外面糸引き抜き痕 No.5	14-6
3	須恵器	坏	12.9	4.3	6.5	H I J K L	80	普通	灰黄	南比企産 底部回転糸切り No.4・6	14-7
4	須恵器	坏	12.6	4.0	6.5	I J K	75	普通	褐灰	南比企産 底部回転糸切り No.2	14-8
5	須恵器	坏	(12.0)	3.4	(6.6)	E I J	15	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り	
6	須恵器	坏	(12.0)	3.6	(4.1)	E I J	35	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	
7	須恵器	坏	(12.0)	4.2	(5.4)	I J K	45	不良	灰白	南比企産 底部回転糸切り	14-9
8	須恵器	坏	—	[2.7]	5.4	I J K	70	普通	灰黄	南比企産 底部回転糸切り 底部ヘラ記号「-」 No.12	
9	須恵器	坏	—	[0.8]	(6.8)	H I J L	25	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ 底部ヘラ記号	
10	須恵器	坏	—	[1.8]	(7.6)	I J	15	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後回転ヘラケズリ 底部ヘラ記号 No.1	
11	須恵器	高台付坏	—	[1.3]	(8.0)	I J K	5	良好	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
12	須恵器	高台付坏	—	[1.4]	(9.0)	E I J K	60	良好	黄灰	南比企産 底部ヘラ記号「×」	
13	須恵器	蓋	—	[1.8]	—	I J K	85	良好	黄灰	南比企産	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
14	須恵器	蓋	—	[1.8]	—	H I J	70	良好	灰黄	南比企産	
15	須恵器	蓋	(12.0)	[2.1]	—	E I J K	30	普通	灰	南比企産	
16	須恵器	蓋	(16.0)	[3.2]	—	E H I J K	15	普通	灰	南比企産 天井部回転糸切り痕	
17	須恵器	蓋	17.5	2.4	—	G I J L	95	普通	灰黄	南比企産 焼き歪み No.3	14-10
18	須恵器	蓋	—	[1.8]	—	A I J K	30	良好	灰白	南比企産	
19	須恵器	長頸瓶	(8.8)	[1.2]	—	E I J K	5	良好	灰	南比企産 内面降灰	
20	須恵器	長頸瓶	—	[2.4]	(11.0)	I J K	20	良好	灰黄褐	南比企産 No.13	

第6号住居跡（第33図）

調査区中央のD-4グリッドに位置し、北半分は調査区域外に延びる。第7号住居跡と重複しており、南西隅部が壊されていた。

平面形は東西に軸方向をとる長方形の可能性が高い。検出された規模は長軸3.11m、短軸1.78m、深さ0.18mである。主軸方位は南壁を基準にとれば、N-82°-Eを指す。

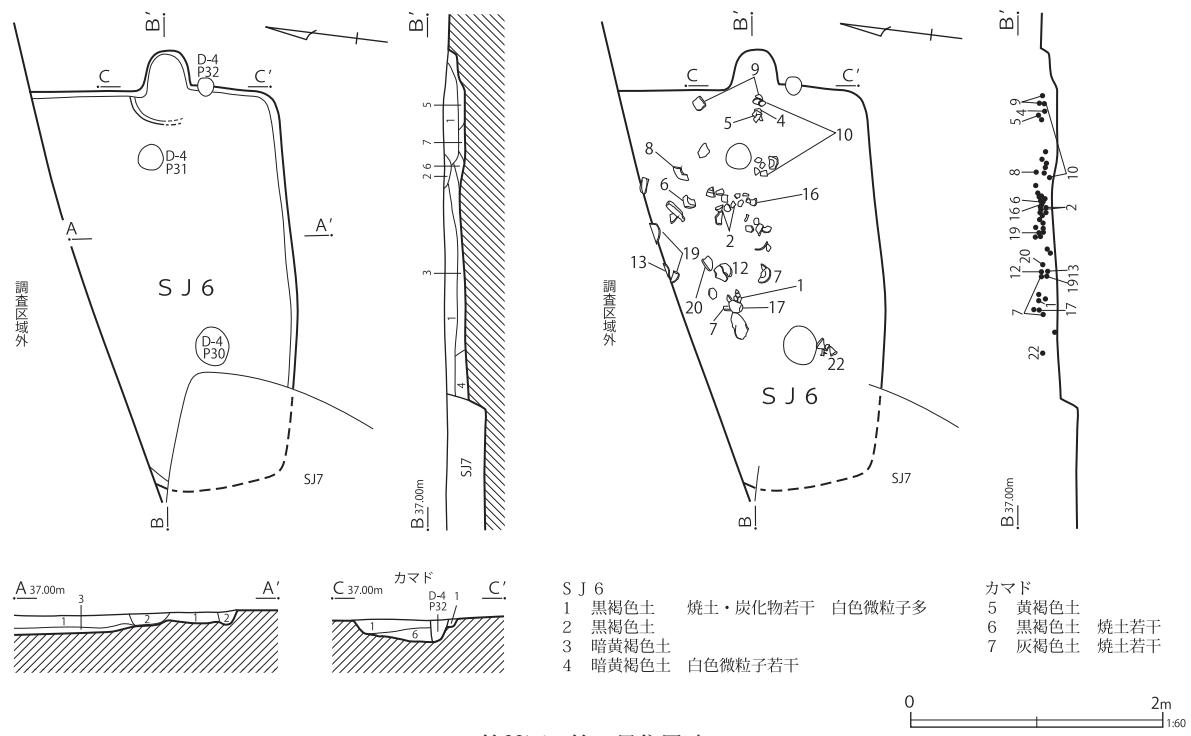
床面はやや凹凸が見られる。後世のピットが幾つか重複していたが、住居に伴う柱穴や壁溝などは検出されなかった。覆土は黒褐色土、暗黄褐色土を基調とし、概ね自然堆積を示す。

カマドは東壁の南東隅部寄りに設置されていた。燃焼部は床面を浅く掘り込み、壁外に張り出す。

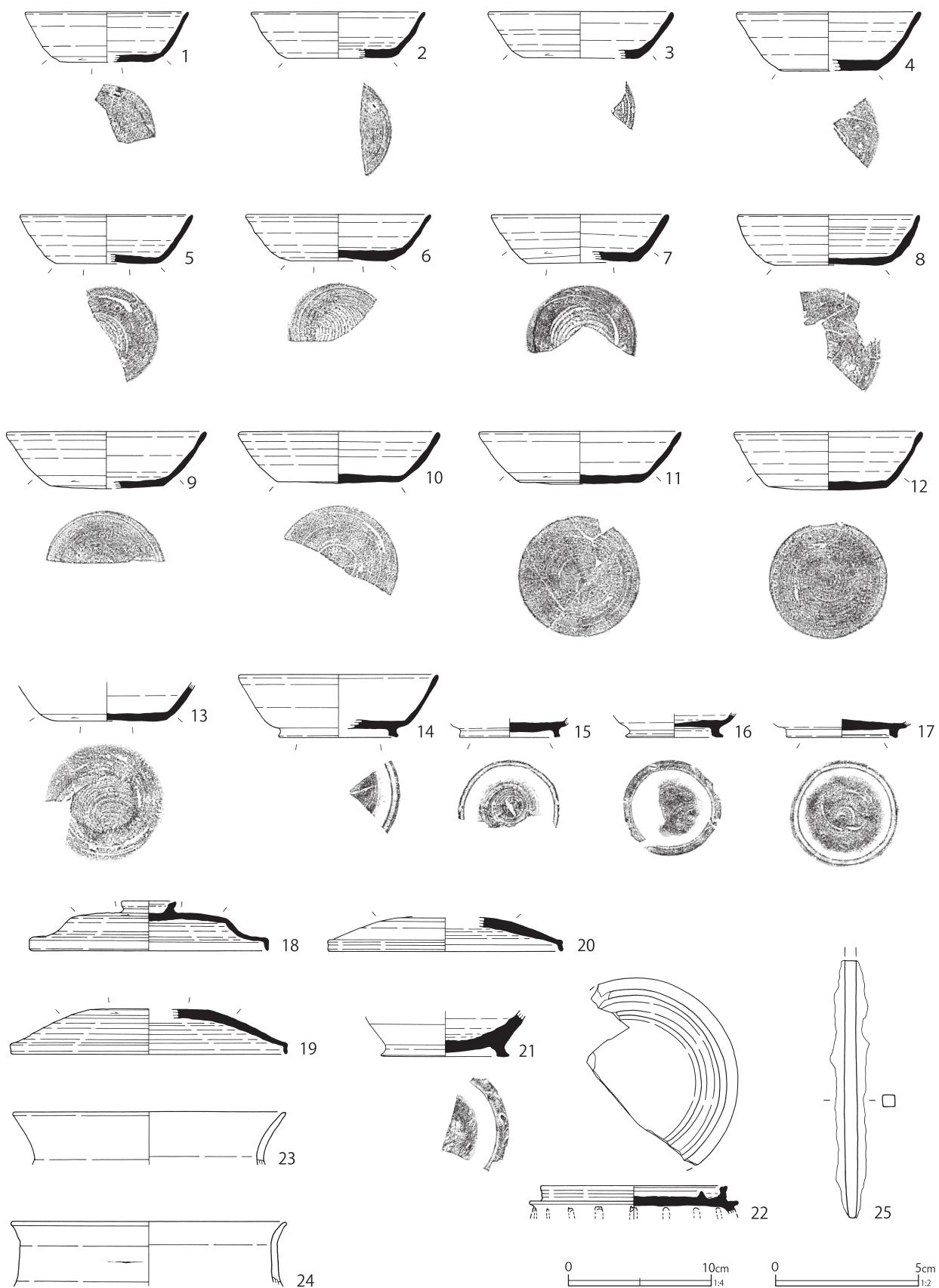
規模は長さ0.58m、燃焼部幅0.42mである。袖部はほとんど残っておらず、火床面も明瞭ではない。

遺物は住居の中央にまとまって出土した。いずれも床面からやや浮いた状態であった。須恵器壺に混じって、南東隅部寄りからは円面硯が出土した。遺物は須恵器壺・高台付壺・蓋・長頸瓶・円面硯、土師器甕、棒状鉄製品がある（第34図）。

1~13は須恵器壺である。法量は口径11.4~14.0cm、器高3.2~4.1cm、底径6.6~8.4cmの範囲に収まる。底部調整は全面ヘラケズリと回転糸切り離し後周辺及び体部下端に回転ヘラケズリを施すものに分かれる。14~17は高台付壺である。体部は腰をもって立ち上がる。18~20は蓋で、18は高台状つまみの付いた佐波理模倣蓋である。21は長



第33図 第6号住居跡



第34図 第6号住居跡出土遺物

第11表 第6号住居跡出土遺物観察表（第34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	壺	(11.4)	3.5	(6.6)	I J K	15	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ No.3	
2	須恵器	壺	(12.0)	3.2	(7.2)	C I J	25	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ No.20・25	
3	須恵器	壺	(12.7)	3.2	(8.0)	I J	15	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
4	須恵器	壺	(12.6)	4.1	(6.6)	G I J	30	普通	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ No.44 カマド	
5	須恵器	壺	(12.0)	3.4	(7.0)	E I J	35	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ 内外面火櫻痕 No.40	
6	須恵器	壺	(12.8)	3.3	(6.8)	I J K	30	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ No.18	
7	須恵器	壺	12.2	3.4	7.7	I J K	50	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ No.6・11	15-1
8	須恵器	壺	(12.6)	3.5	(7.4)	I J K	35	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ No.17	
9	須恵器	壺	(13.8)	4.0	(8.0)	E I J K	40	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ No.42・45	15-2
10	須恵器	壺	(13.8)	3.6	(8.4)	I J K	40	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ No.38・41	
11	須恵器	壺	(14.0)	3.6	8.4	I J K	60	良好	灰白	南比企産 底部回転ヘラケズリ カマド	
12	須恵器	壺	(13.0)	4.1	8.3	I J K	60	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ No.10	15-3
13	須恵器	壺	—	[2.8]	8.2	H I J K	60	不良	灰白	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ No.49	
14	須恵器	高台付壺	(13.8)	4.4	(8.4)	I J K	10	良好	紫灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ カマド	
15	須恵器	高台付壺	—	[1.4]	7.0	I J L	65	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
16	須恵器	高台付壺	—	[1.7]	6.8	E I J K	70	良好	褐灰	南比企産 底部回転糸切り後ナデ No.28	
17	須恵器	高台付壺	—	[1.3]	7.6	I J	90	普通	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ No.4	
18	須恵器	蓋	(16.8)	3.4	—	E I J	25	普通	灰	南比企産 佐波理模倣	
19	須恵器	蓋	(19.1)	[3.1]	—	I J K	40	普通	黄灰	南比企産 No.8・14	
20	須恵器	蓋	(16.2)	[2.4]	—	I J K	30	良好	灰	南比企産 No.9	
21	須恵器	長頸瓶	—	[3.2]	(9.0)	E I J K	25	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
22	須恵器	円面硯	(13.0)	[2.0]	—	I J K	40	良好	灰	南比企産 砥面降灰 No.1	15-4
23	土師器	甕	(19.0)	[3.7]	—	A E H I K	5	普通	橙	くの字状口縁甕	
24	土師器	甕	—	[4.5]	—	C E H I	5	普通	にぶい橙	コの字状口縁甕	
25	鉄製品	棒状品	長さ [8.95]cm	幅0.45cm	厚さ0.4cm	重さ15.2g					18-7

頸瓶の底部。22は円面硯で、脚部を欠損する。硯部に断面三角形の内堤をもつ。23・24は土師器甕で、23はくの字状口縁、24はコの字状口縁である。25は棒状鉄製品で、用途・性格は明確ではない。

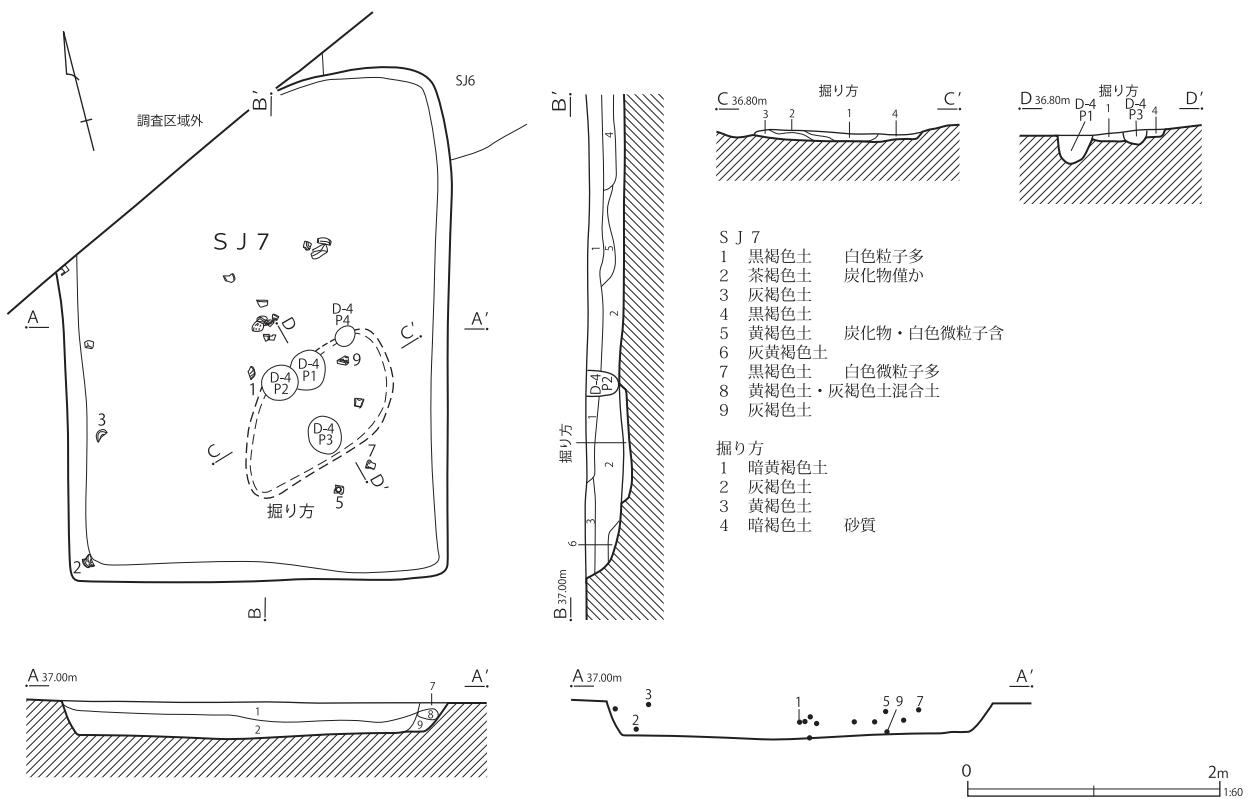
住居跡の時期は、須恵器壺が口径12~14cmの浅身のものが主体を占めることから、8世紀中頃に位置づけられる。今回報告する該期の住居跡の中では最も古い時期である。

第7号住居跡（第35図）

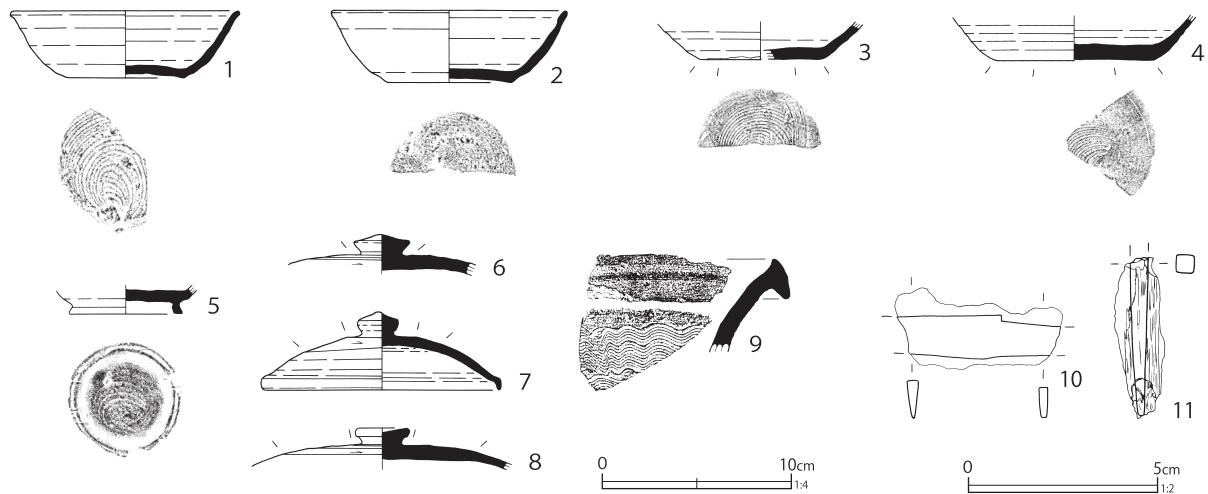
調査区中央のD-4グリッドに位置する。住居跡の北東隅部が第6号住居跡と重複し、それを壊す。また、北西隅部は調査区外に延びており、全容は不明である。

平面形は長方形と推定される。規模は長軸4.04m、短軸3.06m、深さ0.28mである。主軸方位はN-14°-Eを指す。

覆土は東壁際に堆積する第7~9層など人為的



第35図 第7号住居跡



第36図 第7号住居跡出土遺物

な埋戻しの可能性がある。床面は概ね平坦である。壁溝や柱穴などの付属施設はないが、住居跡の南東寄りの床面に不整形の掘り方が検出された。

遺物は覆土の中層から上層にかけて出土し、床面上のものは少ない。須恵器壺・高台付壺・蓋・塼・甕、鉄製品の刀子・釘がある(第36図)。

1・2は浅身の須恵器壺で、底部回転糸切り離

し未調整、3は底部周辺に回転ヘラケズリを加える。4は底部の器肉が厚いことから塼とした。底部は回転糸切り離し後、周辺に回転ヘラケズリを加える。

6～8は蓋で、つまみは6・7が擬宝珠形、8が中くぼみの釘頭形である。

9は甕の口縁部片で、外面に櫛描波状文を施文

第12表 第7号住居跡出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	壺	(12.0)	3.5	(6.4)	I JK	50	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り No.3	15-5
2	須恵器	壺	(12.3)	3.8	(6.6)	I JL	40	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り No.1	
3	須恵器	壺	—	[2.0]	(6.4)	I JK	30	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ No.2	
4	須恵器	壺	—	[2.4]	(8.4)	I JL	20	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ	
5	須恵器	高台付壺	—	[1.5]	5.9	I JK	90	良好	灰白	南比企産 底部回転糸切り後ナデ No.4	
6	須恵器	蓋	—	[2.1]	—	I JK	30	良好	灰白	南比企産	
7	須恵器	蓋	12.5	4.1	—	I J	60	良好	灰	南比企産 内面降灰 No.5 SD3	15-6
8	須恵器	蓋	—	[2.2]	—	I JK	50	普通	灰白	南比企産	
9	須恵器	甕	—	[4.9]	—	I JK	5	良好	暗灰	南比企産 外面櫛描波状文 14条 / 単位 No.7	
10	鉄製品	刀子	長さ [4.3]cm 幅1.2cm 背幅0.3cm 重さ12.1g						棟関直角 刃関鈍角	18-8	
11	鉄製品	釘	長さ [4.2]cm 幅0.5cm 厚さ0.5cm 重さ4.9g						木軸残存	18-9	

する。10は刀子の刃部から茎にかけての破片である。11は釘の軸部の破片で、木質が付着する。覆土中から出土した。

住居跡の時期は、9世紀前半に位置づけられる。

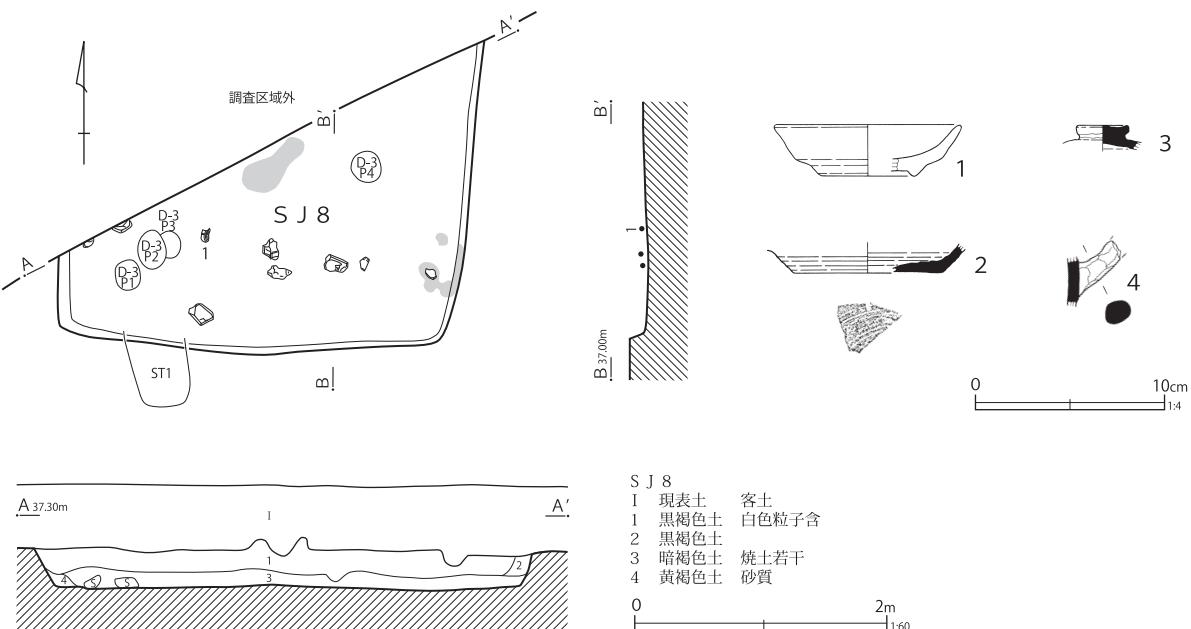
第8号住居跡（第37図）

調査区中央の西寄りD-3・4グリッドに位置する。北半分が調査区域外に延び、南西隅部付近に第1号火葬跡が重複していた。平面形は方形と推定される。検出した規模は南壁長3.05m、東壁長2.45m、深さ0.30mで、主軸方位は東壁を基準

とした場合、N-3°-Eを指す。

床面は概ね平坦である。覆土は大きく4層に分層され、自然堆積を示す。カマドや柱穴、壁溝などの付属施設はない。住居の中央と南東隅部寄りの床面上に焼土が薄く堆積し、床面及び壁面の一部が被熱のため赤く焼けていた。被熱痕の残り具合から炉跡と認定することは難しかった。また、床面には20cm大の角礫が数個置かれていたが、意図的な配置かどうかは判断できなかった。

遺物は全体に少なく、図示できたのは口クロ土



第37図 第8号住居跡・出土遺物

第13表 第8号住居跡出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	口クロ 土師器	高台付 小皿	(9.8)	2.7	(5.0)	A H J K	50	不良	にぶい黄橙	南比企産 摩耗顯著 No.3	
2	須恵器	壺	—	[1.5]	(7.9)	E I J	15	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り	
3	須恵器	蓋	—	[1.3]	—	E J K	85	良好	灰	南比企産	
4	須恵器	把手	—	3.4	—	H I K	100	普通	灰白	南比企産か 環状把手 外面一部自然釉 断面径1.2×1.4cm	

師器の高台付小皿、須恵器壺・蓋・長頸瓶の把手である（第37図）。

住居跡の時期は、須恵器壺から9世紀中頃に位置づけられる。伴出した高台付小皿は10世紀中頃のもので、混入であろう。

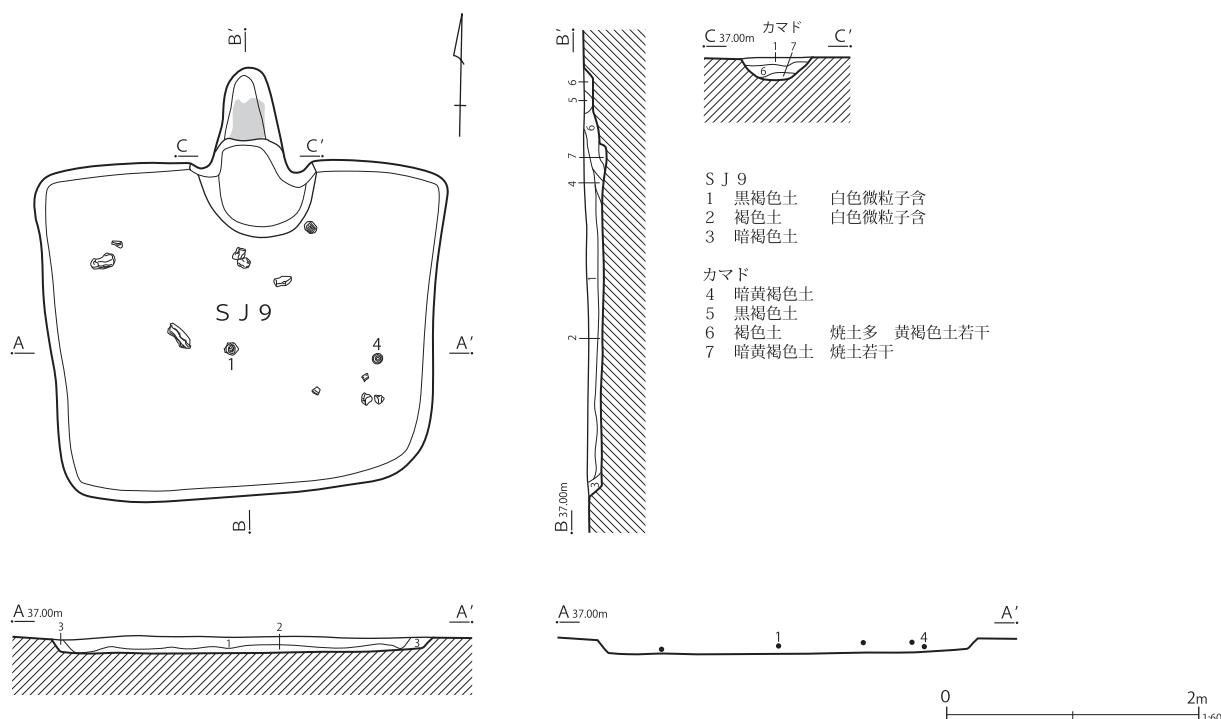
第9号住居跡（第38図）

調査区南側のF-3グリッドに、住居跡群から離れて単独で位置する。北壁にカマドをもつ小型

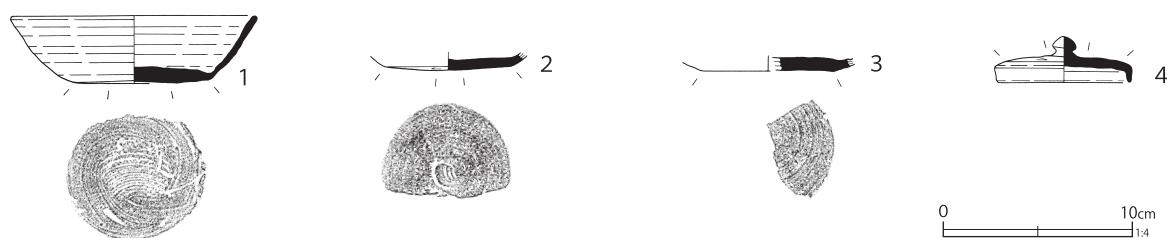
の住居跡である。規模は長軸3.25m、短軸2.66m、深さ0.12mで、東西方向にやや長い。主軸方位は東壁を基準とした場合、N-5°-Wを指す。

床面は概ね平坦である。覆土は大きく3層に区分され、自然堆積を示す。カマド以外には、貯蔵穴や柱穴、壁溝などの付属施設はなかった。

カマドは北壁のほぼ中央に設けられていた。床面を円形に燃焼部を掘り込み、奥壁に僅かな段差



第38図 第9号住居跡



第39図 第9号住居跡出土遺物

第14表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	壺	13.0	3.6	7.4	I J	60	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ 内外面火櫻痕 No.4	15-7
2	須恵器	壺	—	[1.0]	(6.8)	I J K	50	良好	灰白	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ	
3	須恵器	壺	—	[0.7]	(7.0)	I J	30	良好	にぶい赤褐	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
4	須恵器	蓋	7.0	2.4	—	I J K	100	良好	灰	南比企産 No.1	15-8

を作り出して、煙道部に移行する。煙道部の底面は高熱のため赤く焼き締まっていた。袖部は地山の黄褐色土を掘り残して構築されていた。カマド覆土の第6層が焼土を多量に含むことから火床面もしくは天井崩落土であろう。カマドの規模は長さ1.34m、燃焼部幅0.58m、深さ0.17mである。

遺物は全体に少なく、須恵器壺・蓋のみである(第39図)。1～3は須恵器壺である。底部調整は回転糸切り離し後、周辺に回転ヘラケズリを施す。1は体部の内外面に火櫻痕を残す。4は口径7.0cmの小型の蓋で、完形品である。扁平な蓋で、小さな宝珠形のつまみを貼付する。おそらく薬壺形の短頸壺あるいはコップ形の蓋であろう。

住居跡の時期は、須恵器壺の特徴から8世紀後半に位置づけられる。

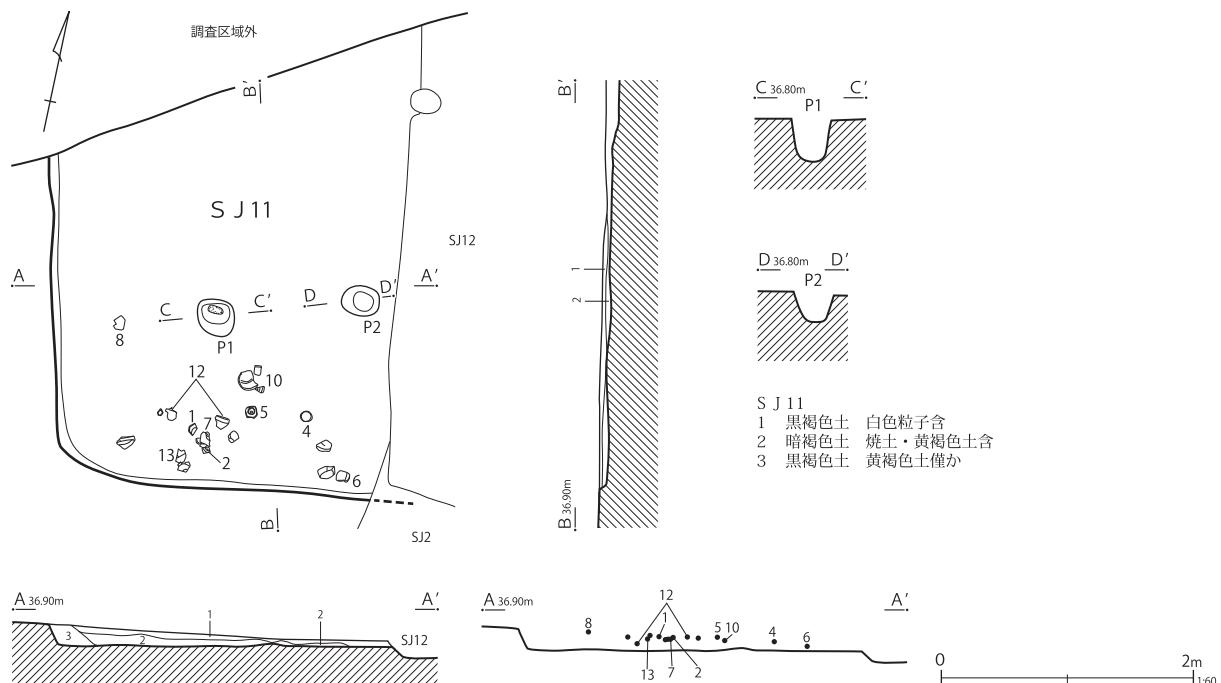
第11号住居跡 (第40図)

調査区中央のD-5グリッドに位置する。第2・12号住居跡と重複し、東半部が壊されていた。また、北半部が調査区域外に延びる。

平面形は方形と推定される。検出した規模は長軸3.75m、短軸2.72m、深さ0.14mである。主軸方位はN-11°-Wを指す。

床面は概ね平坦であるが、硬化面や壁溝は認められなかった。ピットは2基検出された。床面中央に芯々で1.20mの間隔でピット1・2が並列する。ピット1は径29cm、深さ34cmで、覆土中に円礫を混入していた。ピット2は径30×24cm、深さ22cmである。両者とも柱穴と考えられるが、明確な柱痕は見られなかった。

遺物は南壁側にまとまっており、覆土中からの

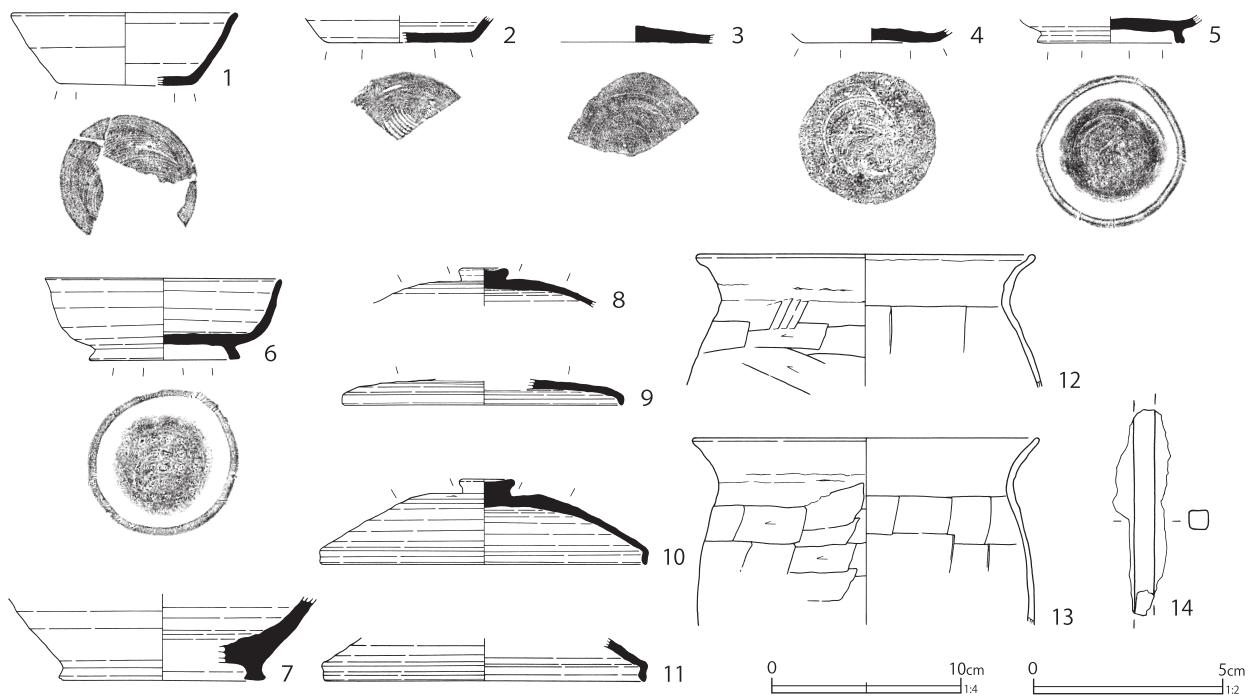


第40図 第11号住居跡

出土が多い。須恵器坏・高台付坏・蓋・長頸瓶、土師器甕、棒状鉄製品がある（第41図）。1～4は須恵器坏で、全面回転ヘラケズリの3以外は、回転糸切り離し後、周辺に回転ヘラケズリを施す。5・6は高台付坏である。6は高台から腰をもって立ち上がる。17は長頸瓶の底部である。8

～11は蓋である。9は天井部の平らな特徴的な蓋である。12・13はくの字状口縁のいわゆる武藏型甕である。14は断面矩形の棒状鉄製品で、鉄鎌や釘の可能性が考えられる。

住居跡の時期は、須恵器坏や土師器甕の特徴から8世紀後半に位置づけられる。



第41図 第11号住居跡出土遺物

第15表 第11号住居跡出土遺物観察表（第41図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	坏	11.9	[3.8]	7.2	E H I J K	80	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ No.10	15-9
2	須恵器	坏	—	[1.9]	(8.0)	I J K	15	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ No.6	
3	須恵器	坏	—	[0.9]	—	J	30	良好	灰	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
4	須恵器	坏	—	[0.7]	7.4	I J K	85	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ 底部ヘラ記号「×」 No.15	
5	須恵器	高台付坏	—	[1.4]	7.8	I J K	90	良好	灰黄	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ No.13	
6	須恵器	高台付坏	12.5	4.2	8.0	I J K	70	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ No.16	16-1
7	須恵器	長頸瓶	—	[4.4]	(11.0)	E I J K	25	良好	黄灰	南比企産 見込み降灰 No.7	
8	須恵器	蓋	—	[2.1]	—	I J K	70	普通	灰	No.1	
9	須恵器	蓋	(14.8)	[1.3]	—	I J K	15	普通	灰	南比企産	
10	須恵器	蓋	17.3	4.4	—	H I J K	90	普通	灰	南比企産 内面重ね焼き痕（高台） No.14 SJ2	16-2
11	須恵器	蓋	(17.0)	[2.2]	—	H I J K	15	良好	灰	南比企産	
12	土師器	甕	(17.7)	[7.0]	—	C H I K	25	普通	にぶい赤褐	くの字状口縁甕 No.11	
13	土師器	甕	(18.4)	[9.8]	—	A C E H I	15	普通	明赤褐	くの字状口縁甕 No.4	
14	鉄製品	棒状品	長さ [5.4]cm 幅0.5cm 背幅0.5cm 重さ8.2g							18-10	

第12号住居跡（第42図）

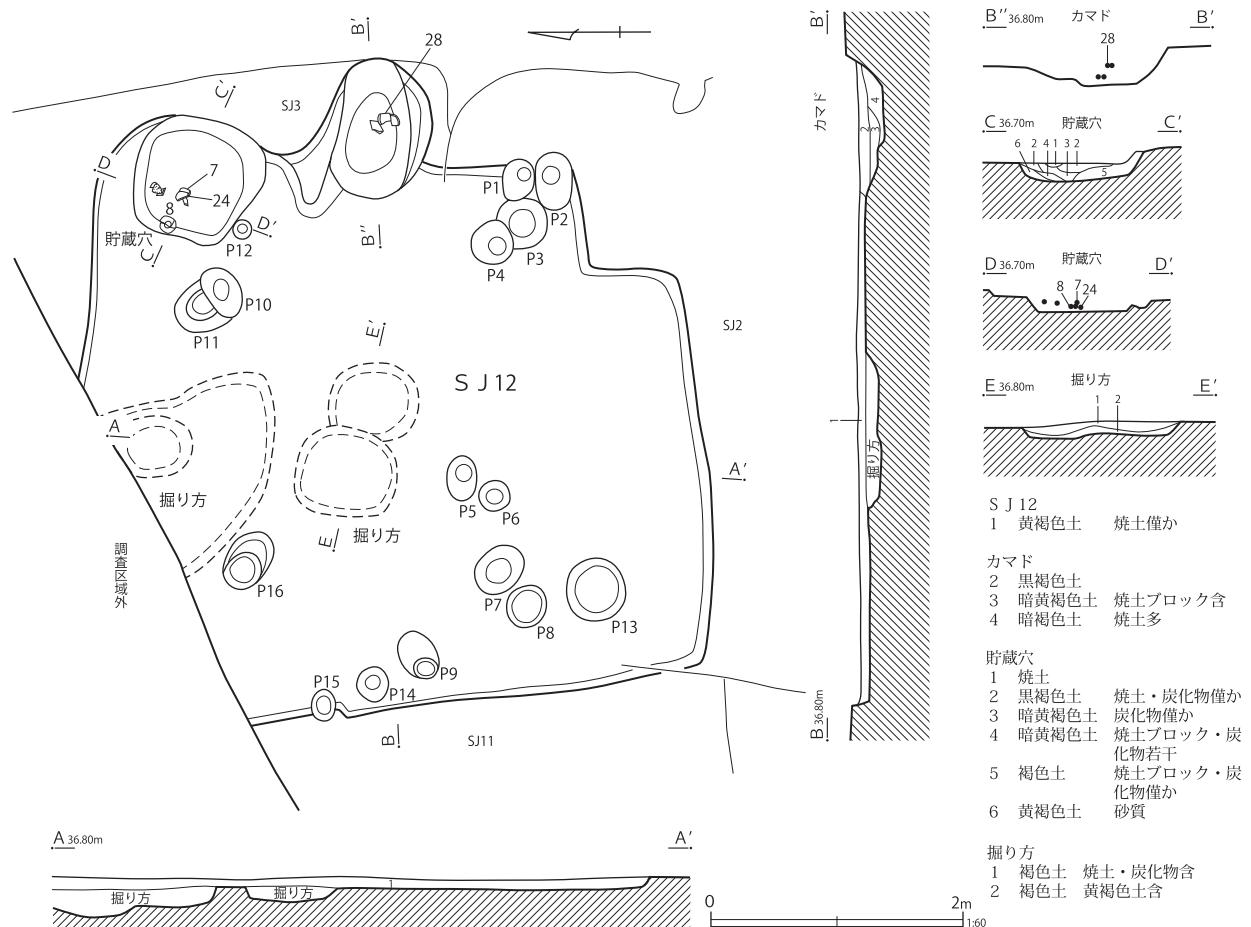
調査区中央のC・D-5グリッドに位置する。東壁のほぼ中央にカマドを設け、南壁に長方形の張り出しをもつ住居跡である。第2・3・11号住居跡と重複し、第3・11号住居跡を壊し、第2号住居跡によって壊されていた。なお、南壁の張り出しが住居跡の重複を考慮すべきであるが、明確にし得なかった。

平面形は方形を基調とする。規模は長軸4.82m、短軸4.18m、深さ0.07mである。主軸方位はN-87°-Eを指す。床面は概ね平坦で、壁溝をもたない。床面の中央と北西側に不整形の掘り方が見られ、褐色土による貼床が施されていた。ピットは計16基を検出した。このうち位置関係から、南東隅のピット3・4、南西隅の7・8、北東隅の10・11、北西隅の16が主柱穴に相当する。同じ場

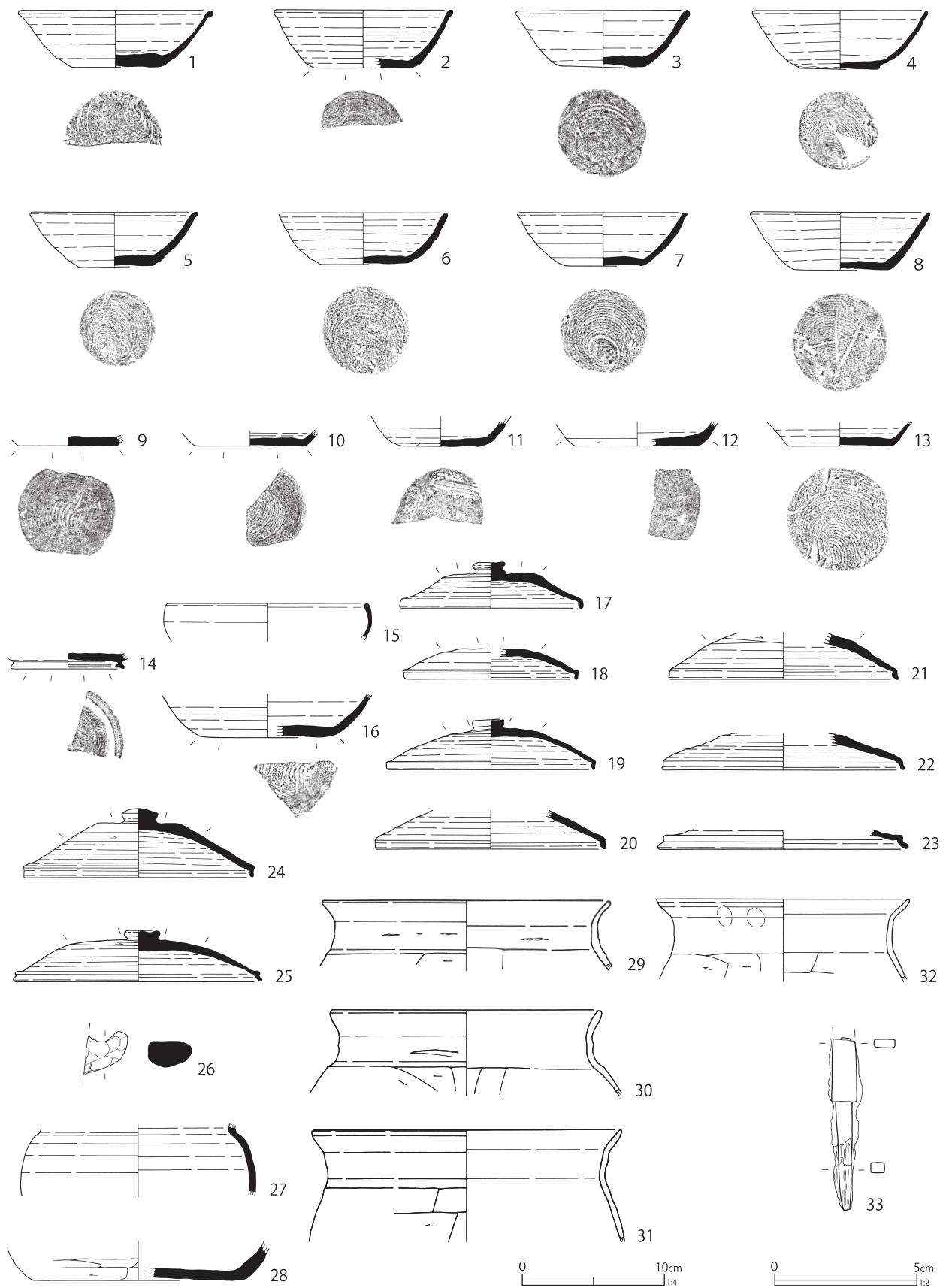
所における建て替えの可能性も考えられる。

カマドは東壁のほぼ中央に設置されていた。燃焼部を橿円形に大きく掘り込み、その大半は壁外にある。カマドの長さ1.10m、燃焼部幅0.98m、深さ0.19mである。カマド覆土の第3・4層が火床面に相当する。袖部は地山の黄褐色土を掘り残していた。貯蔵穴はカマドの左脇に設置される。平面形は方形で、規模は長軸1.00m、短軸0.96m、深さ0.16mである。覆土に焼土や炭化物を多量に含むことから、調査当初、第5号土壙として調査したが、カマドとの位置関係や出土土器の様相から、本住居跡に伴うものと判断した。

遺物は貯蔵穴周辺にまとまり、須恵器壊・高台付壊・鉄鉢形・塊・蓋・甕・壺、土師器甕、鉄鏃がある（第43図）。小片だが15の鉄鉢形、26の鉢もしくは甕の牛角状把手など、特徴的な器種も見



第42図 第12号住居跡



第43図 第12号住居跡出土遺物

られる。33は笠被と茎の境に段をもつ鉄鎌である。
住居跡の時期は、重複する第3・11号住居跡と

の遺物の混在が見られるが、9世紀中頃から後半に位置づけておきたい。

第16表 第12号住居跡出土遺物観察表(第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	壺	(13.4)	4.0	6.6	I J	40	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り P8	
2	須恵器	壺	(12.4)	4.0	(6.8)	I J K	30	良好	褐灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ P3	
3	須恵器	壺	12.1	4.0	6.1	E I J K	95	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り後手持ちヘラケズリ 口縁部外面補修痕 SK5 SJ3	16-3
4	須恵器	壺	12.2	4.1	5.6	I J K L	60	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り P3 SJ2	16-4
5	須恵器	壺	11.8	3.9	5.4	I J K	70	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り SK5	16-5
6	須恵器	壺	11.7	3.6	6.2	I J L	60	普通	灰黃褐	南比企産 底部回転糸切り SK5	16-6
7	須恵器	壺	(11.8)	3.8	5.4	I J K L	40	普通	灰白	南比企産 底部回転糸切り 底部ヘラ記号 SK5 No.6	17-1
8	須恵器	壺	12.6	4.0	6.7	E G J K	95	不良	灰黃	南比企産 底部回転糸切り ヘラ記号「V」 SK5 No.1	16-7
9	須恵器	壺	—	[0.7]	6.8	I J K	80	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ	
10	須恵器	壺	—	[1.1]	(7.6)	I J K	30	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ	
11	須恵器	壺	—	[2.1]	(6.8)	I J L	50	良好	灰白	南比企産 底部回転糸切り後手持ちヘラケズリ 掘り方	
12	須恵器	壺	—	[1.7]	(8.8)	I J K L	20	良好	灰黃褐	南比企産 底部回転ヘラケズリ	
13	須恵器	壺	—	[1.7]	7.3	E I J K	70	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り ヘラ記号「×」	16-8
14	須恵器	高台付壺	—	[1.1]	(8.0)	I K J	25	良好	灰白	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ	
15	須恵器	鉄鉢形	(14.0)	[2.7]	—	I J K	10	良好	灰	南比企産	
16	須恵器	塊	—	[3.0]	(9.6)	E I J L	20	良好	浅黃	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ	
17	須恵器	蓋	12.7	3.3	—	I J K L	95	普通	灰白	南比企産 内面重ね焼き痕 P10 SK5	17-2
18	須恵器	蓋	(12.0)	[2.2]	—	H I J K	20	良好	灰	南比企産	
19	須恵器	蓋	14.4	3.5	—	E I J	60	良好	灰	南比企産	17-3
20	須恵器	蓋	(16.0)	[2.7]	—	I J K	25	良好	灰	南比企産	
21	須恵器	蓋	(16.0)	[3.2]	—	E I J K	45	普通	灰白	南比企産	
22	須恵器	蓋	(16.8)	[2.5]	—	E G I J K	15	不良	灰白	南比企産	
23	須恵器	蓋	(17.6)	[1.3]	—	E I J	10	良好	灰	南比企産	
24	須恵器	蓋	16.2	4.8	—	I J K	65	普通	灰	南比企産 焼き歪み SK5 No.5	17-4
25	須恵器	蓋	(17.4)	3.6	—	E I J K	70	良好	灰白	南比企産 SK5	
26	須恵器	把手	高さ3.0cm 幅3.0cm 厚さ1.8cm			I J K	100	普通	灰	南比企産 把手付鉢か	
27	須恵器	壺	—	[5.1]	—	I J K	5	良好	褐灰	南比企産	
28	須恵器	甕	—	[2.8]	(14.8)	E G I J	15	普通	灰	南比企産 外面ヘラケズリ カマドNo.1	
29	土師器	甕	(20.2)	[5.0]	—	C H I K	15	普通	明赤褐	コの字状口縁甕 P1	
30	土師器	甕	(19.0)	[6.0]	—	C H I K	15	普通	橙	コの字状口縁甕 SK5	
31	土師器	甕	(22.0)	[7.9]	—	C H I K	15	普通	橙	コの字状口縁甕 SK5	
32	土師器	甕	(18.0)	[5.8]	—	C E H I K	15	普通	にぶい橙	コの字状口縁甕 SK5 No.2	
33	鉄製品	鉄鎌	長さ [6.1]cm 幅0.75cm 厚さ0.25cm 重さ6.2g						茎 木質一部残存 SK5	18-11	

(2) 溝跡

第2号溝跡 (第44図)

調査区南側のF-3~5、G-2~4グリッドに位置する。南西から北東に向かって緩やかに蛇行し、両端部の掘り込みは浅くなっていた。規模は長さ32.00m、幅0.45~1.46m、深さ0.37~0.62mである。走行方向はN-70°-Eを指す。

地点によって壁面の立ち上がり角度が異なっているが、断面逆台形を基本とする。地形に従つて、西から東に向かって底面が緩やかに傾斜し、西側の溝底面は砂礫層を掘り込んでいた。

遺物は覆土中から土師器坏、須恵器坏・蓋・甕が少量出土した(第45図)。

1は土師器の坏である。口縁部がやや内傾して立ち上がり、端部が外に短く屈曲し、赤彩を施す。いわゆる比企型坏である。今回の調査では、唯一7世紀後半にさかのぼるものである。周辺の調査でも古墳時代後期終末(飛鳥時代)の遺構・遺物が検出されている。2・3は須恵器坏の底部である。底部回転糸切り離し後、回転ヘラケズリを周辺部に施す。3は底部外面にヘラ記号の一部を残す。4は蓋である。扁平な宝珠形のつまみをもつ。5~7は甕である。5は口縁端部を上下に垂下させた口縁帯を巡らしている。6・7は口縁部外面に櫛描波状文を施文する。

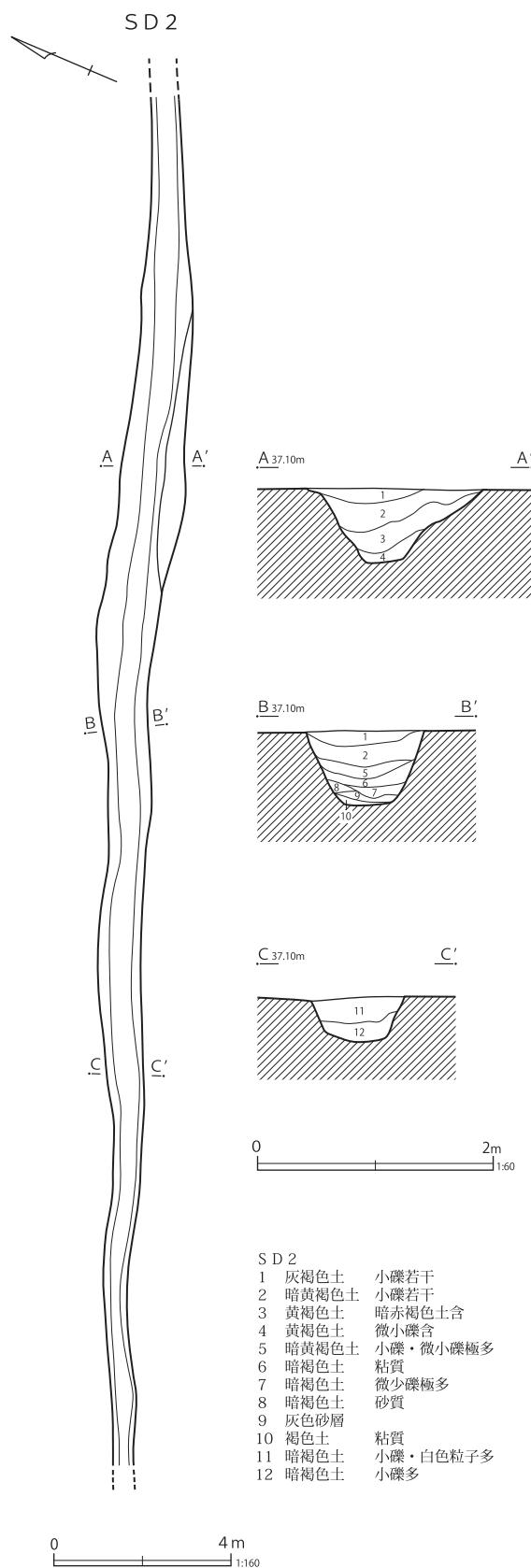
溝の時期は出土遺物に幅があり、特定はできないが、須恵器坏の特徴から8世紀後半から末葉と考えておきたい。性格については、集落域の南縁を画する区画溝であろう。

(3) 土壙

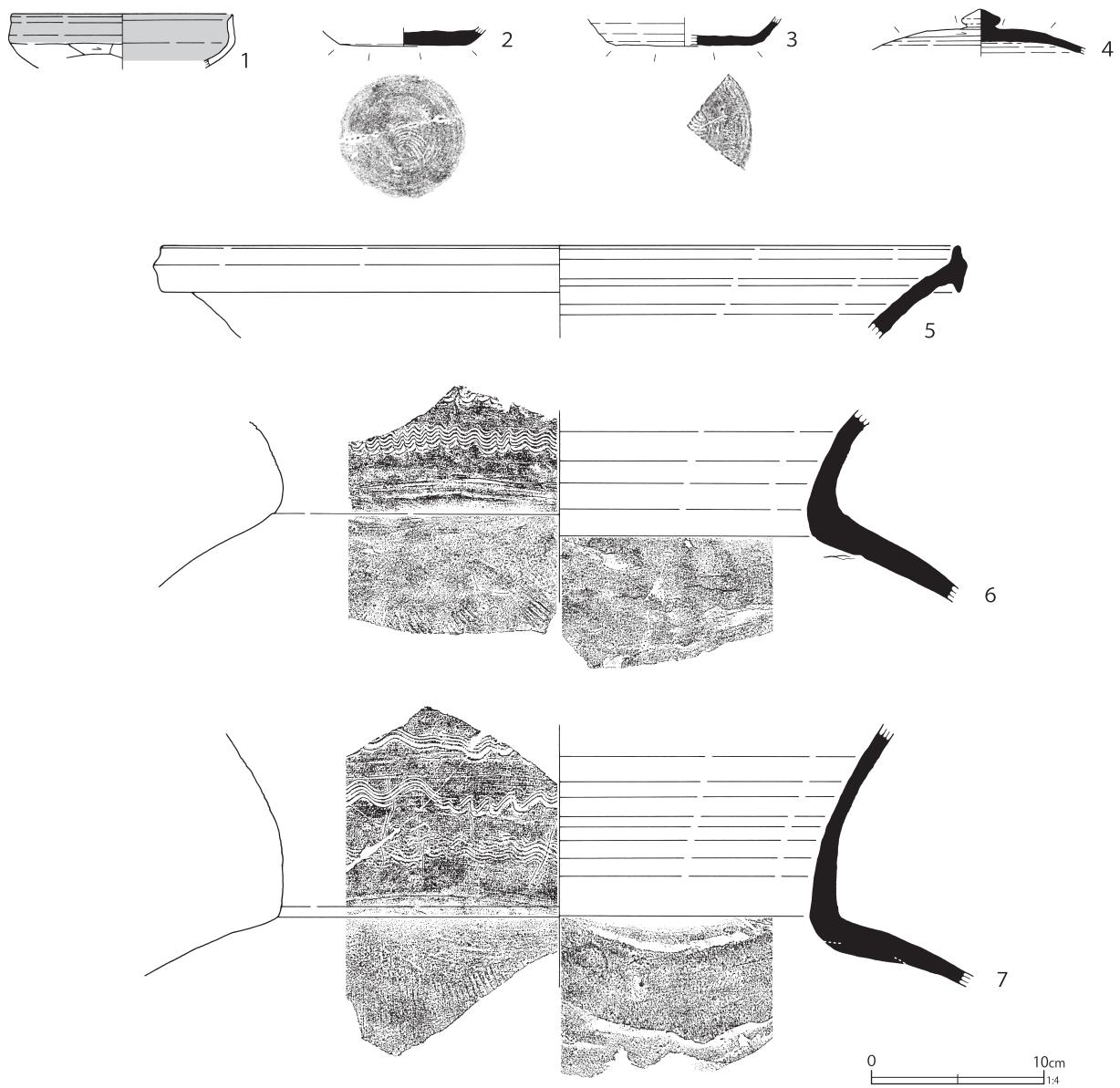
土壙は2基検出された。遺物を出土していないため、時期を比定することは難しいが、覆土の状態から該期と認定した。

第2号土壙 (第46図)

調査区中央のE-5グリッドに位置する。住居跡群から南東にやや距離を置き単独で所在する。平面は橢円形で、規模は長径1.52m、短径1.03m、



第44図 第2号溝跡



第45図 第2号溝跡出土遺物

第17表 第2号溝跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	坏	(13.0)	[3.1]	—	H I	15	普通	にぶい橙	比企型坏 内外面赤彩 F-4G	17-5
2	須恵器	坏	—	[1.1]	7.4	E I J	90	普通	浅黄橙	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ F-4G	
3	須恵器	坏	—	[1.7]	(8.0)	I J K	20	良好	灰	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ 底部ヘラ記号 G-3G	
4	須恵器	蓋	—	[2.6]	—	I J K	70	良好	灰	南比企産 F-4G	
5	須恵器	甕	(46.0)	[5.3]	—	I J K	5	良好	灰	南比企産 F-4G	
6	須恵器	甕	—	[11.2]	—	H I J K L	20	良好	灰	南比企産 口縁部外面櫛描波状文 脊部外面平行叩き目 脊部内面無文 当て具痕 F-4G	17-6
7	須恵器	甕	—	[15.3]	—	I J	20	良好	褐灰	南比企産 口縁部外面櫛描波状文 脊部外面平行叩き目 脊部内面無文 当て具痕 F-4G	17-7

深さ0.09mである。主軸方位はN-40°-Wを指す。底面は概ね平坦である。覆土は明黄褐色土の単一層で、焼土・炭化物を少量含む。

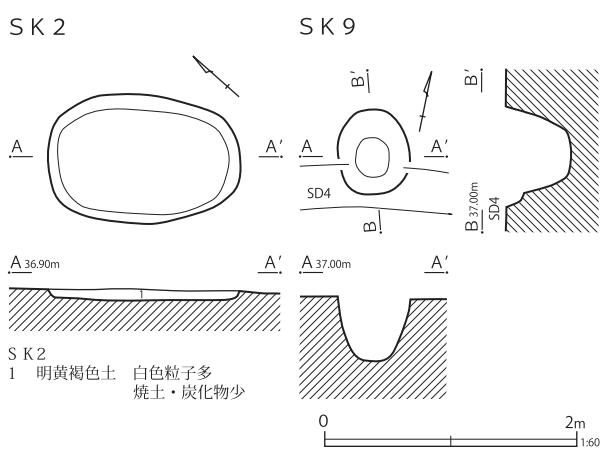
第9号土壙（第46図）

調査区中央のD-E-6グリッドに位置する。第4号溝跡と重複し、南壁の一部が壊されていた。平面は円形で、規模は長径0.68m、短径0.58m、深さ0.50mである。

（4）グリッド出土遺物

他の時代の遺構の覆土中に混入していた奈良・平安時代の遺物を第47図に一括した。1~4・6は第4号住居跡と重複する第5号溝跡から、5は第1号井戸跡から出土した。

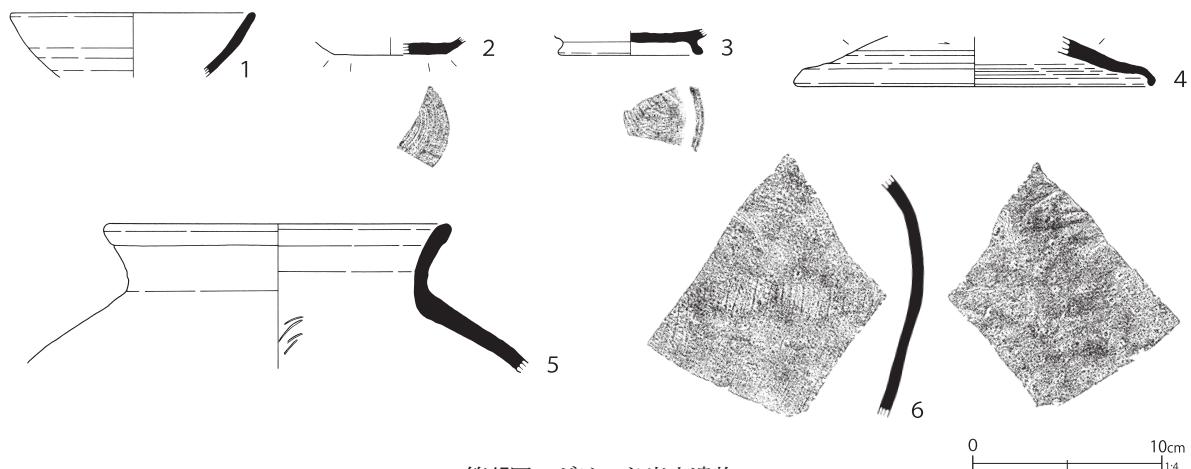
1・2は須恵器坏である。2は底部回転糸切り離し後、周辺に回転ヘラケズリによる再調整を施す。3は須恵器高台付坏の底部片である。4は須恵器蓋で、笠形の天井部である。5は須恵器壺で、口頸部は外反しながら短く立ち上がる。胴部



第46図 第2・9号土壙

外面には光沢のある自然釉が厚く掛る。内面は同心円文當て具痕を残し、一部ナデ消す。6は須恵器甕の胴部片である。外面に平行叩き目、内面に無文當て具痕を残す。

これらは器形や胎土の特徴から、いずれも南比企窯跡群の製品と考えられ、時期は9世紀前半を中心とするものと考えられる。



第47図 グリッド出土遺物

第18表 グリッド出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	坏	(12.8)	[3.4]	—	I JK	5	普通	灰黄褐	南比企産 SD5 D-5G	
2	須恵器	坏	—	[0.9]	(6.0)	I JK	15	普通	灰黄	南比企産 底部回転糸切り後ヘラケズリ SD5 E-5G	
3	須恵器	高台付坏	—	[1.3]	(7.8)	I J	20	普通	灰	南比企産 底部回転糸切り SD5 E-5G	
4	須恵器	蓋	(19.0)	[2.6]	—	I JK	15	良好	黄灰	南比企産 SD5 No.1	
5	須恵器	壺	(17.9)	[7.8]	—	I J K L	30	良好	灰	南比企産 胴部外面自然釉 内面同心円文當て具痕ナデ消し SE1	
6	須恵器	甕	—	[13.0]	—	I JK	5	良好	黄灰	南比企産 胴部外面平行叩き目 内面無文當て具痕 SD5 E-5G	17-8

4. 中・近世の遺構と遺物

検出された中・近世の遺構は、井戸跡4基、火葬跡1基、溝跡4条、土壙1基、ピット117基である。時期の判別ができた遺構の大半は、中世前半のもので、明確な近世の遺構は検出されなかった。

(1) 井戸跡

井戸跡は、調査区中央のE-4グリッド周辺に4基が集中していた。その選地にあたっては、砂礫層のない適地が見極められていたことを想像させる。第1・2号井戸跡は素掘り井戸、第3号井戸跡は石組井戸、第4号井戸跡は木組井戸と多彩であった。

出土遺物は全体に少ない。在地産土器の他にも中国産の青磁、東海や瀬戸内でつくられた陶器などが出土しており、鎌倉街道上道や越辺川・入間川等の内水路を背景とした物資の流れを物語っている。13~14世紀に位置づけられる遺物が多く、井戸の廃絶時期が近接することを窺わせる。

第1号井戸跡（第48図）

調査区中央のE-4グリッドに位置する。平面形は円形で、断面は上端部が漏斗状に開いた円筒形である。規模は上端で径1.82×1.66m、下端で径1.22×1.18m、深さ2.80mである。

覆土はレンズ状堆積を示すが、焼土・炭化物等を混入していることから人為的に埋め戻された可能性が高い。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面には径10~25cmの河原石が敷き詰められていた。石組井戸のような整然としたものではないが、列状に並んでいる箇所も見られた。井戸廃絶時に石組を壊して、廃棄された可能性もあるが、その性格については明確にし得なかった。

遺物は覆土中から陶器鉢、瓦質土器鉢が出土した（第49図1・2）。1は常滑産の陶器鉢の底部である。底部内面にススが一部付着する。2は在地産の瓦質土器の鉢である。口縁部は断面半月状に肥厚する。破断面に擦痕が見られることから、砥石として転用されたものと考えられる。

第2号井戸跡（第48図）

E-4・5グリッドに位置し、北側には第3号井戸跡が隣接する。平面形は不整形で、断面は片側にのみテラス面を造り出した円筒形である。規模は上端で径2.85×1.72m、下端で径1.53×1.23m、深さ2.10m以上である。

覆土は土層の不整合面の存在から、人為的な埋戻しが行われたものと考えられる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、一部オーバーハングしていた。

遺物は覆土中から青磁碗が出土した（第49図3）。3は青磁鎧蓮弁碗である。素地は精選され、釉も厚く掛る。内面には使用に伴う擦痕が顕著に見られる。龍泉窯系の製品である。

第3号井戸跡（第48図）

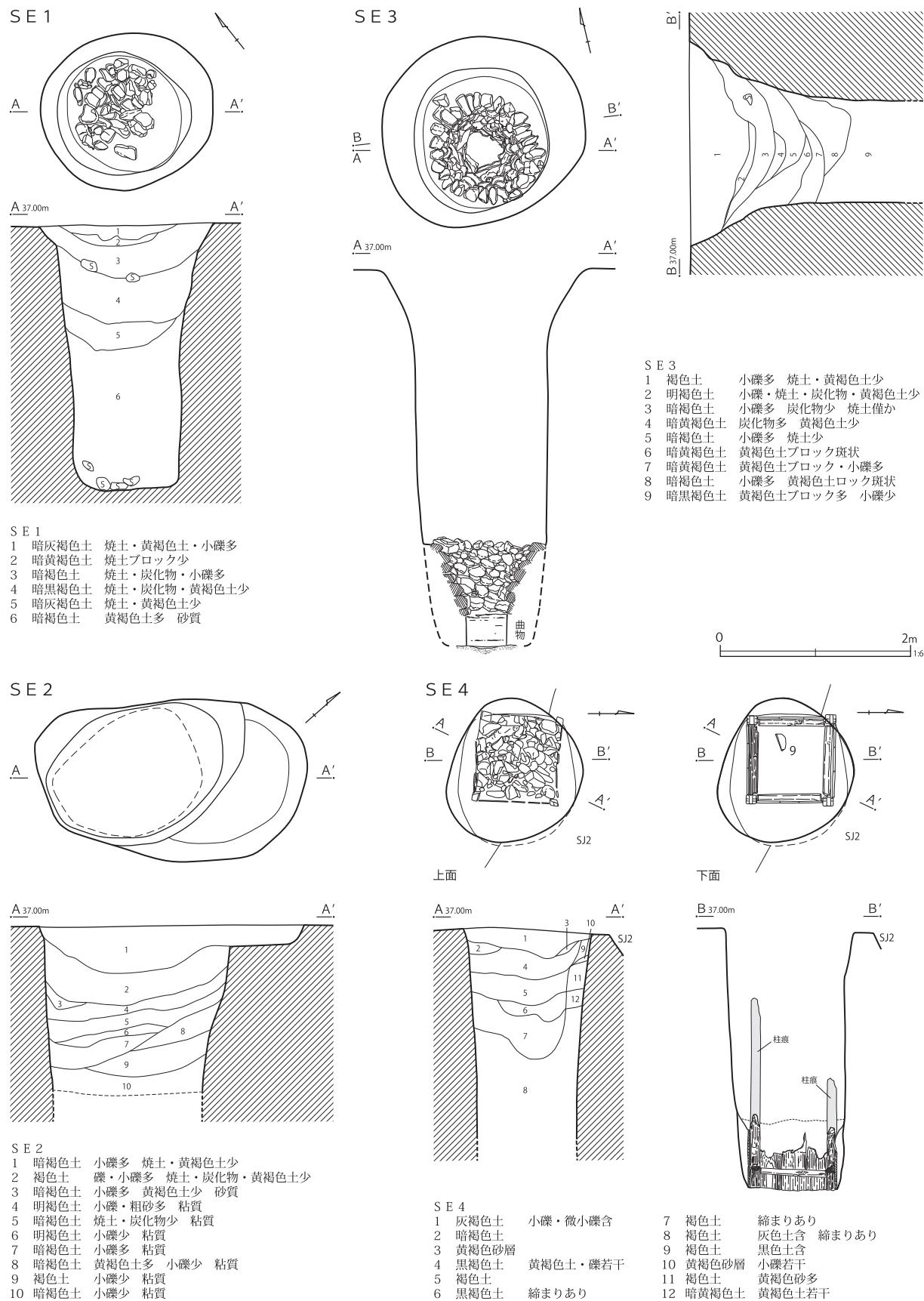
E-4グリッドに位置し、南側には第2号井戸跡が隣接する。井戸枠に河原石を用いた石組井戸である。平面形は橈円形で、断面は上半部が漏斗状に大きく開き、下半部はほぼ垂直に掘り込まれていた。規模は上端で径2.14×1.95m、下端で径1.38×1.30m、深さ3.98mである。

覆土は暗黄褐色土と暗褐色土が互層をなし、人為的な埋戻しであることが明瞭であった。

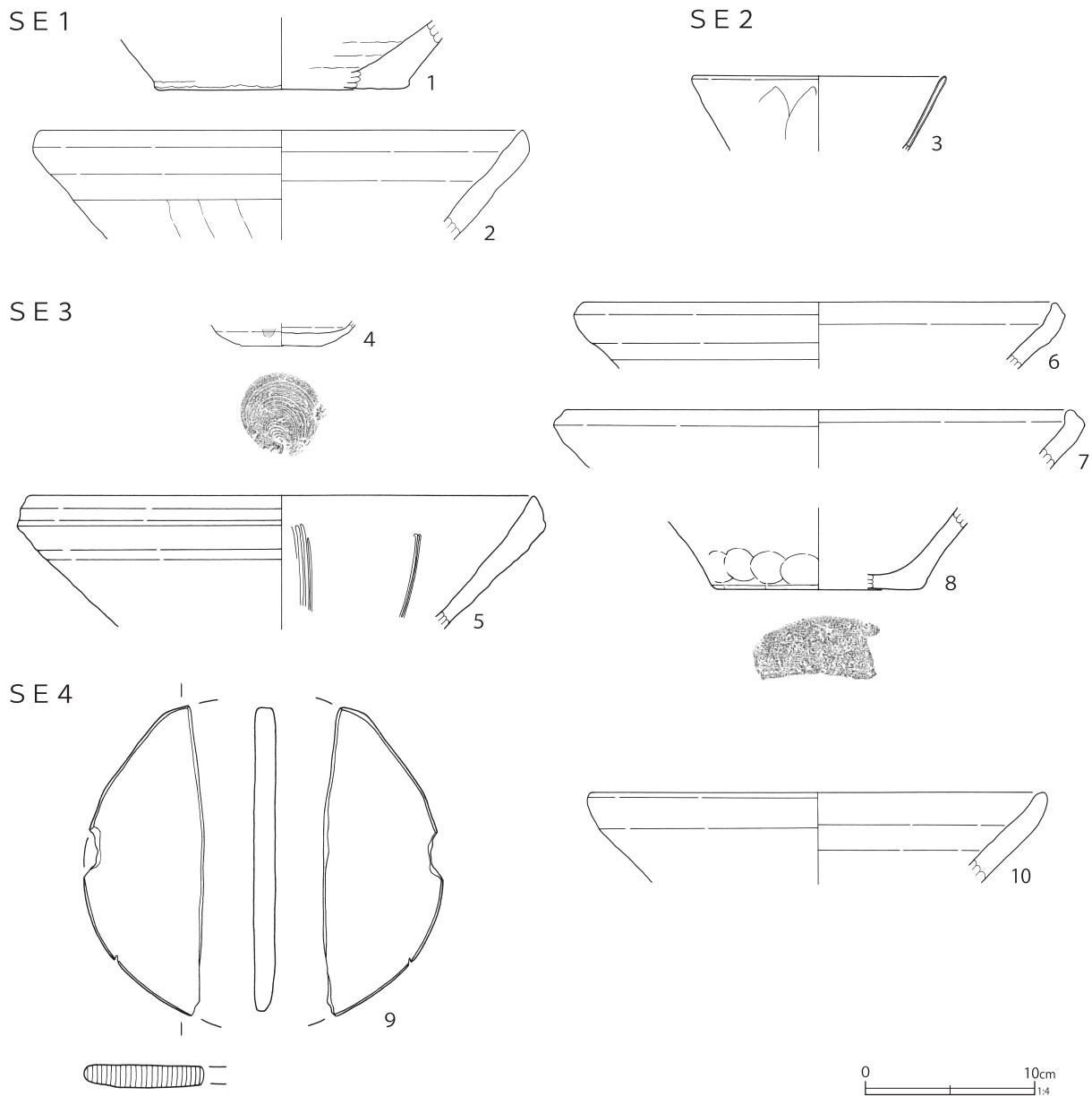
井戸枠は河原石を用いて内部が擂鉢形になるよう組み上げられた石組である。小口面を内側に向かって、できるだけ平らな小口面を選び、全体に平滑となるように意識されていた。

石組の内法は上部で直径約0.90m、下部で約0.40mであり、下部から上部に向かって擂鉢状に積み上げられたことがわかる。石組は7~8段を数える。使用された石材は10~30cmの大きさのものが多い。石質はチャートを主体とし、結晶片岩が一部含まれていた。

石組の構築方法は、底面に曲物を設置した後、壁石の積み上げを開始する。石組の状況から、3段目までを第一工程、それ以上を第二工程として説明する。



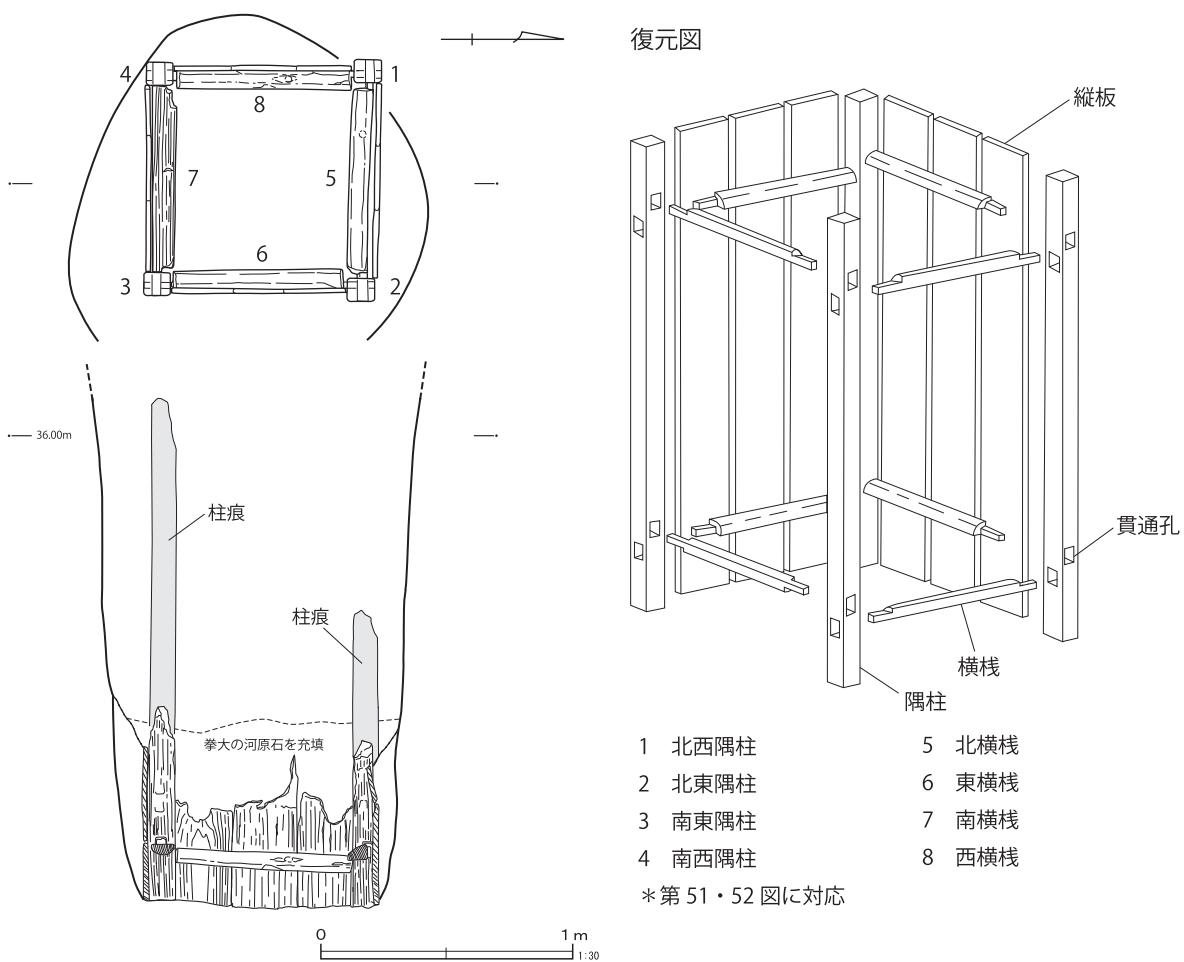
第48図 第1～4号井戸跡



第49図 第1～4号井戸跡出土遺物

第19表 第1～4号井戸跡出土遺物観察表 (第49図)

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	SE1	陶器	鉢	—	[4.0]	(15.3)	E G I K	10	良好	にぶい褐	常滑産 14C	18-15
2	SE1	瓦質土器	鉢	(28.5)	[6.4]	—	I K	10	良好	灰	在地産 14C 前半	18-16
3	SE2	青磁	鎬蓮弁碗	(15.0)	[4.4]	—	I K	5	良好	灰白	龍泉窯系 13C	18-12
4	SE3	陶器	皿	—	[1.5]	4.8	H	75	普通	灰白	古瀬戸産 灰釉 底部回転糸切り 重ね焼き痕 14C	17-9
5	SE3	炻器	擂鉢	(30.0)	[7.8]	—	H I	10	良好	にぶい赤褐	備前産 14C	18-17
6	SE3	瓦質土器	鉢	(28.0)	[3.9]	—	B E G H I J	15	普通	褐灰	在地産 14C	18-18
7	SE3	瓦質土器	鉢	(30.0)	[3.5]	—	H I L	5	普通	灰	在地産 14C	18-19
8	SE3	瓦質土器	鉢	—	[4.8]	(12.4)	E H K L	15	普通	灰	在地産 底部糸切り 14C	18-20
9	SE4	木製品	曲物	長さ(18.3) 幅[7.0] 厚さ1.3 木取り(柾目)							No.1	
10	SE4	瓦質土器	鉢	(27.0)	[5.3]	—	I K	15	普通	灰白	在地産 14C	18-21



第50図 第4号井戸跡井戸枠復元図

第一工程は、7個の大きめの石を曲物の上端に接するように横手積みにして1段目を構築する。そして、3段目の上面が水平になるように、やや大振りの石材を用いて、急角度に積み上げる。

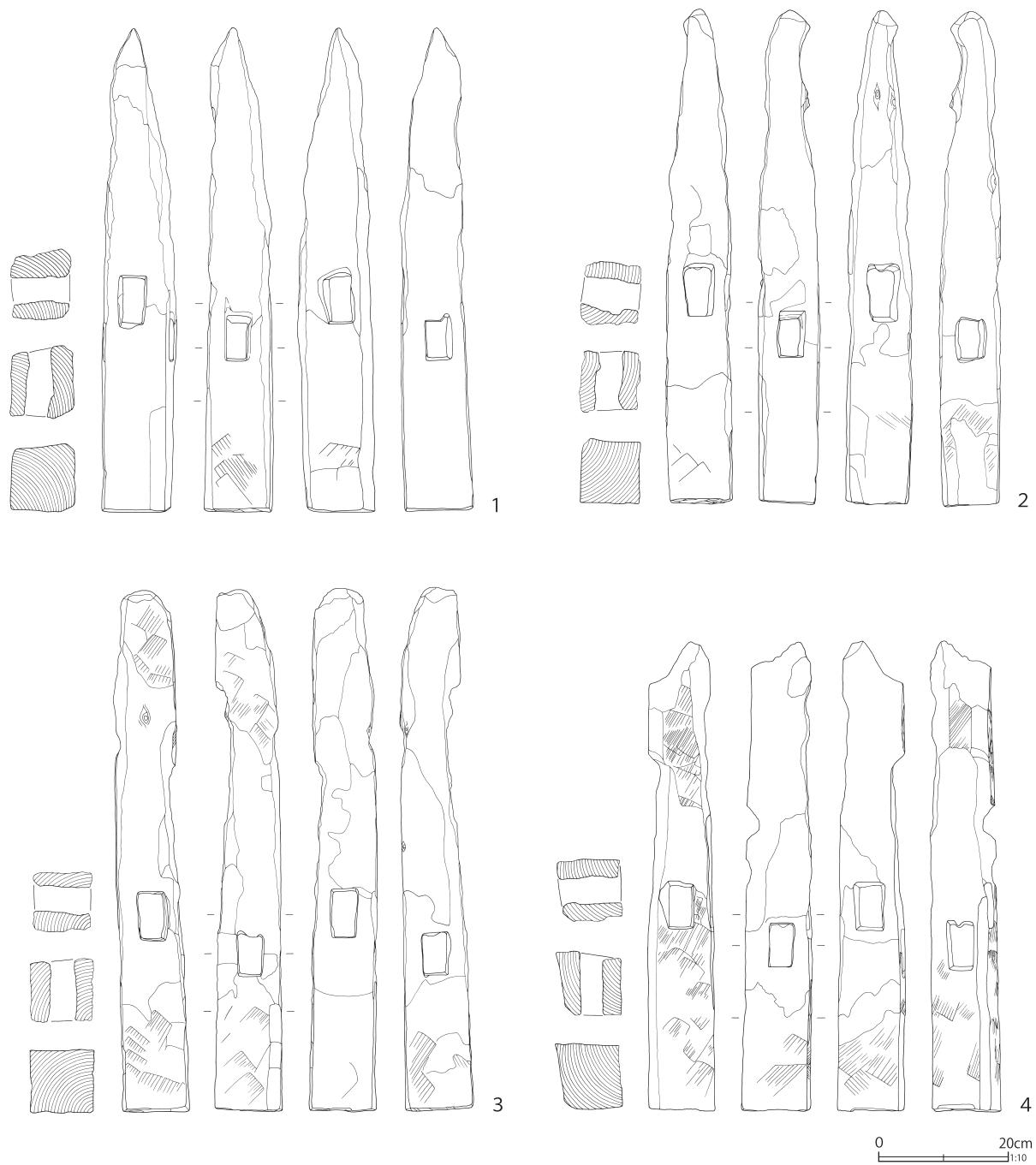
なお、1段目の石材のうち、南側に置かれた大型石材は、内側に大きく張り出して置かれていることから、作業用の足場として利用されたものと考えられる。

第二工程は、第一工程の上部に、さらに外側に角度を広げ、小口積みによって4段程積み上げている。主に小振りの石材を用いている。裏込めは壁石を1段ずつ積みながら、地山の暗黄褐色土に小礫を混ぜて行っていた。

底面には曲物が、水溜めとして据え置かれたままの状態で検出された。ほぼ完存していたが、脆

弱なため、取り上げ時に破損してしまい、図示できなかった。曲物は、土圧によって大きく楕円形に変形していた。直径約48cm、高さ約33cmである。側板は樹皮紐によって固定されていたが、底板は抜かれた状態であった。

遺物は覆土中から、陶器灰釉皿、炻器擂鉢、瓦質土器鉢が出土した（第49図4～8）。4は古瀬戸産の灰釉皿である。口縁部を欠損する。底部は回転糸切り離して、灰釉が部分的に掛る。見込みには、目跡が3箇所残っていた。5は備前産の擂鉢で、口縁部は断面三角形に肥厚する。6～8は在地産の瓦質土器の鉢である。6は口縁部が内湾し、内面の突出する形態である。7は「了」の字状口縁である。8は底部の破片で、底部外面に糸切り痕を残す。



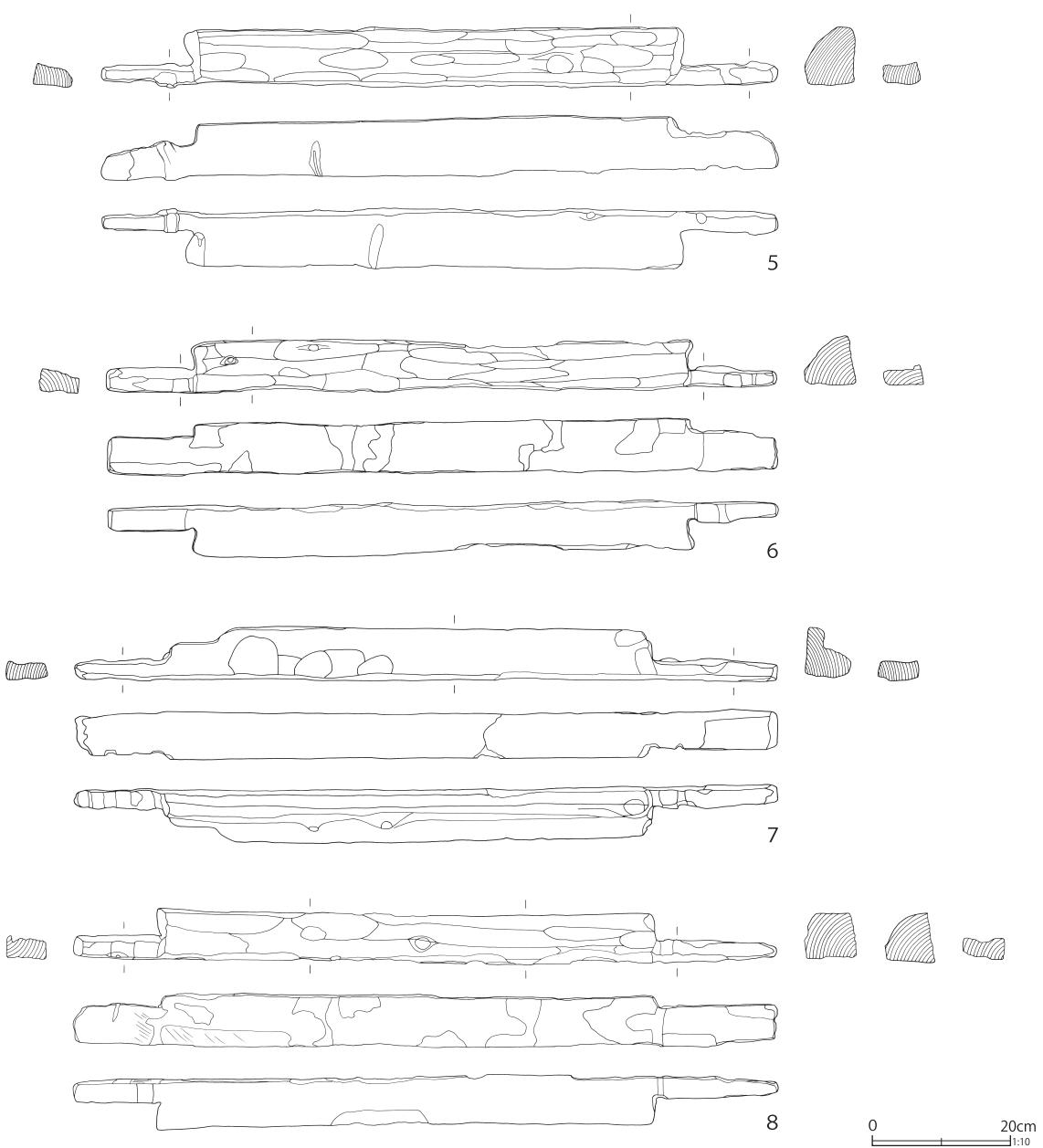
第51図 第4号井戸跡井戸枠材（1）

第4号井戸跡（第48・50図）

D-5グリッドに位置する。平面形はやや不整な円形で、断面は円筒形である。規模は上端で径 $1.55 \times 1.24\text{m}$ 、下端で径 $1.48 \times 1.46\text{m}$ 、深さ 2.76m である。

調査時、井戸跡を約2m掘り下げた段階で、方形に組み立てられた木材が顔を出し、木組井戸で

あることが判明した。井戸枠は縦板組隅柱横桟留型である。各辺が3枚の縦板で構成され、内側を隅柱と横桟で支持する構造である（第50図）。井戸枠の内法は一辺約70cmの正方形で、隅柱は底面から約80cmの高さまでが残っていた。ただし、井戸跡の側壁には柱痕状に暗褐色に変色した隅柱の痕跡が底面から約2mの高さまで観察されたこと



第52図 第4号井戸跡井戸枠材（2）

から、本来の井戸枠を復元する手がかりとなろう。井戸内部で組み立てられた井戸枠を固定するため、裏込めに拳大の河原石が充填されていた。

井戸枠の内部上面には拳大の河原石が敷き詰められ、丁寧に埋め戻しが行われていた。さらに間層を挟んで、底面付近にも大きめの河原石が敷き詰められていた。これは浄水施設に関わる礫敷きの可能性が高いものである（図版8-5）。

遺物は覆土中から曲物の底板、瓦質土器鉢が出

土した（第49図9・10）。9は曲物の底板で、大半を欠損する。復元径20.4cm。井戸枠の最下層から出土した。10は在地産の瓦質土器鉢の口縁部で、端部内面が浅くくぼむ。

井戸枠材については第51～53図に掲載した。第51図は隅柱、第52図は横桟、第53図は縦板である。なお、縦板については脆弱であったため、取り上げ時に破損してしまい、出土位置は特定できなかった。



第53図 第4号井戸跡井戸枠材（3）

第20表 第4号井戸跡井戸枠材観察表（第51～53図）

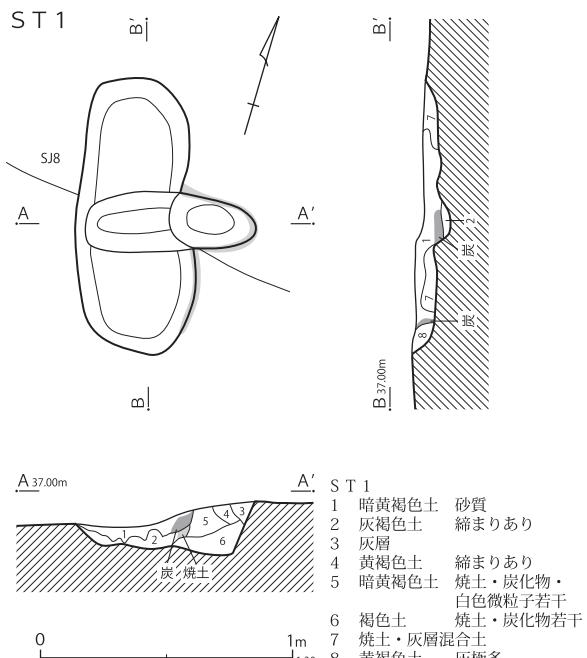
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	木取り	備考	図版
1	木製品	隅柱	[74.4]	10.5	10.4	四方柾	北西隅柱 No.1 上下2箇所に面違の枘穴	19-1・9
2	木製品	隅柱	[76.3]	10.1	9.8	四方柾	北東隅柱 No.7 上下2箇所に面違の枘穴	19-2
3	木製品	隅柱	[80.6]	10.3	9.8	四方柾	南西隅柱 No.5 上下2箇所に面違の枘穴	19-3
4	木製品	隅柱	[72.7]	10.6	10.0	四方柾	南東隅柱 No.3 上下2箇所に面違の枘穴	19-4
5	木製品	横桟	97.6	8.7	7.0	みかん割り	北横桟 No.8 両端部に凸枘を加工する	19-5・10
6	木製品	横桟	96.9	7.5	7.1	みかん割り	東横桟 No.2 両端部に凸枘を加工する	19-6
7	木製品	横桟	102.1	7.7	6.5	みかん割り	南横桟 No.4 両端部に凸枘を加工する	19-7
8	木製品	横桟	101.8	7.3	7.3	みかん割り	西横桟 No.6 両端部に凸枘を加工する	19-8
9	木製品	縦板	[21.1]	23.4	[1.6]	板目	内面に横桟の圧痕を残す	20-1
10	木製品	縦板	[29.8]	24.8	1.9	板目	内面に横桟の圧痕を残す チョウナ痕	20-2
11	木製品	縦板	[35.4]	25.9	1.8	柾目	内面に横桟の圧痕を残す チョウナ痕	20-3
12	木製品	縦板	[41.4]	26.9	2.0	板目	内面に横桟の圧痕を残す チョウナ痕	20-4
13	木製品	縦板	[44.3]	25.6	1.6	板目	内面に横桟の圧痕を残す チョウナ痕	20-5
14	木製品	縦板	[30.8]	[11.5]	[1.8]	柾目	内面の圧痕不明瞭 チョウナ痕	20-6
15	木製品	縦板	[32.7]	[14.5]	1.9	追柾目	内面に横桟の圧痕を残す チョウナ痕	20-7
16	木製品	縦板	[27.2]	24.0	1.7	柾目	内面の圧痕不明瞭	20-8
17	木製品	縦板	[39.0]	[18.0]	[1.4]	板目	内面に横桟の圧痕を残す チョウナ痕	20-9
18	木製品	縦板	[41.9]	[20.7]	1.9	板目	内面に横桟の圧痕を残す チョウナ痕	20-10
19	木製品	縦板	[12.9]	[5.2]	0.9	板目	No.3 外形はすべて欠損 チョウナ痕	
20	木製品	縦板	[8.4]	[9.2]	[0.9]	板目	No.8 外形はすべて欠損	
21	木製品	縦板	[21.6]	[10.4]	1.3	板目	外形はすべて欠損 チョウナ痕	
22	木製品	縦板	[17.9]	[5.7]	1.7	板目	No.1 外形はすべて欠損 チョウナ痕	
23	木製品	縦板	[20.2]	[14.6]	1.5	板目	No.1 外形はすべて欠損 チョウナ痕	
24	木製品	縦板	[18.8]	[13.7]	1.7	板目	No.2 外形はすべて欠損 チョウナ痕	

(2) 火葬跡

第1号火葬跡（第54図）

調査区中央西寄りのD-3グリッドに位置する。第8号住居跡の南壁を掘り込んで構築された、いわゆる茶毬跡である。南北に軸方向をとり、東側辺の中央に細い溝状の突出部が取り付いている。この溝状の突出部については、煙道部あるいは送風口の機能をもつと考えられている。規模は長軸1.09m、短軸0.72m、深さ0.07～0.20mである。主軸方位はN-17°-Wを指す。

底面はやや凹凸が見られ、中央に突出部から続く溝状の掘り込みをもつ。覆土は下層に焼土と灰の混合土が薄く堆積し、壁際の第8層は高熱による還元作用によって灰色に硬化していた。顕著な骨片や骨粉は見られなかったが、炭化物の含有量が多い。また、突出部から東側壁南半にかけて壁面の上部が赤く焼け締まっていた。



第54図 第1号火葬跡
遺物が出土していないため、時期については明確にし得ないが、中世と考えられる。

(3) 溝跡

第1号溝跡（第55図）

調査区北側東寄りのB・C-7・8グリッドに位置する。南北に走行する比較的規模の大きな溝跡である。北側は調査区外に延び、南側は河川の浸食によって削平されていた。検出された溝跡の規模は長さ8.00m、上幅1.50～2.50m、深さ0.60～0.95mである。断面は底面に丸味をもつU字形である。走行方向はN-6°-Eを指す。調査区の制約のため全容は明確ではないが、直線的に掘削され、規模も比較的大きなものであることから、屋敷地などの内部を区画する溝として機能していたものと想定しておきたい。

遺物は覆土中から青磁碗の底部片が出土したのみである（第55図1）。重厚な底部に、幅広の削

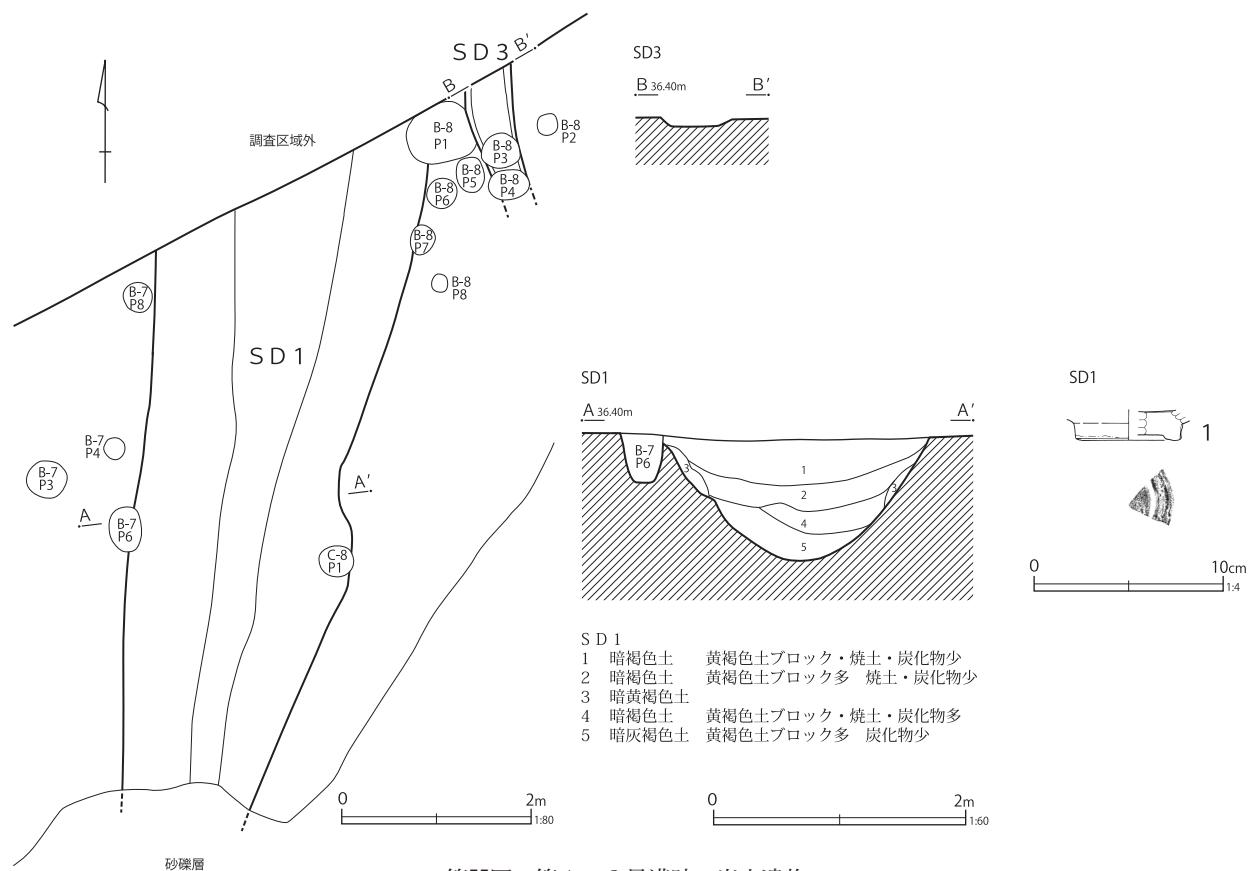
り出し高台が付く。釉の掛けはやや薄く、見込みには使用による顕著な擦痕が見られる。龍泉窯系の製品で、13世紀代に位置づけられる。

第3号溝跡（第55図）

調査区北側東寄りのB-8グリッドに位置する。第1号溝跡に接するように南北に延びる小規模な溝跡である。大半が調査区域外にあるため溝として断定することは難しい。検出された溝跡の規模は長さ0.80m、幅0.50m、深さ0.07mである。断面逆台形で、掘り込みは浅い。走行方向はN-15°-Wを指す。遺物が出土していないため、時期については不明である。

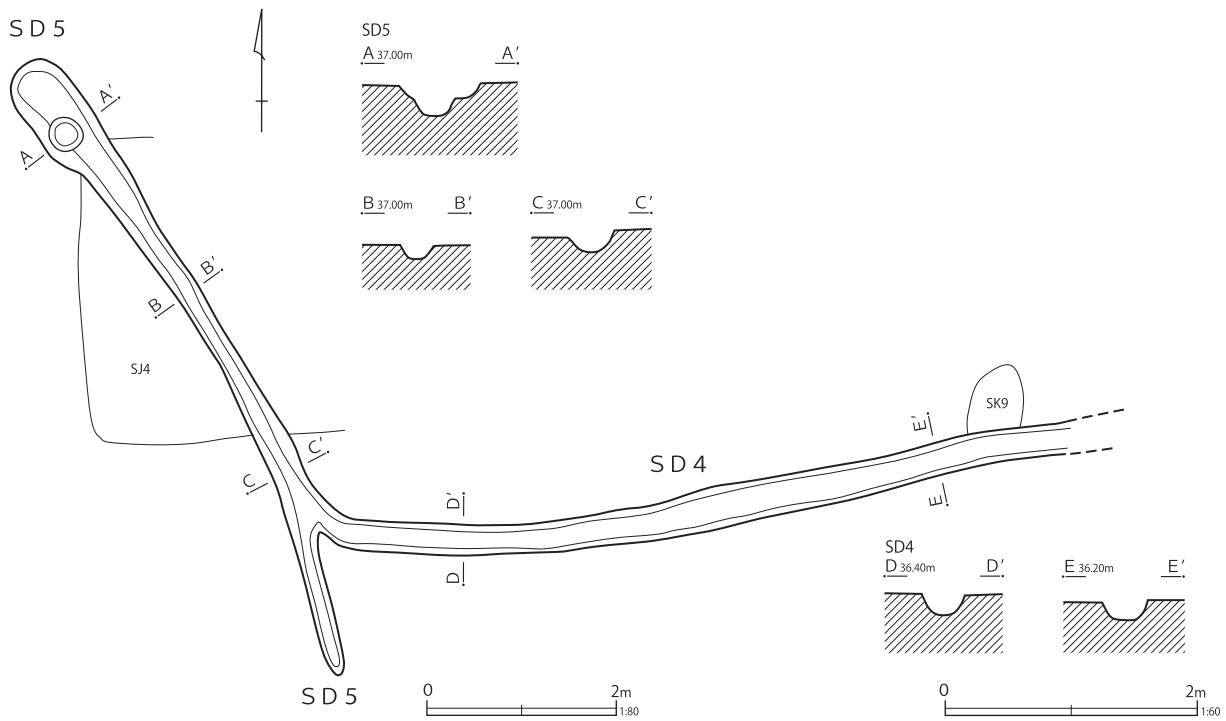
第4号溝跡（第56図）

調査区中央のD-6、E-5・6グリッドに位置する。南北に流れる第5号溝跡から分岐して、



第21表 第1号溝跡出土遺物観察表（第55図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	青磁	碗	-	[1.6]	(5.6)	H	15	良好	灰白	龍泉窯系 13C	18-13



第56図 第4・5号溝跡

東に向きを変える、小規模な溝である。直線的に延び、溝の西端は掘り込みが浅くなり、途切っていた。第9号土壙と溝の西端部で重複し、それを壊す。検出された溝の規模は長さ8.60m、幅0.30~0.42m、深さ0.10~0.13mである。断面U字形で、掘り込み込みは浅い。走行方向はN-80°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第5号溝跡（第56図）

調査区中央のD-E-5グリッドに位置する。第4号住居跡を斜めに縦断し、南北に走行する小規模な溝跡である。南端付近で、第4号溝跡と分枝する。検出した溝跡の規模は長さ7.35m、幅0.24~0.63m、深さ0.07~0.10mである。断面U字形で、掘り込みは浅い。走行方向はN-30°-Wを指す。底面は斜面に沿って、北から南に向かつて緩やかに傾斜する。

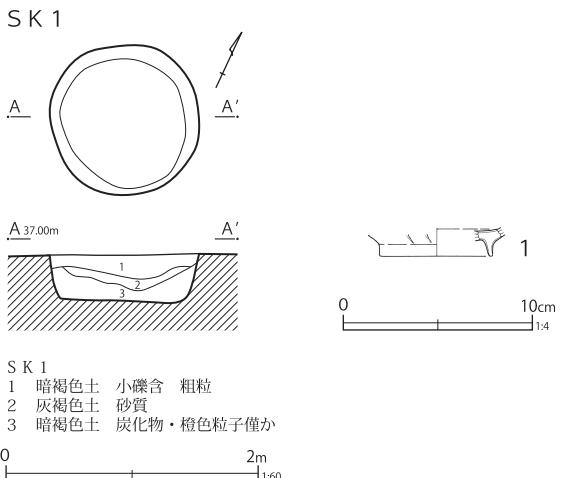
遺物は第4号住居跡と重複しているため、平安

時代の須恵器の破片が覆土中から出土した。溝跡に伴う遺物はなく、時期については不明である。

(4) 土壙

第1号土壙（第57図）

調査区北西側のE-3グリッドに位置する。自然の地形の窪地が埋没した後に、その肩部を掘り



第57図 第1号土壙・出土遺物

第22表 第1号土壙出土遺物観察表（第57図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	青磁	碗	-	[1.5]	(6.0)	K	5	良好	灰白	龍泉窯系 13C	18-14

込んで構築されていた。平面円形で、規模は長径1.20m、短径1.19m、深さ0.36mである。壁面は急角度で立ち上がる。覆土は概ね自然堆積を示す。最下層の第3層に炭化物が僅かに含まれる。

遺物は覆土中から青磁碗の底部片が出土した(第57図1)。端部の尖った三角高台で、釉の掛りは厚い。体部外面には蓮弁文の隆起が微かに見られる。龍泉窯系の製品と考えられ、13世紀代に位置づけられる。

(5) ピット

掘立柱建物跡や柵列など、組合せを把握することができなかつたピットは117基存在する。ピットの分布は、奈良・平安時代の住居跡群からはずれた調査区中央西寄りのD-4、E-3・4グリッドと、調査区北側東寄りのB-7、C-7グリッドの2箇所に集中する傾向にある。

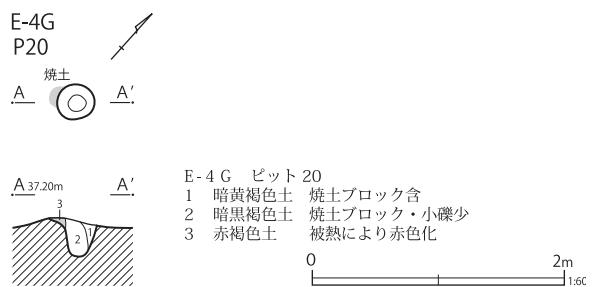
ピットの規模は、多くが直径30cm以下であり、覆土は暗黒褐色土が主体であるため、中世以降の可能性が高い。柱痕の確認できるものもあるが、時期の特定できるものはない。

このうちE-4グリッドから壁面の上部が高熱により焼土化したピットが単独で検出された。

焼土ピット(第58図)

E-4グリッドの南東隅寄りに位置する。ピットの規模は長径31cm、短径27cm、深さ23cmである。西壁面の上部が被熱により赤く焼け締まっていた。覆土には焼土ブロックを混入する。

調査当初は壁面が焼けていたので、鍛冶炉などの可能性を考えた。周囲を精査した結果、関連するような遺構は他に検出されなかった。性格や時期を特定することはできないが、覆土の状態から中世以降と判断した。



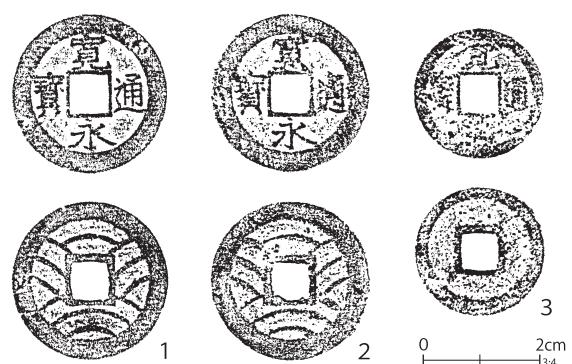
第58図 焼土ピット

(6) グリッド出土遺物

遺構に伴わない、その他の遺物として江戸時代の銭貨がある(第59図)。

1・2は寛永通寶の背十一波の四文銭である。真鍮製で、明和6年(1769)初鋳とされる。3は新寛永の無背銭で、元禄10年(1697)初鋳である。いずれも調査区東側の南縁に広がる砂礫層の上面から出土した。

銭貨の出土した砂礫層は、川表に面する段丘の縁辺を縁取るように延びていることから、大きな洪水の時に水に浸かってしまう高水敷に河道の土砂を積み上げ、堤防や道路などを普請した箇所と推定される。水害に対する大規模な土木工事が、近世後期にまでさかのぼる可能性を示す遺物として重要である。



第59図 銭貨

第23表 銭貨観察表(第59図)

番号	種別	銭貨名	縦(mm)	横(mm)	錢厚(mm)	重量(g)	備考	図版
1	銭貨	寛永通宝	28.00	28.00	1.10~1.15	4.3	四文銭 背十一波 明和6年(1769)初鋳	17-10
2	銭貨	寛永通宝	28.40	28.50	1.20~1.30	4.5	四文銭 背十一波 明和6年(1769)初鋳	17-10
3	銭貨	寛永通宝	23.01	23.01	0.80	1.7	新寛永 無背銭 元禄10年(1697)初鋳	17-10

V 調査のまとめ

天神台東遺跡は、越辺川中流域左岸の河岸段丘上に立地する縄文時代から中・近世に至る複合遺跡である。今回の第4次調査により、越辺川の度重なる氾濫によって、縄文時代の遺構が1mほどの土砂に完全に埋もれた後、弥生時代、奈良・平安時代、中世の集落跡が営まれたことが明らかとなった。

縄文時代の様相 前期中葉の黒浜式期の大型住居跡をはじめ、同時期の土壙が検出された。また、遺構は検出されなかつたが、早期末葉から後期後葉までの縄文土器が出土した。このうち黒浜式古段階に位置づけられる第15号住居跡からは、主に中部高地や北関東に分布する有尾式土器がまとまって出土しており、縄文時代前期における地域間交流を考える上で貴重な資料を提供した。

弥生時代の様相 後期初頭に位置づけられる岩鼻式期の小規模集落の実態が明らかになった。いわゆる櫛描文系土器の甕が主体的に出土している。第10号住居跡の受口状口縁の甕（第15図1）、口唇部に指頭押捺を施す甕（第15図2・3）、第14号住居跡の折り返し口縁に棒状浮文を貼付した壺（第18図3）、口縁部が大きく外反する单口縁の甕（第18図4）などが特徴的である。また、第3号土壙からは口縁部が短く外反し、2段の簾状文と羽状文を施した甕（第20図1）や、頸部の等間隔止めの簾状文、肩部の櫛描波状文や羽状文を特徴とする甕（第20図2・3）がある。

これらは、近年の弥生土器編年の研究を参照すれば、岩鼻式1期に位置づけられる（柿沼2006）。都幾川流域の雉子山1号住居跡、西浦7・16号住居跡、附川遺跡などが同時期の資料である。

奈良・平安時代の様相 遺構は須恵器の分析から大きく5時期に区分できる。年代的には8世紀中頃から9世紀末葉のおよそ150年間にわたり、9世紀初頭の空白期間を挟みながらも、継続的

に集落が形成されていたと推定される（第60図）。須恵器の大半は南比企窯跡群の製品によって占められているので、ここでは鳩山編年（渡辺1990）に準拠しながら、須恵器坏の変化を基に遺構の変遷過程を素描する。

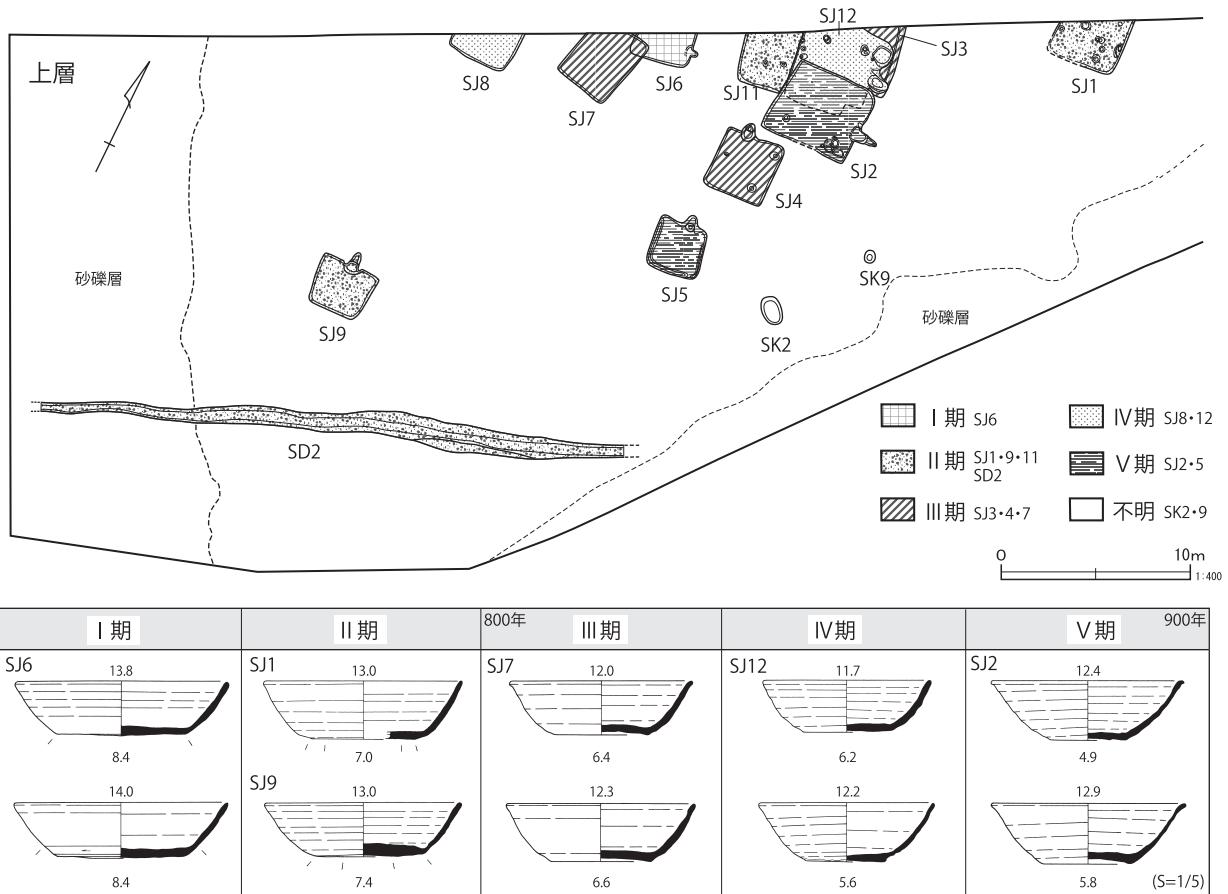
なお、第1～3次調査の成果を踏まえると、当遺跡における古代集落の初現は、東隣する天神台遺跡の周辺集落として古墳時代後期終末までさかのぼる。一方、その終焉は第1次調査の第6号竪穴建物跡で口クロ土師器や土鍋が出土していることから、10世紀後半から11世紀前半の平安時代中期まで続いている。

I期（8世紀中頃～後半） 第6号住居跡のみが単独で存在する。須恵器坏は口径12～14cm台に集中し、底部調整は全面ヘラケズリ、周辺ヘラケズリが主体である。特徴的な佐波理模倣焼の蓋や円面硯を伴う。武藏国分寺創建期にあたる、鳩山Ⅲ期に併行する時期である。

II期（8世紀後半～末葉） 遺構の分布は調査区の全域に広がり、第1・9・11号住居跡と集落域の南限を画する第2号溝跡が該当する。須恵器坏は口径13cm台が主体で、底部回転糸切り離し後、周辺ヘラケズリ再調整を施す。土師器甕はくの字状口縁の武藏型甕が伴い、次期にはコの字状口縁甕が出現する。集落の発展期にあたり、鳩山Ⅳ期に併行する時期である。

III期（9世紀初頭～前半） 第3・4・7号住居跡が該当する。須恵器坏は口径12cm台に縮小し、底部回転糸切り離し未調整を主体に、周辺ヘラケズリが少量伴う。なお、II期との間には空白期間が想定されることから、集落の再編期としての位置づけが可能であろう。鳩山V・VI期に概ね併行する時期であるが、鳩山V期は空白期にあたり、鳩山VI期を主体とする。

IV期（9世紀中頃～後半） 第8・12号住居跡が



第60図 奈良・平安時代の遺構変遷図

該当する。須恵器坏は底部回転糸切り離し未調整のみとなり、体部は丸味をもって立ち上がる。底径は口径の2分の1に近づく。武藏国分寺五重塔再建期にあたる、鳩山VII期に併行する時期である。

V期（9世紀後半～末葉） 第2・5号住居跡が該当する。須恵器坏は、前時期と同じく底部調整は回転糸切り離し未調整に集約される。底径は口径の2分の1より小さく、丸味のある体部から口縁を外反肥厚させる。皿、無鉢蓋などが新しく加わる。鳩山VIII期に併行する時期である。

中世の様相 遺跡の西側に越辺川を渡河する鎌倉街道上道が南北に走ることから、陸の道と川の

道の交わる交通の要衝として、川沿いに展開した中世集落と考えられる。建物跡や柵列は検出されなかったが、調査区西側に集中するピット群をはじめ、井戸跡、火葬跡、溝跡、土壙などが検出された。このうち擂鉢形に石を積み上げた堅牢な石組井戸や、四隅に柱を立て、「通柵」の仕口によって結合された横柵で、3枚の板材を縦方向に固定する木組井戸などは、居住者の階層を推定する上で重要な手がかりとなる（鐘方2003）。また、遺物にも交通の要衝に位置することを反映してか、在地産の瓦質土器以外にも常滑産の片口鉢、古瀬戸産の灰釉小皿、備前産の擂鉢など遠隔地から運ばれた製品が目立っている。

引用・参考文献

- 柿沼幹夫 2006 「岩鼻式土器について」『土曜考古』第30号 土曜考古学研究会
 鐘方正樹 2003 『井戸の考古学』 同成社
 渡辺 一 1990 『鳩山窯跡群II』 鳩山窯跡群発掘調査報告書第2冊—窯跡編(2)— 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会